

木船西遺跡Ⅱ

木船西遺跡Ⅱ

一級市道俗明玉名線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

玉名市文化財調査報告
四十五集

二〇二〇

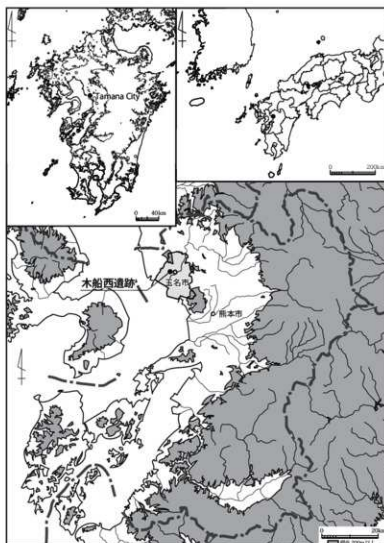
玉名市教育委員会

2020

玉名市教育委員会

木船西遺跡Ⅱ

一級市道岱明玉名線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



令和2（2020）年2月
玉名市教育委員会

刊行のことば

玉名市は、旧石器時代から今日に至るまで長い歴史を持ち、豊富な文化財が所在する地域です。九州新幹線の開業後、県北部における政治経済産業・教育文化・観光の中心都市としてさらなる発展を続けています。

このような中、玉名市教育委員会では、さまざまな開発事業との調整を図り、発掘調査等の円滑な遂行に努めております。公共及び民間のさまざまな事業に対応するため、常に玉名市内に所在する文化財の状況把握に取り組み、文化財行政の改善・充実に努力しているところであります。また、その成果の公開・活用を通じて、広く教育・文化の発展に寄与できればと考えております。

本書は、市道俗明玉名線道路改良工事に伴い、玉名市教育委員会が平成29年度に実施した、木船西遺跡Ⅳ区の発掘調査報告書です。

本書が市民の方々の埋蔵文化財に対する理解の一助となり、また、学術研究にも広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査、報告書作成にあたって各方面で多くの方々にご指導、ご助力を賜ったことに厚くお礼申し上げます。

令和2年2月28日

玉名市教育委員会
教育長 池田 誠一

例 言

1. 本書は、熊本県玉名市信明町野口・下前原に所在する木船西遺跡IV区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、一級市道信明玉名線道路改良事業に伴い玉名市建設部建設課からの受託事業として玉名市教育委員会教育部文化課が実施した。
3. 発掘調査は、宇田員将、古森政次が担当した。
4. 発掘調査前の基準点・水準点測量は株式会社 有明測量開発社に業務委託した。
5. 空中写真撮影は、九州航空株式会社に業務委託した。
6. 発掘調査時の実測図作成は、現場作業員の協力のもと宇田、古森が行った。
7. 発掘調査時の写真撮影は、宇田が行った。
8. 遺物の整理及び報告書作成作業は、平成30年度・平成31年度に実施した
9. 遺物実測は菊池直樹、古森政次、尾崎延枝、五野富美子、佃 智子、福島和江が行った。
10. 遺構図の製図は、宇田、古森、菊池が行った。
11. 遺物実測図の製図は宇田、古森、菊池が行った。
12. 遺物の写真撮影は宇田が行った。
13. 挿図に使用している座標値は、世界測地系の第2座標系に基づいており、方位は座標北を示す。
14. 土層及び遺物の色調は、「新版標準土色帖」（日本色研事業株式会社発行）に基づいている。
15. 本書の執筆は、宇田（第1章、第3章、第5章）古森（第4章第1節、附編）菊池（第2章、第4章第2節）が行い、編集は、宇田が行った。
16. 出土遺物は、玉名市文化財整理室で保管している。

凡 例

1. 遺跡の略号は、木船西（KBN）とした。
2. 現地での実測図は、以下の縮尺で作成した。
【遺構実測図】 1/20
【遺物出土状況図】 1/10 又は 1/20
3. 出土遺物の実測は、1/1 で作成した。
4. 本書掲載の際の縮尺は図内のスケールで示している。写真図版に関してはおおよその縮尺を下記の通り合わせて掲載している。土器は約 1/2、瓦は約 1/3（図版 35 はほぼ実寸）、石器は約 3/4（図版 45 は約 1/2）
5. 本書に記している座標値は、平面直角座標系Ⅱを基準とした数値であり、方位北は座標北を示す。
6. 本書に記している遺構記号 SD は溝、SK は土坑を意味する。

本文目次

刊行のことば

本文目次・挿図目次・表目次・写真目次

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯…………… 1

第2節 調査の組織…………… 2

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 地理的環境…………… 3

第2節 歴史的環境…………… 4

第Ⅲ章 調査の方法

第1節 調査の方法…………… 10

第2節 整理作業の方法…………… 10

第Ⅳ章 調査の成果

第1節 遺跡の周辺環境の変遷…………… 11

第2節 遺構と遺物…………… 22

第Ⅴ章 調査の総括

第1節 はじめに…………… 66

第2節 弥生時代の木船西遺跡…………… 66

第3節 中近世の木船西遺跡…………… 68

附編 木船西遺跡第Ⅳ区出土の弥生時代石器群について…………… 72

遺物観察表

写真図版・報告書抄録・奥付

挿図目次

第1図	周辺主要遺跡位置図 (S=1/10000) …	8	第30図	SK29 実測図 (S=1/40) …	42
第2図	土層図作成位置図 …	13	第31図	SK29 出土遺物実測図 1 …	43
第3図	調査区西壁土層図 (土層図 A・B) …	15	第32図	SK29 出土遺物実測図 2 …	44
第4図	調査区西壁土層図 (土層図 C・D) …	16	第33図	SK29 出土遺物実測図 3 …	45
第5図	調査区西壁土層図 (土層図 E) …	17	第34図	SK29 出土遺物実測図 4 …	46
第6図	調査区西壁土層図 (土層図 F) …	18	第35図	SK29 出土遺物実測図 5 …	47
第7図	調査区東壁土層図 …	19	第36図	SK29 出土遺物実測図 6 …	48
第8図	調査区南壁土層図 …	20	第37図	SK29 出土遺物実測図 7 …	49
第9図	遺構配置図 …	23	第38図	E8 トレンチ出土遺物実測図 1 …	50
第10図	SD01 実測図 (S=1/40) …	24	第39図	E8 トレンチ出土遺物実測図 2 …	51
第11図	SD01 出土遺物実測図 …	24	第40図	E8 トレンチ出土遺物実測図 3 …	52
第12図	SK08 実測図 (S=1/40) …	25	第41図	E8 トレンチ出土遺物実測図 4 …	53
第13図	SK08 出土遺物実測図 …	26	第42図	調査区北側道路状 遺構周辺平面図 (S=1/120) …	54
第14図	SK11 実測図 (S=1/40) …	27	第43図	道路状遺構土層断面図 (S=1/40) …	55
第15図	SK11 出土遺物実測図 1 …	27	第44図	SD32 土層断面図 (S=1/40) …	55
第16図	SK11 出土遺物実測図 2 …	28	第45図	SD10・SD32 出土遺物実測図 …	55
第17図	SK26 実測図 (S=1/40) …	29	第46図	SK12 出土遺物実測図 1 …	56
第18図	SK26 出土遺物実測図 …	30	第47図	SK12 出土遺物実測図 2 …	57
第19図	SD27 実測図 (S=1/40) …	31	第48図	SK33 実測図 (S=1/40) …	58
第20図	SD27 出土遺物実測図 1 …	32	第49図	E8 炭化物層出土遺物実測図 1 …	59
第21図	SD27 出土遺物実測図 2 …	33	第50図	E8 炭化物層出土遺物実測図 2 …	60
第22図	SD27 出土遺物実測図 3 …	34	第51図	E8 炭化物層出土遺物実測図 3 …	61
第23図	SD27 出土遺物実測図 4 …	35	第52図	E8 炭化物層下面出土遺物実測図 …	62
第24図	SD27 出土遺物実測図 5 …	36	第53図	E8・E9 包含層出土遺物実測図 …	63
第25図	SD27 出土遺物実測図 6 …	37	第54図	包含層出土遺物実測図 …	64
第26図	SD27 出土遺物実測図 7 …	38	第55図	SK34・SK35 馬骨出土状況実測図 …	65
第27図	SD27 出土遺物実測図 8 …	39	第56図	木船西遺跡弥生時代後期遺構配置図 …	67
第28図	SD27 出土遺物実測図 9 …	40	第57図	木船西遺跡 SD32 流路と溜池復元図 …	69
第29図	SD27 出土遺物実測図 10 …	41			

図版目次

- 図版 1 木船西遺跡上空からみた有明海と雲仙
木船西遺跡上空からみた玉名市街地と
玉名平野
- 図版 2 木船西遺跡上空からみた菊池川と金峰山
木船西遺跡上空からみた玉名市街地と
小岱山
- 図版 3 木船西遺跡IV区全景
木船西遺跡全景（I区～IV区）
- 図版 4 SD01 遺物出土状況（東から）
SD01 完掘状況（南東から）
- 図版 5 SK08 遺物出土状況・土層断面（北東から）
SK08 完掘状況（北から）
- 図版 6 SK11 土層断面（北から）
SK11 遺物出土状況（南東から）
- 図版 7 SK11 遺物出土状況 近景（東から）
SK13 土層断面（西から）
- 図版 8 SK26 土層断面（南東から）
SK26 遺物出土状況（南東から）
- 図版 9 SK26 完掘状況（南東から）
SD27・SK29 遺物出土状況（南西から）
- 図版 10 SD27・SK29 遺物出土状況（北東から）
SD27 完掘状況（東から）
- 図版 11 SK29 遺物出土状況（東から）
SK29 完掘状況（東から）
- 図版 12 SD32 土層断面（南から）
SD32 完掘状況（北西から）
- 図版 13 SK29、SD32、SK33 完掘状況（南から）
SK33 完掘状況（東から）
- 図版 14 石垣検出状況（南東から）
石垣検出状況（南西から）
- 図版 15 調査区北側道路状遺構検出状況（北西から）
調査区北側道路状
遺構断ち割り断面（北西から）
- 図版 16 調査区南側粘土抜き取り
土坑完掘状況（北から）
C5・D5・6 グリッド検出
道路状遺構検出状況（南から）
- 図版 17 SD01 出土遺物
- 図版 18 SK08 出土遺物
- 図版 19 SK11 出土遺物・SK26 出土遺物 1
- 図版 20 SK26 出土遺物 2・SD27 出土遺物 1
- 図版 21 SD27 出土遺物 2
- 図版 22 SD27 出土遺物 3
- 図版 23 SD27 出土遺物 4
- 図版 24 SD27 出土遺物 5
- 図版 25 SD27 出土遺物 6
- 図版 26 SD27 出土遺物 7
- 図版 27 SD27 出土遺物 8
- 図版 28 SD27 出土遺物 9
- 図版 29 SD27 出土遺物 10
- 図版 30 SD27 出土遺物 11
- 図版 31 SK29 出土遺物 1
- 図版 32 SK29 出土遺物 2
- 図版 33 SK29 出土遺物 3
- 図版 34 SK29 出土遺物 4
- 図版 35 SK29 出土遺物 5
- 図版 36 E8 トレンチ 出土遺物 1
- 図版 37 E8 トレンチ 出土遺物 2
- 図版 38 E8 トレンチ 出土遺物 3
- 図版 39 E8 トレンチ 出土遺物 4
E8 炭化物層下出土遺物 1
- 図版 40 E8 炭化物層下出土遺物 2
- 図版 41 SD10 出土遺物・SD32 出土遺物・
SK12 出土遺物
- 図版 42 SK12 出土遺物・炭化物層出土遺物 1
- 図版 43 炭化物層出土遺物 2・包含層出土遺物
- 図版 44 SK11 出土遺物（石器）・SK26 出土遺物（石
器）・SD27 出土遺物（石器） 1
- 図版 45 SK29 出土遺物（石器）
- 図版 46 SD27 出土遺物（石器）1・SK12 出土遺物（石
器）・包含層出土遺物（石器） 1
- 図版 47 包含層出土遺物（石器） 2
- 図版 48 木船西遺跡IV区出土窯焼成関連遺物
SK35 出土馬骨

表目次

第1表 木船西遺跡周辺遺跡一覽……………	9	第4表 木船西遺跡IV区土製品觀察表 ……	85
第2表 木船西遺跡I・III区出土 剝片石器組成表……………	79	第5表 木船西遺跡IV区瓦觀察表 ……	86
第3表 木船西遺跡IV区土器觀察表 ……	80	第6表 木船西遺跡IV区石器觀察表 ……	87

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

【事業計画の概要】

現在、玉名市には国道501号と県道長洲玉名線を経て、国道208号を南北に結ぶ幹線道路がなく、長洲港、名石浜工業団地、九州新幹線新玉名駅及び九州自動車道菊水インターチェンジ等の主要な交通結節点とのアクセスが容易ではなかった。当該の道路を整備することにより、主要な交通の結節点を結ぶ道路として、また物流及び交流の活性化に寄与するものとして、一級市道岱明玉名線道路改良事業が計画された。

【埋蔵文化財保護部局への照会・調整】

平成17年10月21日、市道岱明玉名線道路改良事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて、玉名市土木課、岱明総合支所建設課及び文化課との間で第1回目の協議が行われた。協議では、計画路線が周知の埋蔵文化財包蔵地（大原遺跡、木船西遺跡、塚原遺跡）にかかっている事が確認され、今後のスケジュールについて、用地購入後に確認調査を実施することとした。文化課からは、本調査が必要となった場合については、確認調査の結果次第ではあるが、新幹線新玉名駅周辺整備に伴う発掘調査と予定が重なるため、対応が困難であることが説明された。また、一般的な事業の進め方及び調査費用についての説明を行い、今後も双方連絡を取り合いながら、事業を進めていくことを確認した。確認調査については、新幹線新玉名駅周辺整備に伴う埋蔵文化財発掘調査及びそれに伴う整理作業及び報告書作成、並びに市町村合併に伴う市指定文化財の見直し業務等があり、直ちに実施できなかった。その後、平成20年度から21年度と平成29年度に確認調査を実施し、木船西遺跡をⅠ区からⅣ区にわけて本調査を行うこととなった。

【木船西遺跡Ⅰ区～Ⅲ区調査】

平成20年度から平成21年度にわたる確認調査の結果を踏まえ木船西遺跡Ⅰ区（平成23年10月から平成24年3月まで）、Ⅱ区（平成24年4月から5月まで）、Ⅲ区（平成24年6月から10月まで）の調査が実施された。木船西遺跡Ⅰ区～Ⅲ区では弥生時代中期の竪穴建物跡が3基、土坑が30基、弥生時代後期の竪穴建物跡52基、土坑1基、方形溝遺構1基、中世の祭祀遺構1基、時期不明の竪穴建物跡2基、土坑36基、溝状遺構2基を検出している。遺跡の主体は弥生時代後期であり、遺構は木船西遺跡Ⅰ区に集中している。

弥生時代中期の遺構で特徴的なのは床面直上で石鏝（未製品含む）や剥片が多量に検出された円形竪穴建物Ⅰ区S68である。このⅠ区S68は出土状況から石器製作の工房として利用されていたと考えられている。

弥生時代後期では52基ものベッド状遺構を伴う竪穴建物が重複して検出されている。中でも焼土や炭化材が検出され、焼土竪穴建物と考えられるⅠ区S65、埋土内から破鏡が出土したⅠ区S42、同じく埋土内からガラス小玉が出土したⅠ区S05、S22、S28、S34、S62、Ⅱ区S09などが特徴的である。埋土中から出土した破鏡やガラス小玉は竪穴建物を廃絶する際の祭祀の可能性が考えられる。その他にも竪穴建物からは斧、鎌、刀子及びヤリガンナなどの鉄器も多く出土しており、その数は49点にのぼる。注目すべきは鉄器に関しては鏝が少なく農具類が多く出土しているのに対し石器では鏝が多く出土している点である。これは用途によって素材を選別し作成していたと考えられるが、この点に関しては石製農具から鉄製農具への移行と考える見方もある。また鉄器類の出土に呼応するように砂岩製の砥石類も一定量出土している。その他、Ⅰ区S46からは石製勾玉が出土しており、ガラス小玉や破鏡と同様に当時の交易や技術伝播を考えると重要な資料となっている。

中世の遺構は、土坑内に土師器皿を置き土師器羽釜を被せた状態で検出されたⅢ区S15である。状況から地鎮的な祭祀遺構と考えられるが、S15周辺には中世期の建物跡などはなく、この遺構の性格に関しては不明となっている。

そのほか、Ⅰ区S68と同様に調査区全体の範囲で包含層からも多くの未製品の石器や剥片が出土している。時期は明確ではないが、少なくともⅠ区S68の時期である弥生時代中期から継続して石器製作が木船西遺跡Ⅰ区～Ⅲ区を含む周辺で行われていたと考えられる。

【木船西遺跡Ⅳ区確認調査（平成29年2月実施分）】

平成29年2月に実施された確認調査では北側に3本、南側に4本の計7本のトレンチを設定した。木船西遺跡Ⅲ区に隣接する北側範囲に設定した1トレンチでは表土から0.3mほど下にコンクリート基礎が埋設され、その直下には石垣も埋設していた。また、コンクリート基礎から更に1m下では土坑状の遺構などを検出した。2トレンチも同様に表土から0.3m下でコンクリート基礎、そこから1m下で土坑状の遺構を検出した。遺構時期は出土した遺物から弥生時代中期から後期と考えられた。南側範囲に設定された5トレンチでは表土から0.8m下で水路状の遺構とその水路を切る状態で土坑状の遺構などが確認された。遺物はほとんど見られず時期は不明であった。以上の結果からこの確認調査範囲では木船西遺跡Ⅰ区～Ⅲ区に関連する遺構が埋設している可能性があり、本調査が必要であると判断された。

第2節 調査の組織

平成29年度

調査主体	玉名市教育委員会							
調査責任	教育長	池田誠一						
調査総括	教育部長	戸壽孝司						
	文化課長	竹田宏司						
庶務担当	文化財係長	田中康雄						
	主査	中村安宏						
調査担当	技術主任	宇田員将						
	埋蔵文化財調査員	古森政次						
発掘作業員								
	荒木征子	荒木康利	石松智子	今田徳克	大島武士	北島百合子	古藤文彦	志水博子
	谷口洋介	谷畑信行	田畑芳郎	徳永周三	徳山尚登	前川直美	南本勝剛	三宅和昭
	宮崎宏紀	柳田一衛						
整理作業員								
	櫻木裕子	北島百合子 前川直美						

平成30年度

調査主体	玉名市教育委員会						
調査責任	教育長	池田誠一					
調査総括	教育部長	戸壽孝司					
	文化課長	松田智文					
庶務担当	文化財係長	田中康雄					
	主査	中村安宏					
整理担当	主査	菊池直樹					
整理作業員							
	尾崎延枝	五野富美子 坂崎郷子 佃 智子 福島和江					

平成31年度(2019年度)

調査主体	玉名市教育委員会						
調査責任	教育長	池田誠一					
調査総括	教育部長	西村則義					
	文化課長	松田智文					
庶務担当	文化課長補佐	田中康雄					
	主査	中村安宏					
整理担当	主査	菊池直樹					
	技術主任	宇田員将					

第2章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

玉名市は、熊本県の北部に位置する面積 152 平方キロメートル、人口約 6 万 7 千人の地方都市である。市域は熊本県北部を有明海に向かって流れる菊池川下流域を占め、九州最大の内湾である有明海中央部に面している。市域中央部を流れる菊池川は、南に向かって貫流し、その周辺には、菊池川とその支流の繁根木川、木葉川によって形成された玉名平野が広がる。平野の三方を山地・丘陵地等に囲まれ、平野と接する丘陵末端部に多くの集落が形成されている。特に小岱山地・丘陵地及びこれに続く段丘の発達する台地である玉名台地上に市街地が発達している。平野の前縁部は、江戸時代以降から現代にいたる広大な干拓地が広がり、有明海と接している。

玉名平野は菊池川流域の下流部の標高 10m 以下にあって、東西 9km、南北 15km の広がりを持つ沖積平野である。その大部分が水田等の耕作地として利用されている。玉名平野の周辺の台地、丘陵や山地は段丘堆積物、阿蘇Ⅳ火砕流堆積物、新第三紀火山岩、白亜紀の玉名花崗岩類からなる。

玉名平野の北西側は筒ヶ岳（標高 501m）を主峰とする小岱山地・丘陵地及びこれに続く段丘の発達する台地がみられる。また、北部では繁根木川をはさんで小岱山地に面した白間山地と接している。

小岱山地と白間山地には、中生代白亜紀の玉名花崗岩が分布するが、両山地は花崗岩が風化するによりなだらかな山容を呈する。この花崗岩体はチタン鉄鉱系の花崗岩であり、その砂鉄は古代から中世にかけてのタタラ製鉄に使用されている。また、花崗岩も古墳の石材や石積用の石材として利用されている。

玉名平野東部は、木葉川を境として北に広がり国見山（標高 383m 山鹿市鹿央町）を主峰とする国見山山地の丘陵及びその南端部に位置する木葉山（標高 286m）と接している。国見山、木葉山一帯は中生代の木葉川変成岩類からなっており、木葉川変成岩類は、主に石英片岩や雲母片岩からなり、一部に石灰岩の分布もみられる。片岩類は小岱山地の花崗岩に比べ風化に強いため急峻な山容をなし、弥生時代に石包丁や石戈などの石器に利用されている。

玉名平野南側から南東部にかけては、金峰火山群の熊野岳（二ノ岳 標高 685m）、三ノ岳（標高 681m）を主峰とする金峰山地とこれに続く丘陵地帯に接している。金峰山系の凝灰角礫岩の岩質は、輝石安山岩である（角閃石安山岩）。

この凝灰角礫岩を火砕流堆積物が覆うように堆積している（火砕流堆積物が上位に重なる）。噴出時期は金峰山系が新第三紀鮮新世で、これを覆う火砕流が第四紀である。また、周辺の遺跡では、阿蘇の火砕流の中で最も大規模噴火であった阿蘇Ⅳ火砕流の溶結凝灰岩や金峰山系輝石安山岩（角閃石安山岩）はしばしば石材として使用されている。

玉名平野は山地に囲まれるが、これらの地質構造的背景は北側から東側と南側では大きく異なる。北側から東側にかけては筑肥山地の南縁にあたり、三畳紀からジュラ紀にかけて変成をうけた周防変成岩類やそれに白亜紀に貫入した花崗岩といった基盤岩類が分布し、その周辺に第四紀の段丘が発達する。一方で、南側は新生代後期の金峰山火山に伴う崩壊堆積物や安山岩などが分布しており、溺れ谷が発達する。

菊池川より西側の山地は古い基盤岩類が露出して山塊をなしており、周囲に段丘が発達することから地盤が隆起傾向にあることが窺えるが、一方、南側の山地は基盤岩類は露出しておらず、新しい火山岩類が分布し、段丘は沖積層下に没している上に溺れ谷が発達することから地盤が沈降傾向にあることがわかる。金峰山といったマグマの噴出も地殻の伸延の場であることを示し、重力異常も菊池川の西側と東側で負の異常を示し、地殻が薄く、沈降地帯であることを示す。このように玉名平野は氷期の浸食谷を沖積層が充填しただけでなく、構造的に沈降する堆積盆地としての側面も持ち合わせている。

阿蘇Ⅳ火砕流堆積物は、ほぼ全域に点在してみられるが、南側は沖積層に没している部分も多く、地表における分布は北から東側にかけてであり、主に谷間を充填するように分布する。石材としての利用は北側の菊池川右岸の露出地が主である。

玉名平野は菊池川流域の沖積平野であるが、玉名市高瀬付近に狭窄部をもち、これを境に上流側の谷底平野の自然堤防帯と下流側の三角州平野に二分される。現在の標高は 4.8 ～ 6.0m 程度である。

長岡ほか(1997)は沖積層を層相(堆積層もしくは岩相)により、基底礫層、砂層より構成される下部層、粘土・シルトより構成される中部層、砂層より構成される上部層に分類している。中部層までは海進期の主に海成の堆積物であり、上部層は海退期に形成された三角洲の堆積物である。沖積層の研究から明らかにされる玉名平野域の環境変遷は以下の通りである。

縄文海進により高瀬の狭窄部の南側は、最終氷期の開析谷から開放的な浅海へと変化したとみられる。この時に、境川から繁根木あたりの開析谷の出口に浜堤砂州が溺れ谷を塞ぐように形成されている。尾崎貝塚はこの浜堤砂州に立地する。高瀬の狭窄部の北側の谷底平野は湖～低湿地となり、縄文時代後期まで潮汐により海水の影響を受ける水域であったとみられる。マガキなどの干潟の貝類は高瀬の狭窄部より上流側には分布しなかったとみられる。

縄文中期以降、断続的な海退と小規模な海進が繰り返して起こった。縄文中期以降の海退で内湾が潮汐干潟となることにより貝塚が当時の海岸線であった台地周辺に形成された。また、海退期には菊池川デルタが前進し海域の埋め立てが進むだけでなく、有明海に流出した砂礫は潮流により滑石の浜堤砂州の形成を促したとみられる。この砂州は玉名平野にあった海域を閉鎖し、ラグーンを形成したとみられる。滑石の浜堤砂州は大きく2時期に形成されている。岱明沖の沖洲、竈頭洲も有明海の潮流により形成された砂州である。横島島と滑石の浜堤砂州により閉鎖された海域は、縄文晩期から弥生時代にかけての弥生の小海退時に菊池川河道周辺は埋め立てられて潮汐干潟から氾濫原へ変化し、河道から離れた台地縁辺(大野牟田域と尾田川流域)には海跡湖が残された。

弥生の小海退時に形成された埋積浅谷は、縄文晩期から弥生前期の水田がつくられる地形であったが、その後の弥生時代中期以降の小規模な海面上昇により埋められる。柳町遺跡で弥生時代早期の土器が出土している自然流路があるが、これらの自然流路も小海退に伴う埋積浅谷の可能性がある。弥生時代中期、古墳時代、奈良～平安のいわゆる“中世の温暖期”にそれぞれ海水準の上昇があり、低湿な地域ではこれらの影響を受けて地形や環境が変化する。

弥生時代から古代にかけては台地や微高地付近の低地や谷が水田として開拓されたとみられるが、古代から中世にかけては高瀬狭窄部北側の谷底平野の開拓が始まり玉名牟田、梅林牟田に姿を変える。また近世初期にかけてかつての海跡湖周辺の干拓が行われた(大野牟田、尾田牟田)。江戸時代の人口増加に伴い山間部の伐採と開発が拡大するが、土砂流出の増大に伴い有明海へ向って菊池川デルタがさらに前進し、潮汐干潟が有明海側に拡大した。アサリが増えてくるのもこの時期である。この潮汐干潟は近世後期から近代にかけて大規模干拓し、現在の広大な玉名の臨海農業地帯が形成された。

第2節 歴史的環境

塚原遺跡周辺には縄文時代から中世にかけての遺跡が濃密に分布しているが、その大半は踏査による分布調査により確認されたものでその内容が明確に把握されているものは少ない。

木船西遺跡周辺は弥生時代の遺跡の集中地帯であり、今回の岱明玉名線に伴う埋蔵文化財調査により大原遺跡、木船西遺跡、塚原遺跡の調査により新たに情報が追加されつつある。以下に周辺の遺跡について時代ごとに記述するとともに歴史的環境について述べる。

本地域に人類の活動の痕跡がみられ始めるのは旧石器時代である。岱明町域の玉名台地は、9万年前に噴出した阿蘇IV火砕流堆積物を被覆する岱明層から構成される中位段丘である。本地域はAT火山灰層もみられ、旧石器時代の人類の活動を記録している可能性が高い。木船西遺跡北方の南大門遺跡では枝去木型の台形椀石器が後世の遺構埋土より出土している。さらにサヌカイト製ナイフ形石器が備中原遺跡から表面採集されている。他にも今泉遺跡、年の神遺跡でそれぞれ、ナイフ形石器が発見されている。現状としては表採、包含層資料であり、今後層序的な調査によって資料が追加されることが望まれる。

縄文時代の遺物としては塚原遺跡周辺の黒色土層や黒褐色土層より縄文時代早期の押型文土器片が少ないながら得られおり、岱明町大野下の目倉尾遺跡からも押型文土器が出土している。また、海底遺跡として知られる長洲町のヒイデン洲遺跡からも押型文土器が多く知られており、押型文土器が隆盛する約8000年前頃の海水面は、現在よりも約15mほど低かったとみられ、菊池川流域は台地とそれを開析する谷からなる地形であったとみられる。菊池川流域は縄文海進が最高潮

となる前期以前にも人が生活する場であったことがうかがえる。

縄文前期には縄文海進により最終氷期の開析谷に海が浸入し、溺れ谷・内湾と化した。海進最高位を記録する約6000年前の海水面は、現在よりも3～5mほど高かったとみられる。その後、徐々に海退が進み内湾は潮汐干潟と化した。このような環境変化に伴い、台地東端部に尾崎貝塚(第1図468)、浜田貝塚、庄司貝塚、古閑原貝塚といった貝塚が形成された。これらの貝塚は、縄文中期後半から末の阿高式土器の時期に形成されている。浜田貝塚については調査が無く詳細な時期は不明である。これらの貝塚は組成的には多様な貝類が出土するが、量的な比率をみるとマガキが占有しており、主要な利用貝類はマガキとみられ、その他の貝類は補助的な利用、そして混獲によりもたらされたものとみられる。この中でも俗明町の古閑原貝塚では1948年の玉名高校考古学部の調査により阿高式土器に伴って炭化米が確認されている。近年、阿高式土器の時期にイネが存在したことを示す事実が確認されてきている。この他に、西松手遺跡(古閑遺跡・包蔵地)から、縄文土器、石器などが出土している。中西土・山下西遺跡では後期・晩期の土器が確認されている。玉名糸里跡・下河原地区では、縄文時代の土器が早期から晩期までみられ、境川流域の低地周辺において縄文時代を通して生活拠点が存続していたことを示している。

縄文晩期から弥生時代前期にかけては小海退が起こり、沖積低地が開析され、谷ができた。その後の海進によりこれらの谷は埋積され、埋没浅谷として地層中に記録されている。弥生時代はじめは早期の夜白式土器と前期の板付式に特徴づけられ、水田稲作の痕跡が明確に確認できる時期である。柳町遺跡からは、水田は確認されていないが板付式と夜白式土器が自然流路より出土しており、菊池川流域でも稲作が開始された可能性が高い。前期の遺跡としては、県下初の弥生前期貝塚発掘例となった、俗明町山下の中道遺跡がある。県立玉名高校考古学部によって、昭和27年に調査が行われた。遺跡は台地縁の畑地内にあり、崖面に貝層が露出していた。貝はカキ殻を中心に獣骨・魚骨などの動物遺存体、土器、石器類などとともに、炭化米が数十粒採取された。玉名糸里跡・下河原地区では、弥生前期の土器が確認されており、境川の低地部でも弥生人の活動があったことがわかる。

玉名市内で弥生遺跡が増大するのは、弥生中期頃からである。熊本県唯一の弥生水田は両迫間日渡遺跡から確認されている。俗明地域における当該期の遺跡としては、年の神貝塚(中期)、年の神西平貝塚(中～後期)などが知られている。年の神遺跡にはゴホウラ製貝輪が出土した支石墓もあり、海上交易の中継地であり、拠点集落であったとみられている。塚原遺跡は俗明町野口塚原に所在し、環濠・円形の大型堅穴建物跡・豊棺墓などが確認されており、木船西遺跡でも弥生中期初頭の住居・土坑が確認されている。東南大門遺跡では、豊棺墓が42基確認されており、弥生中期から本格的に集落が展開し始めたことがうかがえる。

弥生時代後期の遺跡としては、塚原遺跡、木船西遺跡、大原遺跡があり、ともに集落として存続しており、豊富な鉄製品に加え、大原遺跡では青銅鏡、玉類などの祭祀に係る遺物の出土もみられ、別地点においては、箱式石棺群や大型の木棺墓も確認されている。俗明地域における拠点集落の様相を見せている。

木船西遺跡の西に隣接する下前原遺跡においては、弥生時代後期の集落跡が確認されており、境川東岸の台地上では高岡原遺跡が知られる。

弥生時代後期の集落は主に台地上に展開していたが、布留式土器を伴う古墳時代前期の集落は柳町遺跡の様に沖積低地部にも展開し始める。一方で、台地上に展開した拠点集落は終焉を迎え、集落の再編がみられる。

俗明地域では古墳時代初頭まで大原遺跡が存続するが、これらの大集落は古墳時代前期を前に途絶する。一方で塚原遺跡1区と山下木佐貫遺跡から布留式土器を伴う古墳時代前期の集落跡が確認されており、台地南縁に集落がつけられていた。東南大門遺跡では周溝墓(主体部木棺墓2基)が知られ、布留式併行期の墳墓であろう。

古墳時代前期後半になると玉名地域においても前方後円墳が構築されるようになる。開田の院塚古墳(滅失)は県北の初期に出現した前方後円墳である。続いて5世紀にかけて玉名台地南縁の海岸部に前方後円墳とされる藤光寺古墳が構築されている。塚原遺跡では石棺系石室を主体部とする円墳が確認されており、5世紀代には古墳構築が盛んになったとみられ古墳時代後期にかけて、弁財天古墳、その他にも塚原古墳、浜田吹上古墳、浜田西原古墳参考地が構築された。こ

これらの多くは発掘調査が行われておらず、その内容は明確でない。なお、平成28年度に開発行為に伴い実施した藤光寺古墳における確認調査では、周溝の一部と考えられる溝を確認している。古墳時代後半は、古墳はみられるものの集落跡は現在のところ不明である。境川流域では蓮華遺跡から6世紀後半の集落が確認され、境川対岸の高岡原遺跡では7世紀前半の住居跡が検出されている。7世紀後半からは境川東側の玉名台地上に立願寺、郡家、郡倉などが設置され古代前半における拠点となっていく。

岱明地域における古代期の遺物の出土は認められるが、明確な遺構は非常に少ない。白鳳から奈良時代にかけては近隣の四十九遺跡からは須恵器の骨磁器が出土し、蓮華遺跡からは重弧文軒平瓦が出土している。築地には郡衙に係る遺構が存在した可能性がある。平安時代にかけては、不馬向遺跡の住居跡からは青磁皿等が、簾布遺跡からも青磁碗、土師器などが出土しており、貿易陶磁がもたらされる地域であったとみられる。

岱明地域一帯は、律令制のもと成立した玉名郡の一部にあたるが、11世紀初頭に玉名郡は東郷と西郷に分割されたと考えられており、その後、さらにいくつかの荘園に再編されることになる。当該地一帯は玉名西郷にあたり、その後、管崎八幡宮領の「大野別符」となる。中世期においては、当該地一帯には、多くの城館跡、寺院跡、石造物等が所在するが、これらは当該地の地頭職であった大野氏一族の影響によるものと考えられる。大野氏は「大野別符」を成立させたと思われる紀氏の流れを汲む在地勢力とされ、一帯を支配した。一族は玉名台地一帯に居館を築いて居住しており、築地次郎国秀館跡、中土屋敷跡、陣館跡などが知られる。非常時の詰め城として日嶽城が築かれている。

また境川右岸の台地上には真言律宗の寺院である浄光寺があり、九州でも有数の大寺院であり、広大な寺域を誇っていた。蓮華遺跡では青磁碗を副葬した土坑墓や区画溝等も確認され寺域との関連も考えられる。今見堂遺跡でも青磁碗を副葬した土坑墓が知られている。

台地上の塚原遺跡の遺物包含層からは古代以前の遺物に加え13世紀の貿易陶磁等の中世前期の遺物も多い。また、13世紀頃の区画溝遺構が戦前までの農地地割と一致することも多く、13世紀代に玉名台地上で開拓が広く行われたとみられる。また、塚原遺跡では中世の大溝が16世紀後半に廃絶されており、戦国時代にも農地の整理等が行われた可能性がある。

大野氏は、隣接する野原荘（現荒尾市一帯）の地頭職であった小代氏と対立するようになり、16世紀末に滅亡することとなる。大野氏の滅亡後、龍造寺氏と島津氏との争乱の場となり、多くの寺社等が消失した。一時は九州の大半を切り取った島津氏は豊臣氏の九州征伐により肥後から撤退し、佐々氏、その後、加藤氏が入国し、近世を迎える。

近世を迎えると岱明地域は台地上だけでなく、低湿地、そして三角州頂置部の干潟まで開拓が行われるようになる。広大な農地の整備と共に溜池や用水路、そして低湿地の排水路が整備され、大きく景観が変化したと考えられる。この変化は近代まで継続する。

加藤氏は菊池川下流域の高海面時に潮の影響を受ける低湿地帯を塘によって潮止めし、水路を掘削して排水を行うことにより年田を乾田化し、広大な農地を生み出した。岱明地域の菊池川右岸の水田地帯は大野年田と呼ばれ、加藤氏の時代に低湿な土地から広大な農耕地へと生まれ変わった。中世後半から干拓は始まっていたが大きく進めたのは加藤氏であるとみられる。

江戸時代には細川氏が入国する。肥後は手永制がとられ、藩の許可を取って自力で干拓や水路整備等を行っている。江戸時代初期の干拓は低湿地等の干拓で留まっていたが、19世紀に入ると三角州頂置部の干潟まで開拓が行われるようになり、一気に広大な農地が整備された。そのため用水が不足することとなり、溜池、用水の整備が行われるようになる。岱明地域の干拓は主に手永により四郷開などの干拓が行われ、小岱山山麓の谷に浮田池などの溜池の建設が行われ、加えて、菊池川に井堰を設置して菊池川から取水することにより用水が供給されるようになった。岱明地域の干拓は大正年間まで続く。

明治時代になると大きな変化としては鉄道の敷設があげられる。玉名台地を西に流れ下る行末川流域の谷は活断層に伴う谷地形であり、直線的であるため鉄道敷設に適しており明治24年に九州鉄道の路線が敷設された。鉄道の敷設に伴い路線の盛り土そして分断された水路を地下化する暗渠の設置などが路線沿いの各地で行われている。近代にも干拓地の開拓は継続し、大地主が中心となって行っている。

昭和6年から始まったアジア・太平洋戦争（15年戦争）により、軍需に伴う経済成長により各地に軍需工場や軍事施設の整備が進む。玉名地域では大浜地区に陸軍空港が建設され、戦局が悪化し始めると空襲からの鹿児島本線防衛のために高射砲陣地等も構築され、各地に防空壕が掘削される。また、戦争末期の空襲激化に伴い、玉名地域にも航空機部品の疎開工場が展開されるようになる。そのうち、航空機のギア類を製造していた玉名製作所は玉名市街地からその後、岱明町下前原へと移転し、木船西遺跡IV区にその遺構を残している。

敗戦後はアメリカ合衆国のアジア進出が顕著となり、日本では米軍によるアジア地域における大規模な戦争に伴う特需に起因した高度経済成長が始まり、全国的に大規模な開発事業に伴う土地の造成が行われるようになる。

開発は工業地帯とそのベッドタウンの開発、そして治水のための河川改修、さらに海岸線の改修と港湾整備である。岱明地域はこの流れの中で国によって新産業都市開発地域に指定され、優先的な予算配分により工場の誘致、ベッドタウンの造成などが行われた。これらの開発行為は近世以来の景観を多く変え、現代的な景観をつくりだしたが、中世～近代にかけての土地開発の中でも残された上代の文化財の危機の到来でもあった。工場の誘致に伴い、東北の前期古墳としては最大の院塚古墳が滅失し、鹿児島本線の複線化のためによる土採り工事や団地等の造成などの開発行為により多数の埋蔵文化財が失われることとなった。この中で県内の先達の偉人により発掘調査が行われ、記録の中で残されている。近年では文化財部局により、記録保存により失われる文化財の発掘調査が行われている。

昭和後期から平成にかけて住宅地の開発と道路や新幹線などの交通網の整備へと開発の中心が移り、現代的な都市として玉名市域が整備されていく。特に208号玉名バイパスの建設は玉名台地の市街地化を後押しし、九州新幹線整備は、玉名平野の新玉名駅周辺整備の始まりである。これらの開発行為は現在も進行し、現代的な都市景観の創出が行われる中で、中世以来の伝統的な田園景観との調和が求められ、日本遺産の構成文化財として指定されるに至っている。本調査報告は有明海の湾岸ルートと玉名市市街地とのアクセスルートとしての岱明玉名線建設事業の一環であるが、高度成長期から続いてきた巨大開発とそれに伴う遺跡の記録保存の流れの中の事業である。少子化の中で新たな時代を迎える未来の地域社会において本報告の記録が役立つ時代が訪れることを願う。

参考文献

『熊本県遺跡地図』1998 熊本県教育委員会

『玉名市史 通史篇 上巻・下巻』2005 玉名市

『岱明町史』2005 岱明町

未永 崇 2002 『今見堂遺跡・平町遺跡・蓮華遺跡』

玉名市文化財調査報告第10集 玉名市教育委員会

兵谷有利ほか 2011 『玉名市遺跡地図』玉名市文化財調査報告第26集 玉名市教育委員会

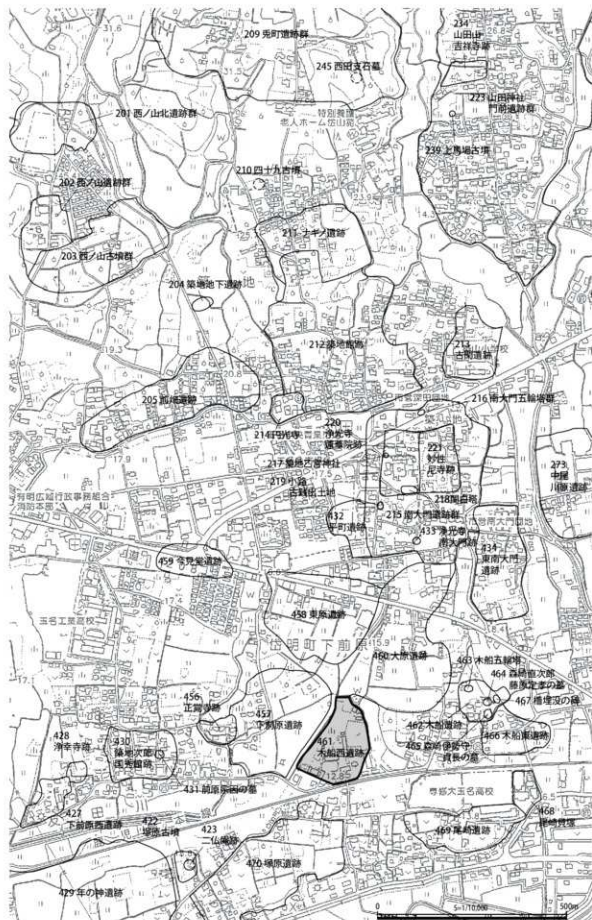
門岡 久 1969 『明治百年記念 岱明町地方史』岱明町役場

長岡信治ほか 1997 『有明海南東岸玉名平野の地形発達史と完新世海面変化』

『地理学評論』Ser.A 70巻5号

荒木隆宏 2010 「玉名平野の考古学」『歴史玉名』52号 玉名歴史研究会

荒木隆宏 2011 「玉名の海と貝塚」『歴史玉名』55号 玉名歴史研究会



第1図 周辺主要遺跡位置図 (S-1/10000)

遺跡番号	名称	種類	時代
201	ニシノヤマキタイセキゲン 西ノ山北遺跡群	包蔵地	旧石器・ 古代～近世
202	ニシノヤマキタイセキゲン 西ノ山遺跡群	包蔵地	旧石器・古代
203	ニシノヤマコフソウゲン 西ノ山古墳群	古墳	古墳
204	ツイジヤケノシタイセキ 築地池下遺跡	包蔵地	弥生～中世
205	マエハタイセキ 前畑遺跡	包蔵地	弥生・古代
209	ウサギマチイセキゲン 兎町遺跡群	包蔵地	弥生
210	シジュウクコフソ 四十九古墳	古墳	古墳
211	ナギノイセキ ナギノ遺跡	包蔵地	古代
212	ツイジヤカタ 築地館跡	城館	古墳・中世
213	コガイセキ 古岡遺跡	包蔵地	弥生
214	エンコウジ 円光寺	寺社	近世・近代
215	ナンダイモンイセキゲン 南大門遺跡群	包蔵地	弥生・古代・中世
216	ナンダイモンゴリソウゲン 南大門五輪塔群	石造物	中世
217	ツイジヤオトミヤジツヤ 築地乙宮神社	寺社	近世・近代
218	カンバクトウ 間白塔	石造物	中世
219	ショウワジセンシユツチ 小路古銭出土地	包蔵地	近世・近代
220	ジョウコウジレンゲン 浄光寺蓮華院跡	寺社	中世
221	ミウショウニジヤト 妙性尼寺跡	寺社	中世
223	ヤマダジツヤモンゼンイセキゲン 山田神社門前遺跡群	包蔵地	弥生～古代
234	ヤマダサンキッシュウジヤト 山田山吉祥寺跡	寺社	中世
239	カミバクコフソ 上馬場古墳	古墳	古墳
245	ニンダシセキボ 西田支石墓	墳墓	弥生
273	ナカカワハライセキ 中尾川原遺跡	生産	古代
422	ツカハラコフソ 塚原古墳	古墳	古墳
423	ニフツアン 二仏庵跡	寺社	中世
427	シモマエバシニシイセキ 下前原西遺跡	包蔵地	古墳
428	ジョウコウジヤト 浄華寺跡	寺社	中世
429	トシノカミイセキ 年の神遺跡	包蔵地	弥生
430	ツイジロウクニシヤカタ 築地次郎国秀館跡	城館	中世

遺跡番号	名称	種類	時代
431	マエハラソウインノハカ 前原宗因の墓	墓	中世
432	ヒラマチイセキ 平町遺跡	包蔵地	古代
433	ジョウコウジナンダイモン 浄光寺南大門跡	寺社	古代
434	ヒガンナンダイモンイセキ 東南大門遺跡	包蔵地	弥生
458	ヒガンハライセキ 東原遺跡	包蔵地	弥生
459	イマミドイセキ 今見堂遺跡	包蔵地	中世
460	オハライセキ 大原遺跡	包蔵地	弥生～中世
461	キブネコイセキ 木船西遺跡	包蔵地	弥生
462	キブネイセキ 木船遺跡	包蔵地	古墳
463	キブネゴリソウ 木船五輪塔	石造物	中世
464	モリスケナジロウツタケタカノ 森崎直次郎藤原定孝の墓	墓	中世
465	モリスケイセノカミサダガノハカ 森崎伊勢守貞長の墓	墓	中世
466	キブネヒガンイセキ 木船東遺跡	包蔵地	弥生
467	オハラマイボツノヒ 榎埋没の碑	石造物	古代
468	オザネカイバ 尾崎貝塚	貝塚	縄文
469	オザネイセキ 尾崎遺跡	包蔵地	弥生～古墳
470	ツカハライセキ 塚原遺跡	包蔵地	弥生

※ 周辺主要遺跡位置図と木船西遺跡周辺遺跡地
図一覧の遺跡番号は『玉海市文化財報告第26
集 玉海市遺跡地図』に掲載されているものと合
わせている。

第1表 木船西遺跡周辺遺跡一覧

第三章 調査の方法

第1節 調査の方法

【発掘区の設定】

発掘区は境界杭から1 m内側とした。発掘区面積の合計は約900㎡である。この発掘区全体を覆う範囲で10 m間隔のグリッドを設定し、南西隅(X = -8220, Y = -43680)から東に向かってAからF、北に向かって1から9までそれぞれ命名し、その組み合わせでグリッド名とした(B2グリッドなど)。ただし、A列、1行のグリッドは予定されていた発掘区から範囲が縮小したため遺構全体図などには反映されていない。なお、挿図に記載している座標値は、平面直角座標系Ⅱを基準とした数値であり、方位北は座標北を示す。

【表土の掘削】

確認調査の結果を参考にして、0.28 m及び0.4 mバックホウによる掘削を行った。掘削で生じた排土については、2t及び4t ダンプトラックを使用して、発掘調査が完了し、埋め戻しが完了した木船西遺跡Ⅰ区～Ⅲ区に設定した排土場に仮置きし、調査終了後にその排土で発掘区の埋め戻しを行った。

【包含層の掘削】

表土の掘削後、移植ゴテを使用して遺物の出土に注意を払いながら包含層の掘削を行った。出土した遺物は、随時、グリッド毎に取り上げた。

【遺構の検出】

包含層の掘削後、三角ホー、移植ゴテを使用して遺構検出面を複数回削り遺構検出を行った。遺構検出時に出土した遺物は随時グリッド毎に取り上げた。その際、包含層掘削時のものと区別するためラベル備考欄に遺構検出時とわかるよう明記した。

【遺構の掘削】

遺構の掘削はプランが明確なものに関しては、埋土観察用のベルトを残し(半裁の場合もある)、随時、埋土観察や写真撮影を行い掘り下げた。プランが明確でない遺構に関してはトレンチを設定し遺構の立ち上がりや埋没状況を確認し、プランを決定した。プランを決定した後はプランが明確な遺構と同様に掘削を行った。出土した遺物については、出土状況に意味がある場合は、そのまま残し、写真撮影及び出土状況の図面を作成した後取り上げたが、それ以外は出土した層位を確認し、ラベルに記入した上で取り上げ、その後、埋土の掘り下げを進めた。

【写真撮影】

通常35mmモノクロ及びカラーリバーサルフィルムを使用した写真撮影に加えデジタルカメラによる撮影も行った。また重要と思われる遺構に関しては中判カメラ(6×7)でモノクロ及びカラーリバーサルフィルムを使用し撮影を行っている。完掘後の空中写真撮影は、外部に委託し6×6サイズにてモノクロ及びカラーリバーサルフィルムを使用して実機による撮影を行った。

第2節 整理作業の方法

【遺物実測】

包含層・遺構内それぞれ、時期的な特徴や遺跡の性格を決める可能性を示す遺物を完形・破片問わず抽出し、接合、石膏で隙間を補完した後、その中から実測するものを選別し、基本的に実寸で実測をおこなった。瓦など器面調整を明瞭にするために、拓本を採ったものもある。

【実測図のトレース】

遺構・遺物実測図はスキャナでデジタル化し、Illustrator CCにてデジタルとトレースを行った。石器に関しては、ロトリングペン・丸ペンでトレースを行った後でスキャナでデジタル化した。

【写真撮影】

遺物の写真撮影はグレーカード、スケールを入れデジタルカメラで撮影し、RAWデータで保存した。保存したRAWデータを現像する際、ホワイトバランスやスケールを補正したTIFFデータで保存し、図版作成時にphotoshop CCにて輪郭を切り取りレイアウトし図版を作成した。

第IV章 調査の成果

第1節 遺跡の周辺環境の変遷

【周辺の地形と調査区】

調査区は玉名台地上にあり、現在は平坦な土地となっている。これは、鹿児島本線大牟田熊本間の開業（明治24年）や現在「有限会社スカラベ九州」社屋のある区画が整地された結果であり、本来の地形とは異なることがわかった。

現在の地形は調査区北側がより高く、南にいくほど低くなるが、調査区の南端付近からはほとんど変わらず、鹿児島本線をまたいでから再び緩やかに低くなっていく。また東西方向では、調査区はほぼ水平であるが、しだいに西から東に緩斜面をなしている。つまり、馬の背の鞍部のような場所にあたる。

このような地形には二つの要因が関係している。ひとつは玉名台地が北から南に緩やかに傾斜していること。いまひとつは東の境川水系と西の友田川水系からの開析谷が当地で出会うとされていることである。このため、雨水により遺跡の表層部分が東西から浸食を受ける。その結果周辺より低地化することが想定される。第IV調査区は、特に西の友田川水系からの浸食が上回っているため、南に向けた斜面上に立地することになる。なお、台地の開析は、玉名台地の基盤となっている岱明層と呼ばれる砂礫粘土層まで及んでいる。

玉名市史によると、岱明層は地質時代第四紀更新世の後半にあたり、約9万年前とされる阿蘇火砕流堆積物（Aso-4）の上に堆積した数メートルの砂礫粘土層で、その上部は赤褐色ロームや黒色土が約50～100cm堆積するという。この黒色土の上層が約1万年前とされる完新世（沖積層）となっている。以下、詳しい土層堆積の状況を記述する。

【岱明層の堆積状況】

調査区の南北方向の堆積状況は調査区西壁で判断した。第3図は調査区南端部にあたるB・C3・4グリッドの西壁の土層図である。土層図Aの19層と土層図Bの10層が岱明層である。玉名市史によれば、岱明層は灰黄褐色や黄褐色を見せる粘土層や砂礫層が交じり合った層とされる。土層図南端から約10mの間、ほぼ水平な堆積状況が続く。この間は灰黄褐色の粘土層となっている。良質の粘土であり、後述するように、粘土探掘の痕跡が発見されている。土層図でもAの15～18層は岱明層と同色系の粘質土層であり、粘土探掘後に周囲の土が粘土と一緒に堆積した層と考えられる。

B4グリッド土層図Bでは岱明層は砂礫層に変わり、標高も次第に高くなる。そして、調査区中央部にあたる第4図上の土層図CのSD01付近で岱明層の上面は最も高い標高となる。その後、同じく調査区中央部にあたる第4図下の土層図D、調査区東端部にあたる第5図の土層図E・第6図の土層図Fでの岱明層は北に行くにつれて次第に標高を減じ、調査区北端にあたる土層図Fでは土層図Aの岱明層とほぼ同じ標高となる。

また、岱明層の東西方向の堆積状況はC・D5グリッド南壁で判断できる。第8図に示したC・D5グリッド南壁土層図では33層が岱明層である。C・D5・6グリッドに造られた近代の道路状遺構および現代の石垣列によって掘削されているものの、調査区西壁土層図Cで観察された最も標高の高い岱明層から東に向かって緩やかに傾斜し、南壁東端付近では東に向かって標高を高くする傾向が観察できた。

岱明層まで掘削が及んでいる遺構としては、先の道路状遺構や石垣列に加えて、D・E5・6・7・8グリッドで南北に走る中世・近世の道路状遺構やE7・8・9で道路状遺構に平行に掘られた同時期の溝（SD32）がある。これらの遺構は岱明層を掘削してはいるものの、本来の地形を改変するような大規模なものではない。それは北に隣接し、2010年度に調査された木船西遺跡Ⅲ区で確認された岱明層（赤褐色ローム）と調査区中央部の土層図Cの岱明層（赤褐色ローム）との比高差が50cmほどであることからわかる。南北方向と東西方向の岱明層の堆積状況から、今回の第IV調査区の本来の地形を復元することができそうである。

【岱明層の状況から想定される旧地形】

見立ては、調査区全域を岱明層まで掘削し標高を計測した。それらをもとに岱明層上面の傾斜を算出、C4・5グリッドの西壁（土層図B・C）近くを除き、全体として南方向へ傾斜している。すなわち、友田川水系の開析谷が今回の第IV調査区の南端で北方向に向きを変えていることが予

想される。したがって、C4・5 グリッドの一部は、友田川水系の開析谷を挟んだ西側の台地になり、第Ⅰ～Ⅲ調査区は東側の台地上に立地していることになる。つまり友田川水系の開析谷と境川水系の開析谷に挟まれて木船西遺跡の本体である第Ⅰ～Ⅲ調査区の住居跡群が存在している。また、今回の第Ⅳ調査区は友田川水系の開析谷の斜面から谷底の部分に当たっている。そして、これら2つの開析谷は、おそらくその谷頭に湧水地点があり、開析が進む原因となったであろう。

【岱明層堆積以後の堆積】

岱明層から現地表面までの堆積層を検討すると、大きく5つの層群に分けることができる。まず、これらのうち4つがわかりやすく理解できるC・D5 グリッド南壁(第8図)で検討する。

客土層群

土層1～3は、花崗岩が風化し、砂土と化した真砂(まさ)土層と黒褐色粘質土の塊が集積する層で、現地表面を形成しており、その中には阿蘇溶結凝灰岩片が混在している。これらの層は整地のため他地域から運ばれた客土と考えられ、有限会社スカラベ九州の社屋がある土地の造成に伴うものであろう。

グライ化層群

土層19、20に代表される灰黄褐色や黄灰色をした粘質土で、水分とともに鉄分を大量に沈着している。遠目には青色に見える。一般にはグライ土壌とも呼ばれ、水分が留まった場所に多く見られる土層である。C・D5・6 グリッドの道路状遺構内に顕著にみられることから、道路であるものの、その後水分が集まり、湿地と化したことを示している可能性が高い。

耕作土層群

土層4、23、24、25、30、31は褐色から暗褐色をした土層で砂利や石粒を多量に含んでおり、水はけがよい層である。これらの層は通常の耕作土とみられる。なお、24、25のように固く締まり、水田の床土と思われる層もあり、水田にも利用されたことが考えられる。

岱明層類似層群

岱明層に類似した土層。【西壁での土層堆積】土層図A参照。

黒色土層群

土層32は黒褐色の粘質土である。下層の岱明層(赤褐色ローム)の石英粒を多く含む。玉名市史によれば、岱明層と上層の沖積層との境界に赤褐色ロームがあり、その上部に黒色土が堆積していることが知られている。C5 グリッドの調査区西壁土層図Cの土層14は黒褐色粘質土であり、この黒色土に近いものであろう。土層32は西から浸食された土が再堆積した層であり、黒色土が弥生時代の遺跡から土器とともに流され、再堆積したものと考えられる。

【西壁での土層堆積】

西壁は約80mの長さがあるため、西から東へA～Fに分割し、それぞれの土層図を作成した。土層図A(B2・3・4グリッド)

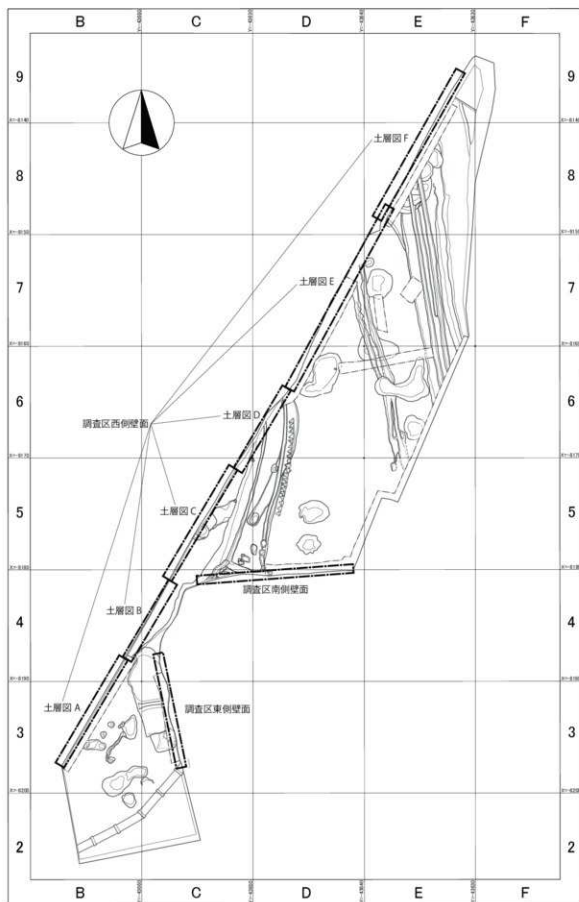
土層1～4および土層9・10は客土層群であり、整地層と考えられる。土層9・10は黒褐色粘質土を塊で多量に含んでいることから、明らかに整地層と考えてよい。ただ、現在の有限会社スカラベ九州の社屋が立地している土地造成に伴うものではなく、どのような原因かは不明であるが、それ以前に行われた整地と考えられる。

土層5～7と土層11～12はグライ化層群と考えられる。水分が多く灰黄褐色やにぶい黄褐色であり、鉄分が枝状に貫入するのが特徴である。土層5～7は客土層群の土層が堆積する以前の地表面であり、その形状はくぼ地であったことを物語っている。土層11・12は、整地層と考えられる土層9・10の下層に堆積し、水分が多いことから湿地であったことがわかる。

土層13～18は、この地点のみで観察できる層である。褐色や黄褐色の粘性の強い粘質土層であり、岱明層を人為的に一段掘り下げた部分に堆積している。後述するように、焼成用の粘土を採掘し、そのあとに堆積した粘質土と考えることができる。当然のこととして水分が強く、鉄分が沈着している。このように岱明層に類似した土層を岱明層類似層群としておく。

土層図B(B2・3・4グリッド)

土層1～3は客土層群の土層である。客土層群の土層は西側ほど厚く、この地点で薄くなっている。土層4は土層図Bで唯一のグライ化層群の土層である。土層5・7は石粒や砂、土器片などを含む耕作土であり、耕作土層群の土層である。土層5は固く締まっており、水田の床土の



第2図 土層図作成位置図

可能性がある。土層 6・8 は黒褐色粘質土の塊を含んでおり、客土層群の一つと考えられる。土層図 A の土層 9・10 や土層図 B の土層 6、それに土層 8 の整地層は近代の陶磁器を出土している C・D5・6 グリッドで検出された道路状遺構より古いことが判明しており、近世あるいは近代の可能性がある。ただ、出土遺物がほとんど無いため、明確ではない。土層 9 は弥生土器片を含んでおり、弥生時代の遺構の埋土であろう。

土層図 C (B2・3・4 グリッド)

土層 1・2 は客土層群の土層である。土層 3・4 は耕作土層群に属する耕作土である。黒色系の色彩が強く、石粒や砂利とともに粘土粒や土器小片も含んでいる。土層 5・6 は柔らかい黒褐色土で粘土粒を含んでいる。土層 5 では弥生時代の土器小片も見られた。土層 5・6 は、通常遺物包含層と呼ばれる層で、遺跡の上を覆っていることが多い。耕作土のような固さがなく、遺跡からの土器片などを多く含んでいることが特徴である。ただ、これらの層は自然に堆積するものではなく、開発などによる土地の削平に伴うものと考えられる。したがって土層 5・6 は二次堆積土層と考え、黒色土層群の土層とする。

土層 7～13 は弥生時代の遺構 SDO1 が埋まっていく過程で堆積した土層で遺構埋土である。また、土層 16～18 は、強風により倒された木が地層を巻き込み横転したため、地層が垂直方向に転位したものである。縄文時代の遺跡でよく検出される。土層 15 は明褐色粘質土で、石英粒をかなり含んだ層である。鉄分の沈着が見られることから岱明層が地表に現れ、水分の影響を受けた再堆積層で、岱明層類似層の土層と考えられる。土層 14 は黒褐色粘質土層で岱明層と間には不整合面は存在しない。おそらく玉名市史で指摘された岱明層上位の赤褐色ロームの上部である黒色土の一部と思われる。したがって、土層図 C では、土層 6 が形成される際に大きな開発行為があり、その後、耕作地に変わっていったことが予想される。

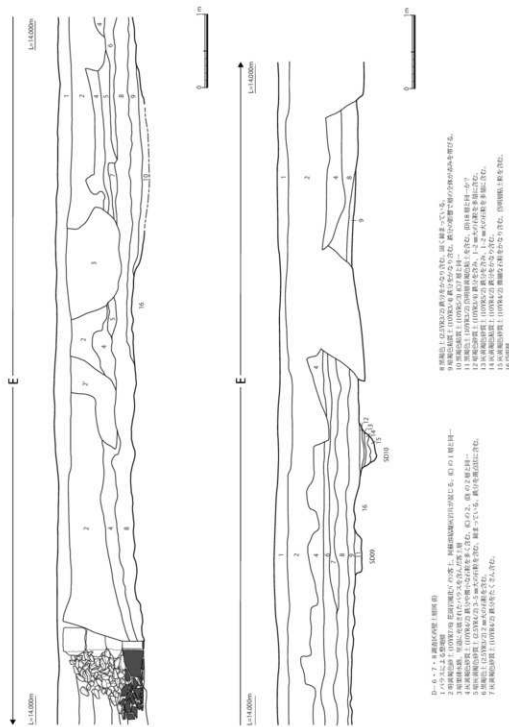
土層図 D (C・D6 グリッド)

土層図 D は、道路状遺構と石垣の土層堆積の様子を表している。道路状遺構は出土遺物から近代と思われる。また、土層観察の結果、石垣は道路状遺構が機能を無くし、埋まっていく過程で道路状遺構に沿い、その東端に築いているようだ。石垣は出土遺物から、おそらく太平洋戦争の後とされる。C・D5 グリッド南壁土層図の 5～13 までは石垣を築いた際の掘方とあと詰めの土層である。これに対応するのが C・D6 グリッド西壁土層図 D の土層 3～10 でこれも石垣の掘方とあと詰めの土層である。両者は道路状遺構の東側に沿ってつながっている。つまり、道路状遺構の東側に石垣を築き、上面を畑として利用したようだ。

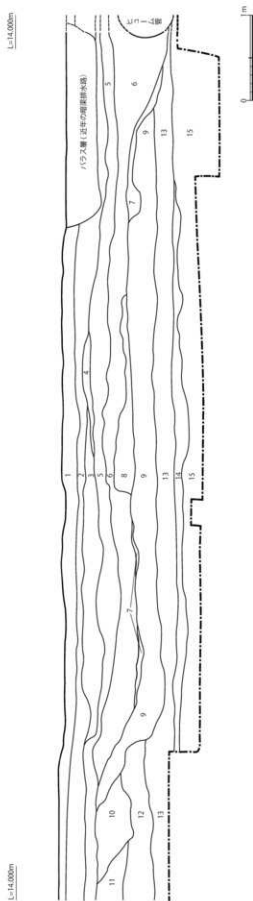
道路状遺構が埋まっていく際の土層は、南壁では土層 14～21、西壁では土層 11～17 である。なお、道路状遺構には側溝があり、西壁土層 18 がそれにあたる。

土層図 E (D6・7・8 グリッド)

土層図 E は、近代の道路状遺構の東端に築かれた石垣と E8 グリッド西壁に築かれた石垣の間の土層図である。その中には中世から近世の道路状遺構が存在する。道路状遺構の側溝と考えられる土層 11 及び土層 12～15 は岱明層から彫り込まれた溝に堆積したものである。したがって道路状遺構は岱明層を道路面としたことが予想される。岱明層は、最も標高の高い C5 グリッド西壁 (土層図 C) からしだいに標高を低下させるが、この土層図 E の区間は、ほぼ水平な面となっており、前の予想を裏付けるものであろう。土層 1～3 は客土層群の土層である。土層 4～5・7 は鉄分を多量に含んだグライ化層群の土層である。土層 6 は石粒を多く含むことから耕作土層群の土層と思われる。土層 8～9 は、大量の鉄分が枝状に深く貫入した土層で、下層の岱明層とは明らかに不整合面を形づくっている。鉄分が大量に含まれることから水分の多い環境にあったことは明らかであるが、砂や石粒などがほとんどなく水田としての利用は考えづらい。前述したようにこの地点は中世から近世にかけての道路状遺構が見られ、その道路面は岱明層上面と考えられる。つまり、岱明層まで掘り下げて道路面としているようだ。土層 9 は粘質土であり、道路がその機能を無くした後、水で流され堆積したと考えてよいが、土層 8 はローム質であり、水に流されて堆積した層とは考えづらい。おそらく、土層 8 は整地層と考えられる。層が固く締まっていることから再度道路遺構として利用された可能性もある。この地点にグライ化層群の土層が多く、耕作土層群の土層が少ないのは本来水が集まりやすい地形のためであろう。



第5図 調査区西壁土層図（土層図E）

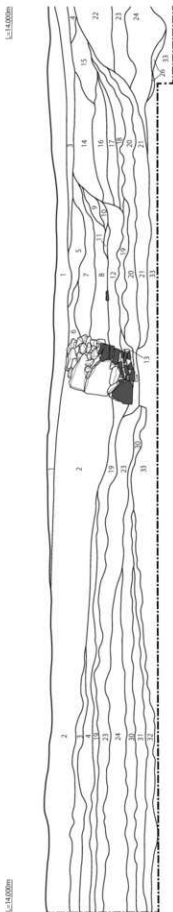


C-3・4 調査区東岸土層図

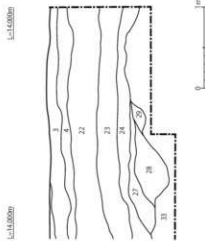
- 1 河川堆積土 (10787.6) 在河川堆積土の河川堆積物小片が混じる→河階 1層と同一
- 2 赤褐色堆積土 (10783.2) 河階 3層と同一
- 3 赤褐色堆積土 (10783.2) 河階 3層と同一
- 4 赤褐色堆積土 (10783.2) 河階 4層と同一
- 5 赤褐色堆積土 (10784.1) 2-8mmの砂粒を含む、いかりのクワイ化土層 →河階 4層と同一
- 6 赤褐色堆積土 (10783.2) 2層と同一
- 7 赤褐色堆積土 (10782.2) 1-5mmの石粒、砂粒、500個以上の瓦片、→河階 5層と同一
- 8 赤褐色堆積土 (10782.2) 1-5mmの石粒、砂粒、500個以上の瓦片、→河階 5層と同一
- 9 赤褐色堆積土 (10783.1) 1mmの石粒を含む、河階 18と同一
- 10 赤褐色堆積土 (10784.3) 2-8mmの石粒が混入する、11層より砂質 →河階 22層と同一

- 11 赤褐色堆積土 (10784.3) 2-8mmの石粒が混入する、河階 22層と同一
- 12 赤褐色堆積土 (10783.3) 1-3mmの石粒を含む、→河階 23層と同一
- 13 赤褐色堆積土 (10783.3) 1-3mmの石粒を含む、→河階 23層と同一
- 14 赤褐色堆積土 (10783.3) 1-3mmの石粒を含む、河階 23層と同一
- 15 河階 15土層

第7図 調査区東岸土層図



- C-D-E-4 土層土層図
- 1 埋戻し土 (10YR2/6) 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 2 埋戻し土 (10YR7/6)
 - 3 埋戻し土 (10YR7/6)
 - 4 埋戻し土 (10YR7/6)
 - 5 埋戻し土 (10YR2/2) 1-2mmの砂を含有する
 - 6 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 7 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 8 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 9 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 10 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 11 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 12 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 13 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 14 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 15 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 16 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 17 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 18 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 19 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 20 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 21 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 22 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 23 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 24 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 25 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 26 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 27 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 28 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 29 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 30 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 31 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 32 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する
 - 33 埋戻し土 (10YR3/4) 3-10mmの砂を含有する



第8図 調査区南壁土層図

土層図F (E 8・9 グリッド)

土層図Fは、石垣と弥生時代の遺構SD27、それに中世から近世にかけての遺構SK29・SK33・SD32の土層が含まれる。土層1～3は整地層であり、客土層群の土層である。土層4は黄褐色系の土層で鉄分や石粒を含むグライ化層群の土層である。土層5は土層図Eの土層8と同一の層で、鉄分をかなり含み固く締まっている。この固結部分は土層6の表層部に続いている。土層8は、土層4が粘質化したもので、二つの層は基本的に同一層である。したがって、土層6上面から遺構SD27を破壊して深い溝が掘られ、その後土層8や土層4が堆積したことになる。土層9・18～22はSK33の埋土、土層10～17はSK29の埋土、土層23～27はSD32の埋土、それに土層29～33はSD27の埋土である。これら4つの遺構の新旧関係は、弥生時代のSD27が最も古く、SD32→SK33→SK29と新しくなっている。つまり、SD27が埋まった後、土層23によりSD32がいっしょに埋まり、その後SK33が掘りこまれ、埋まったあとにSK29が掘られていることになる。SK29の埋土には多くの瓦片とともに大量の炭化物を含んでいた。特に土層10・11の上層部に炭化物が多く、同じように炭化物を大量に含む土層7と一体化している。SK29・SD32・SK33の上にかぶさるように堆積する土層7は層の厚みは薄いものの、固く硬化している。この特徴は土層28と類似しており、土層5や6との間に不整合面を形づくっている。つまり、土層5や6は客土層群と考えられ、それらの層の直下に固く硬化した土層7と土層28が堆積していることになる。

【調査区東側壁面での土層堆積】

東側壁面土層は、土層図Aと南側壁面との間にあり、両者の特徴を備えている。土層1～4と土層6～8は整地層であり、客土層群の土層である。土層5はグライ化層群のひとつであるが、本来は耕作土層群の一つと考えられる。土層9～13は石粒や土器片を含んでおり、耕作土層群と考えられる。土層14は岱明層類似層群の一つであり、岱明層である土層15の粘土採掘に伴う土層の可能性が高い。これは土層図Aの状況とよく似ている。

【西壁の土層堆積から見られる土地利用の変遷】

以上の土層堆積層の検討から当調査区(木船西遺跡IV区)での土地利用の変遷、つまり開発行為を追ってみたい。

最も古い開発は弥生時代後期にさかのぼる。調査区の北には木船西遺跡I区～III区があり、発掘が調査終わっている。弥生時代後期を中心として竪穴住居跡50基以上の集落が確認されている。したがってIV区での住居跡の発見が期待された。しかし、検出されたのはSD27とSD01の溝遺構とSK11、26の土坑であった。SD27は約2m、SD01は約1.5mの幅を持つが、幅のわりには浅い掘り込みである。これは中世から近世にかけて二回目の開発が行われ、土地の削平が行われた結果であった。つまり、溝や土坑の上部が削平され、破壊されたようだ。

二回目の開発行為の跡が中世から近世にかけての道路状遺構やSD32の大きな溝などである。土層図Eや土層図Fにはこの削平の様子がよく表されている。道路状遺構も大きな溝も削平は岱明層まで及んでいる。溝は岱明層でも砂層まで及んでおり、おそらく湧水が常態化していたものと考えられる。

道路状遺構も岱明層まで削平されているが、粘土層や砂層の状態ではなく、赤褐色土に近い。おそらく岱明層の上部に堆積する赤褐色ローム層と考えられる。道路としては利用可能であろう。この時の削平は土層図Cの南端まで認められる。土層図Cでは削平が岱明層の上部である黒色土(土層14)までで終わっており、赤褐色ローム層や粘土層、それに砂層までは及んでいない。これはおそらく玉名台地の南への傾斜のためと考えられる。その後、大きな溝(SD32)が埋まり機能しなくなると、SK33の土坑が造られ、さらにSK33が埋まるとSK29の土坑が造られている。この土坑が埋まっている際、その上部層は大量の炭化物と瓦片を含んだ土層図Fの土層7と一体化して堆積している。土層7はE8グリッド内に広がっており、表層部が硬化している。大量の炭化物と瓦を含んだ土で整地したものであると思われる。つまり中世から近世にかけての二回目の開発行為は互に強い関連性を持つことを物語っている。この際、調査区南西部での粘土採掘がおこなわれた可能性が高い。

三回目の開発行為は、おそらく暗褐色から黒褐色をした耕作土層群の土層で、黒褐色土の整地層の上に暗褐色から褐色の耕作土が堆積している。耕作土層群の土層は調査区西壁の土層図Cを

除いたすべてで見られる。また、ほぼ耕作土層群の土層の上位にあるグライ化層群の土層は水分の多い場所に堆積した耕作土と見ることができる。このころは畑あるいは水田が営まれていたようだ。

四回目の開発行為は近代の道路状遺構である。昭和23年建設省地理調査所によって撮影された航空写真には弧状を描く道路状遺構が写されている。この写真では、道路状遺構は切通しの道路ではなく、西側に壁をもつ段落ちの道路になっており、北から弧状に曲がり、西に向かっている。そして、東からの道路と合わさっている。ただ、東からの道路は現在の鹿児島本線の北側に沿った道路ではなく、現在の踏切に南からつながる道路が手前で南西方向に曲がり、鹿児島本線を斜めに横断して弧状の道路と合わさっている。また、写真では中世から近世にかけての道路状遺構やSD32が地形にその後を残している。

五回目の開発行為は石垣の築造である。近代の道路状遺構がほとんど埋まった段階で道路状遺構の東側側溝に沿いながら南北方向に石垣を築き、その西側を畑地としたようだ。また、E7グリッドとE8グリッドの境界付近にも東西に石垣を築いている。おそらく南北と東西の石垣は一連のもので、D・E5・6・7グリッドは石垣の上面より一段低い畑地として利用されていたようだ。この石垣築造の時期は、先の航空写真にはこの石垣は写っていないため、昭和23年以後のことである。また、石垣築造の理由としては、調査区南西部の粘土採掘により、湧水が常態化し周辺が湿地化したためであろう。調査区南西部の土層にグライ化層群の土層が多いことや石垣基底部の土層がグライ化していることもこれらの理由を裏付けているようだ。

六回目の開発行為は、工場用地として現地表面まで整地された工事であり、現在に至っている。真砂土とともに石垣に用いられた凝灰岩が整地層の中にたくさん含まれている。またB・C2・3グリッドで見られたヒューム管もこの頃に埋設されたものと考えられよう。

第2節 遺構と遺物

はじめに

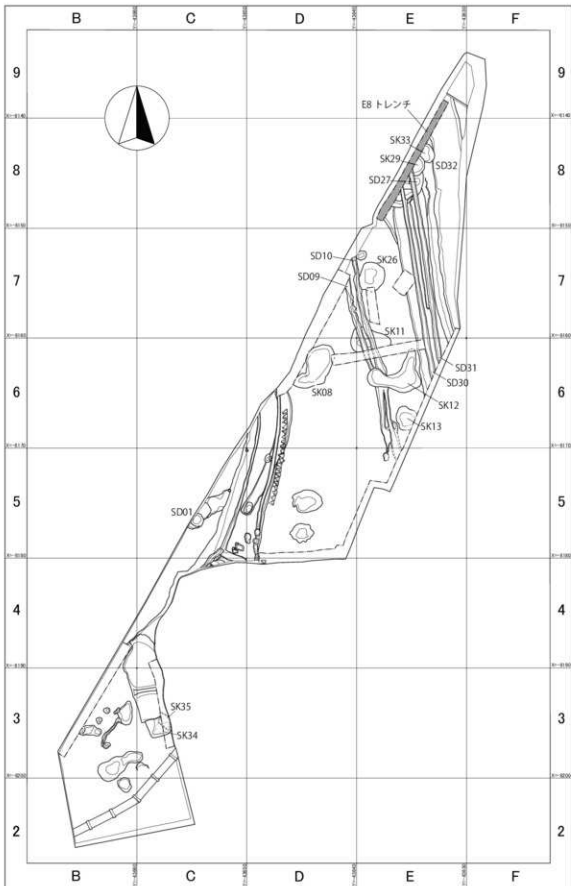
木船西遺跡Ⅳ区では、遺構が3箇所（E・F5～9グリッド、C・D5・6グリッド、B・C2～4グリッド）に集まっており分けて考える。

E・F5～9グリッドの範囲は木船西遺跡Ⅲ区に隣接していることから、木船西遺跡全体を考える上でも重要な範囲である。この範囲は木船西遺跡Ⅳ区の中で遺物の出土が最も多く、遺構密度も今回の調査区の中でもっとも高い。また遺構の時期も弥生時代から近代・近世までと幅が広く周辺に存在する遺跡や遺跡の土地利用を考える上でも非常に有用なデータを得ることができた。

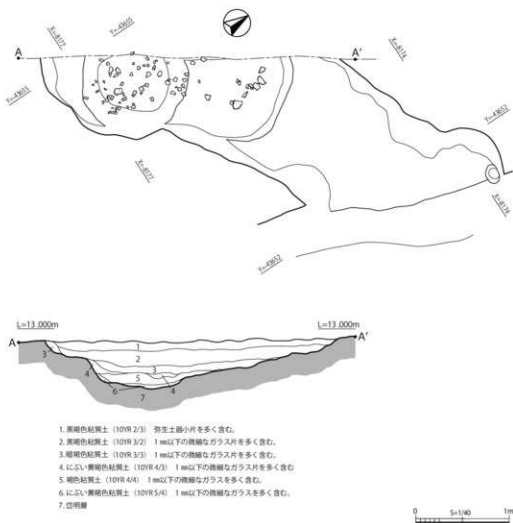
C・D5・6グリッドは調査区内の中でも他より一段高くなっており、段丘の痕跡とそこから谷まで下る段差を検出することができた。検出された段差の東側では段丘に沿うように築かれた石垣が埋没しており、その石垣の裏込めの土を除去すると2条の溝にはさまれた幅約2mを測る道路状遺構などが検出されている。これは段丘上面で検出された遺構、段丘下（谷）で検出された遺構、そして土坑と様々な時期の土地利用の変遷を考えることができる。これはE・F5～9グリッド範囲と同様の状況である。遺構時期もE・F5～9グリッドと同様で弥生時代から近現代までとなっている。

B・C2～4グリッドは遺構密度、遺物出土量が他のグリッド範囲と比べ少なくなる。しかし、不整形な土坑の存在や馬骨の出土などの上記で挙げた2つの範囲で検出した遺構と違った特徴をもっている。遺構時期は近世以降と考えられるが、不整形土坑はE・F5～9グリッドで出土している瓦との関係性（粘土採掘坑など）が考えられる。

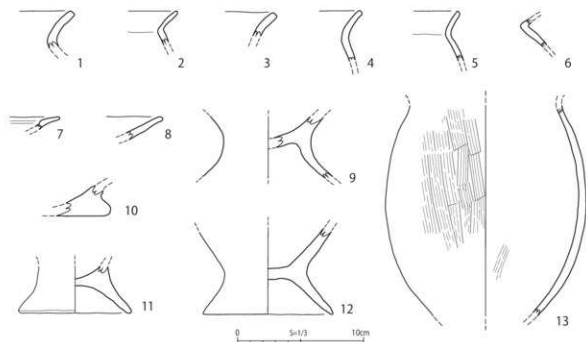
第2節では遺構の検出状況の傾向をもとに重要と考えられる遺構を抽出し、遺構番号順にまとめている。基本的には調査時の都合上C・D5・6グリッド、E・F5・6グリッド、B・C2～4グリッドの順に遺構番号が付与されているためこの遺構番号順に報告している。E・F5・6グリッドの道路状遺構とその周辺遺構に関しては遺構番号順に前後して報告している。



第9図 遺構配置図



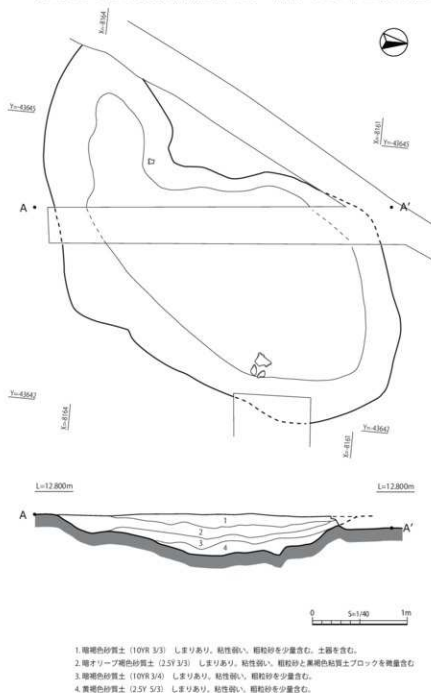
第10図 SD01 実測図 (S=1/40)



第11図 SD01 出土遺物実測図

SD01 (第10図)

本遺構は調査区のC5グリッド内に位置し、1段高くなったテラス上で検出され、北東部の西壁にかかる溝状の遺構である。検出長5.16m、検出幅1.5mを測る。長軸は北から東側に71°振れる。東は近世・近代の道路状遺構の建造時に切られている。南西部は調査区外に延び、正確な遺構形状は不明である。深さは0.51mを測り、断面形は浅い掘鉢状をなす。南西側は1段のテラスがつく。北東側は傾斜角度変わるものならかな斜面になる。西側から東側に向けて遺構底部が徐々に浅くなっており、段差の落ち際でSD01が収束する可能性も考えられる。SD01が検出された面は1945年撮影の空中写真に見られる地割と一致しているが、調査区西壁土層図Cでは工場建設時の整地に伴う1層・2層、工場建設以前の耕作地の土の3層・4層、そして遺物包含層である6層の順で遺構検出面の上に堆積がみられ、工場が建設される前の耕作地として利用

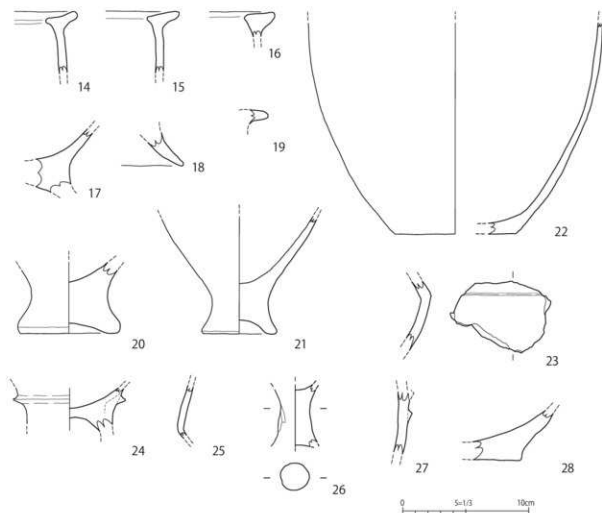


第12図 SK08実測図 (S=1/40)

されていた時期か、もしくはそれ以前にすでに削平を受けたと考えることができる。遺構埋土は6層から構成され、1～2層は黒褐色土、3層は暗褐色土、4層はにぶい黄褐色土、5層は褐色土、6層はにぶい黄褐色土である。遺物はほとんどが1層からの出土で、小片ではあるが弥生時代後期前半の土器が出土している。出土した器種は甕、壺、鉢等である。出土土器は後述するSK26、SD27と同じ型式であり、廃絶期はこれらの遺構と同時期であるとみられる。

SD01出土遺物 (第11図)

1～5は弥生土器甕の口縁部である。口縁端部はつまみ出す様にナデを施す傾向が見られる。6は弥生土器壺の頸部である。口縁端部は欠損している。7は弥生土器高坏の口縁部である。口縁部から体部にかけて浅い段を持つ。8は弥生土器鉢の口縁部である。口縁端部は若干つまみ出す。9は弥生土器甕の脚部である。脚接合部分から端部にかけて屈曲がみられ端部は外に広がる。脚接合部の内面は丁寧にナデが施される。よく焼きしめる。10は弥生土器鉢の底部である。11、12は弥生土器甕の脚部である。11、12ともに直線的に脚部が外に伸びる。11は底部内



第13図 SK08 出土遺物実測図

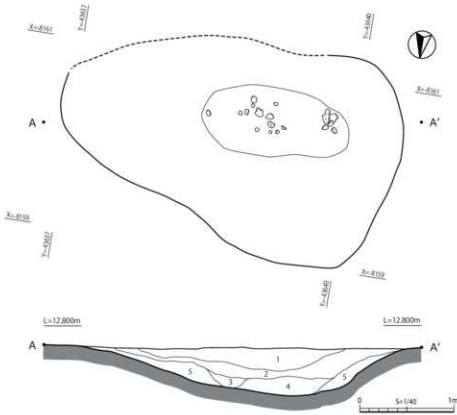
面は上底状になっているのに対し12では平らになっている。13は弥生土器甕の胴部である。頸部から口縁部までと脚部は欠損している。内外面ともにハケメ調整が見られる。

SK08 (第12図)

調査区の中央部D6グリッドの西壁付近に位置するいびつな楕円形の土坑である。長軸4.8m、幅3mを測る。長軸は北から東側に44°振れる。深さは0.44mを測り、断面形は浅い楕鉢状の断面をなす。遺構埋土は4層から構成され、各層ほぼ水平に堆積する。埋土は全体的に砂質の暗褐色、黒褐色土であるが、2層がややグライ化しており、水が滞留するような遺構であった可能性がある。遺構の埋没は弥生後期中葉以降とみられる。

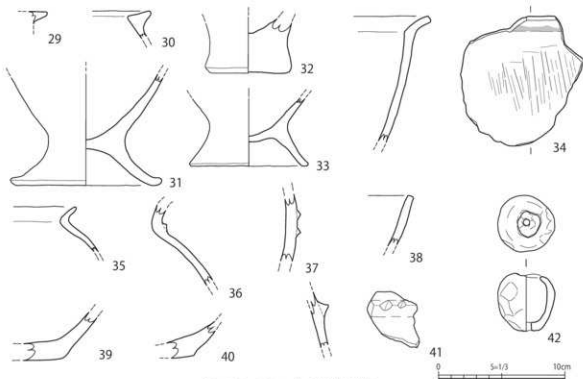
SK08 出土遺物 (第13図)

遺物は、城ノ越式、黒髪式、後期中葉の土器が見られ、出土遺物の年代幅が広い。城ノ越式は甕、壺が、黒髪式は甕、壺、鉢、高杯、器台などの破片が出土している。また、ミニチュア土器も出土している。14～16、19は弥生土器甕の口縁部である。14～16は口縁部内側の突出部が見られるが、14は口縁部内側への突出が顕著であり、強いヨコナデとつまみ出して成形される。16は突出部につまみ出すようなヨコナデが見られるもの14と比較すると弱く、外側への突出もひかえめとなる。19は土器本体から剥がれた肥厚部である。17、18、20～22は弥生土器甕の脚部である。17、20は上げ底で肥厚な脚を持つ。18は低めの脚が外側に広がる。21は胴下部から脚部まで残存している。脚は上げ底で接地面は平らに成形されている。22は平底で脚を持たない。底部には黒色の斑紋が見られる。23、27、28は弥生土器壺である。23は胴部で屈曲しており屈曲部分には浅い1条の沈線が施される。

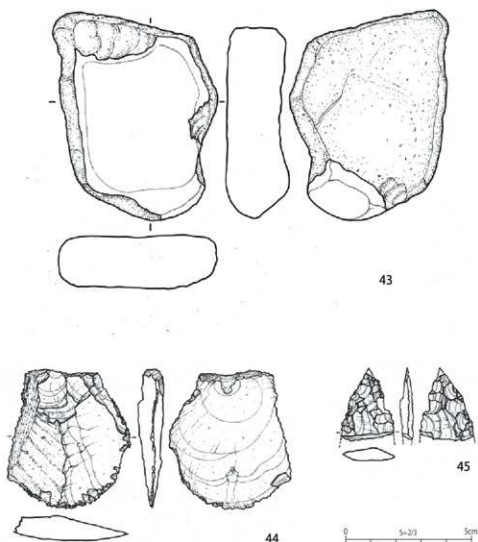


1. 黄褐色粘質土 (10YR 3/2) しまりあり、粘性あり、細粒砂、中粒砂少量含む。地山ブロック微量含む。
2. 黄褐色粘土 (10YR 3/1) しまりあり、粘性強い、細粒砂、中粒砂、地山ブロック微量を含む。
3. 細灰色砂質土 (10YR 4/1) しまりあり、粘性若干あり、細粒砂主体、地山ブロック少量含む。
4. 灰黄褐色粘質土 (10YR 4/2) しまりあり、粘性若干あり、炭化物粘多、中粒砂少量含む。
5. 灰黄褐色粘質土 (10YR 4/2) しまりあり、粘性若干あり、中粒砂少量含む。

第14図 SK11 実測図 (S=1/40)



第15図 SK11 出土遺物実測図1



第16図 SK11出土遺物実測図2

27は胴部に2条の突帯を持つが2条のうち上部の突帯は剥がれ痕跡のみを残す。28は壺の底部である。底部には圧痕状の痕跡が見られる。24は高杯の頸部で、突帯を持つ。胎土に混入物が見られず精緻である。25は弥生土器長頸壺の頸部である。26はミニチュア土器である。高杯もしくは器台を意識したものと思われる。

SK11 (第14図)

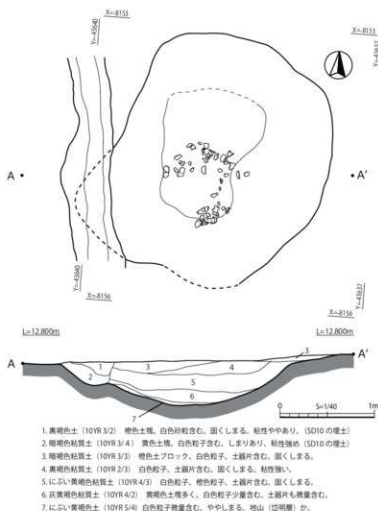
調査区の中央部、D6、D7、E6、E7グリッドに渡って位置する楕円形の土坑である。長軸3.6m、短軸2.3mを測る。長軸は北から西側に88°振れる。SD09、SD10を切る。深さは0.5mを測り、断面形は浅い揺鉢状をなす。遺構埋土は5層から構成され、1層はSD09、SD10掘削時に攪乱を受けたものである。1～2層が黒褐色土で、3～5層が褐灰～灰黄褐色土である。

SK11出土遺物 (第15図・第16図)

遺物には弥生土器と石器があり、土器は甕、壺が出土している。遺物は最下層からまとまって出土しており、弥生時代中期から後期前葉のものと思われる。29～34は弥生土器甕である。29、30は口縁部で断面三角形の突帯が貼付けられるが30は端部が若干持ち上がる。32は肥厚した上底状の底部を持つ。31、33は外側に開く脚をもつ。31は端部を折り曲げ接地面を作る。33はまっすぐ斜めに伸びた脚部の端部を接地面に合わせて平坦面を作り出している。34は口縁

から胴部の一部まで残存している。頸部には煤が付着している。35～37、39～41は弥生土器壺で35、36は口縁から頸部にかけて残存。36は口縁端部は欠損しているが、頸部に一条の断面三角形の突帯が貼付けられる。37は胴部であり、断面三角形の突帯が2条貼付けられる。39、40は底部である。39は胎土に長石の混入が目立つ。40は内面が摩滅し不明瞭であるがハケメ調整の痕跡が若干みられる。41は刻み目のある断面三角形の突帯が貼付けられる。38は弥生土器鉢の口縁部で、端部は仕上げに強めのナデを施す。42は無頸壺を意識したミニチュア土器であり、底部には穿孔がある。

石器は、磨石、石鏝等が出土している。この他に岩片として花崗岩、安山岩等がみられた。43は角の取れた板状の安山岩転石を用いた磨石である。a面およびb面左下の突起部の周囲に磨痕が見られる。これらの磨痕は原石の形状を変えるほどのものではない。44はトレンチ掘削時出土したものであるが、SK11を切っているためSK11のなかに含まれていた可能性があり、ここで報告する。明瞭な節理面に沿って剥がされたサヌカイト製縦長剥片を素材とした削器(スクレイパー)である。a面(背面)右上から左下にかけての縁辺部に、b面(腹面)側から打撃された小さな剝離痕が連続してみられる。石材の風化がかなり進んでおり、旧石器の可能性がある。45は下半部が大きく欠損した打製石鏝である。きめの細かい良質のサヌカイトを用いている。先端からの形状や石器の最大幅がほぼ折れ面近くに想定され、基部にかけて厚みが減じていく傾向にあることから平基式石鏝である可能性が高い。現状での長さが2.5cmほどであるから全長は5cm近くになりそうだ。



第17図 SK26実測図 (S=1/40)

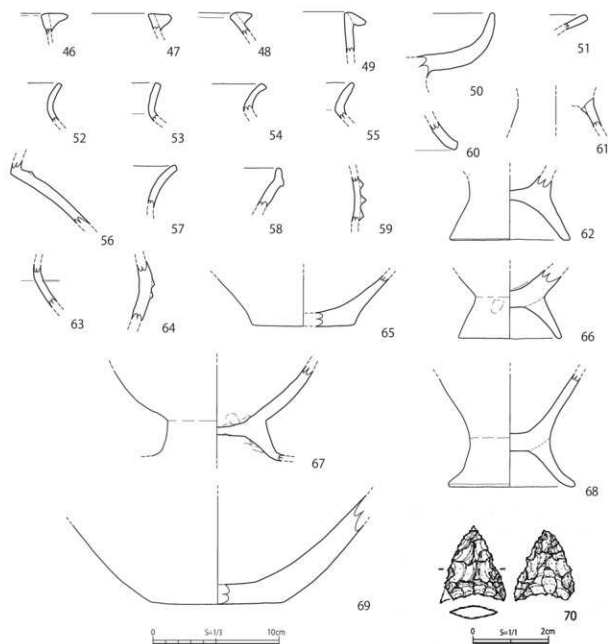
SK26 (第17図)

調査区北部のE7グリッドに位置するやや不整楕円形の土坑である。中近世の道路状遺構に切られ、長軸2.7m、短軸2.3mを測る。長軸は北から東側に19°振れる。深さは0.44mを測り、断面形は浅い楕円鉢をなす。遺構埋土は5層から構成され、1、2層は道路状遺構の側溝であるSD10の埋土、3～7層がSK26の埋土である。7層は地山の可能性もある。遺物は主に5層、6層から出土している。

SK26出土遺物 (第18図)

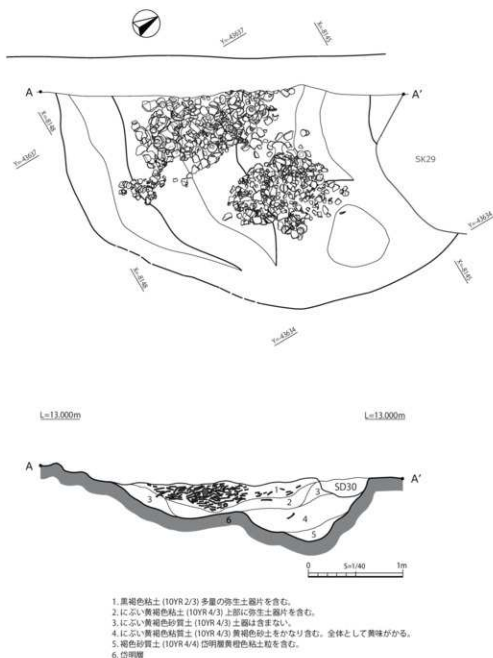
遺物は、弥生土器、石器であり、3、5、6層から弥生時代後期前半の甕・壺が出土している。これらの土器は津袋I段階(高木1979)に含まれるものがほとんどである。SD27出土した土器と接合する土器がみられる。廃絶はSD27と同時期であると考えられる。

46～49、52、53、55は弥生土器甕の口縁部である。46～49は外側に断面三角形の突出部を持つが46に関しては比較的強めに外につまみ出される。49は突帯下めの胴部接合部に沈線状に凹みかめぐる。52、53、55は口縁端部を「く」の字状に折り曲げる。50、67は弥生土器脚付



第18図 SK26 出土物実測図

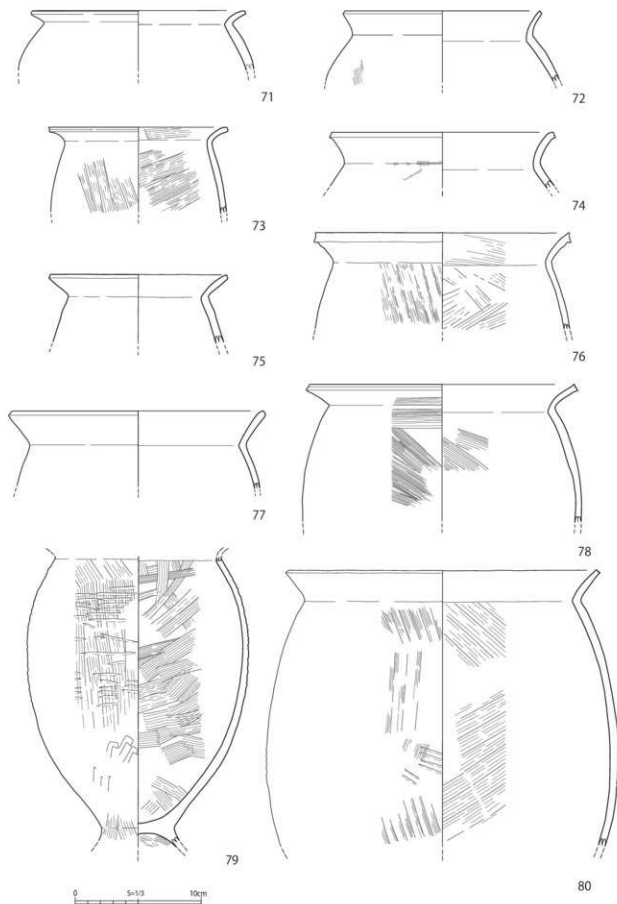
鉢である。50の脚部は大半が欠損している。鉢胴部には黒斑が見られる。67は脚端部を若干折り曲げ接地面を作る。底部内面には複数の指頭圧痕がある。51、60は弥生土器高坏で、51は口縁端部、60は脚端部である。60の脚端部はヨコナデにより面が形成される。54、57、58は弥生土器壺の口縁部である。54は端部が頸部よりも若干厚く、端部の仕上げにヨコナデし、面を形成している。57も同様な成形を行い、面を持つが端部は丸みを帯びる。58は断面三角形に肥厚し、仕上げに強いヨコナデを直上方向を意識し行っている。56、59、63、64は弥生土器壺の胴部である。56は頸部から胴部が残存し、頸部には断面三角形の突帯が貼付けられる。59は3条の断面三角形の突帯が貼付けられる。64は2条の断面三角形の突帯が貼付けられる。先63は頸部外面に1条の沈線がみられる。61、62、66、68は弥生土器甕の脚部である。62、66の脚部が真っ直ぐ伸び端部が丸く取まるのに対し、68は端部を折り曲げ接地面を作っている。65、69は弥生土器壺の底部である。どちらも底部に黒斑が見られる。65は底部からの立ち上がり部分にヨコナデがみられ底部と胴部の境界にはっきりとした角がみられるが、69のその部分は不明瞭な指頭圧痕状のものが見られ、角が鈍い。70は良質のサヌカイトで作られた凹基三角石鏃である。a面と下部の先端がわずかに欠けているが、ほぼ正三角形に仕上げられている。



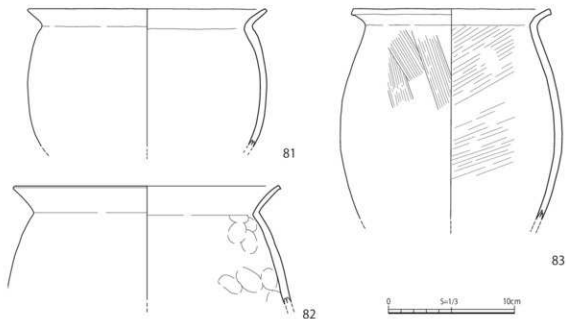
第19図 SD27 実測図 (S=1/40)

SD27 (第19図)

調査区北部のE8グリッドに位置する薬研堀状の溝遺構である。谷地形の立ち上がり付近にあたる東端には深い土坑状の掘り込みがあり、遺構底は一段深く落ちる。西部は調査区外に延び、全体形は不明である。調査区北側道路状遺構、SK29、SD30に切られる。検出長4.3m、検出幅2.5mを測る。溝の延長方向は北から西側に82°振れる。深さは0.64mを測る。遺構埋土は5層から構成される。1層は土器密集層(土器廃棄層)であり、黒褐色土である。2層～5層はにぶい黄褐色土～褐色土であり、4層に土器(城ノ越式)を含む。東端の土坑状落ち込みは、径0.7m、深さは1mを測り、断面形は井戸状の形状をなす。現状で若干の湧水がみられる。SD27は平面形状が溝状であり、断面形状が薬研堀状であることから、木船西遺跡1～Ⅲ区の集落を囲う環濠の土橋近辺にあたる可能性が高いと言える。また、溝内に土器類の大量廃棄が行われており、その出土状況も環濠の廃絶期によくみられるものである。津袋大塚遺跡の大溝など津袋Ⅰの土器の一括資料がみられる遺跡は弥生後期の環濠を伴う集落であり、環濠内に土器の大量廃棄がみられる。さらにSK26等のやや離れた土坑から同時期の土器が出土し、本遺構出土土器と複数接合し



第20図 SD27 出土遺物実測図1



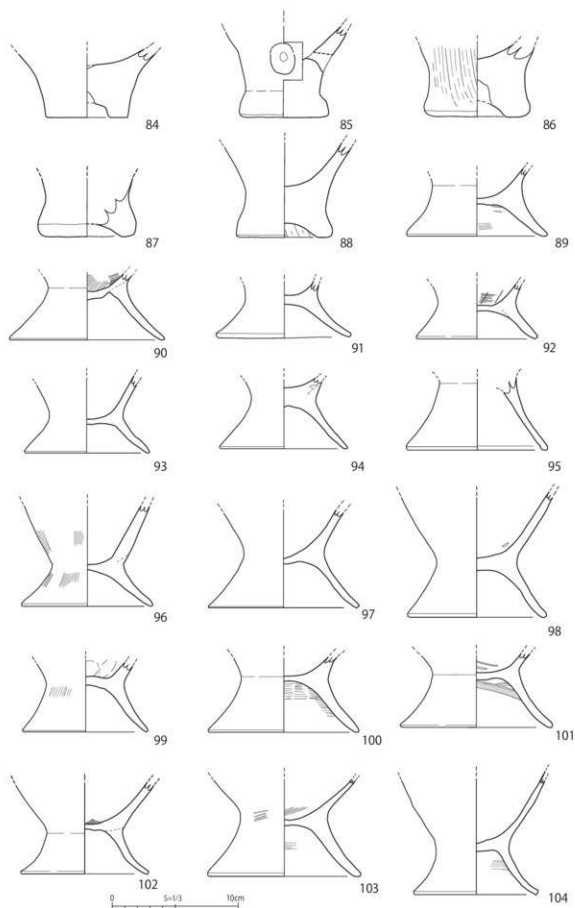
第21図 SD27出土遺物実測図2

ており、同時期の遺構磨絶が単独ではなく有る程度の広がりを持って行われている。

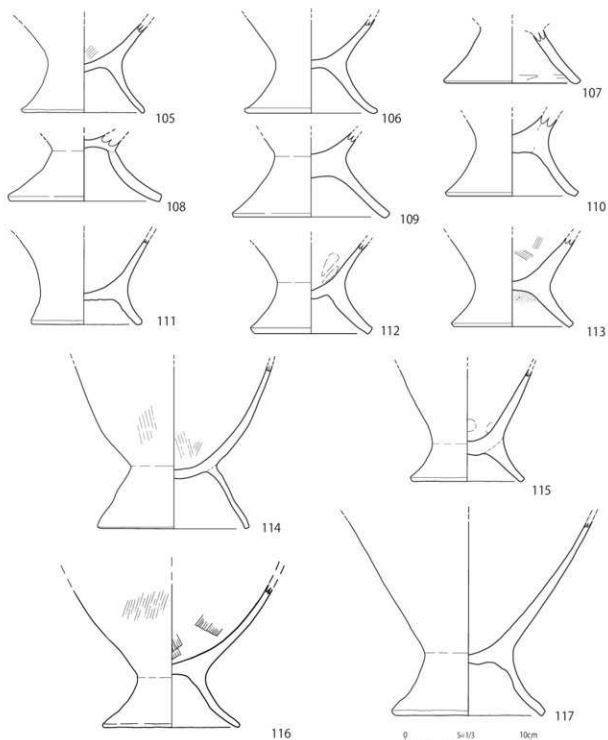
SD27 出土遺物（第20図～第29図）

遺物には、弥生土器、石器がある。本調査区で最も多くの遺物が出土しており、木船西遺跡IV区の出土遺物の約7割を占める。そのほとんどは土器であり、石器の比率は低い。1層からは弥生時代後期前半の甕・壺・鉢・高坏・器台が出土している。土器の一括廃棄にともなうものである。器種別にみると、甕がほとんどであり、壺が続き、その他の器種は寡少である。遺物は、接合が悪く、破片が広範囲に散らばっているものと思われる。これらの土器は津袋I段階に含められるものがほとんどであるが、津袋II段階（高木1979）要素も一定量含んでおり、両時期にまたがる時期に一括廃棄が行われた可能性がある。4層からは城ノ越式の土器片が出土するが地山由来の埋土であり、再堆積の可能性はある。

第20図～第23図は弥生土器甕である。71～83は甕口縁から胴部である。（79は脚の一部まで残存）口縁部は「く」の字状に開く。基本的には口縁部はハケメ調整後にヨコナデ、胴部外面はユビオサエの後、縦方向のハケメ調整、胴部内面は横方向のハケメ調整である。口縁部は強めのヨコナデにより、面を持つ。中でも76は仕上げに強くヨコナデし、明確な面を形成、而下部は若干下方に伸ばし、その面下部の端部もつまみながらヨコナデを行っている。79は胴部外面にタタキが行われその後ハケメ調整が行われる。84～117は甕胴部から脚部まで残存している。84、86～88は底部に肥厚した上底状の脚である。85は上底ではなく、底部に円盤状の粘土を貼付け脚にしている。脚部の貼付け部分よりやや上には焼成後と思われる穿孔が見られる。85～88は底部からの立ち上がり部分は丸く仕上げられるが、84は角が見られる。89～117は「ハ」の字状に開く脚である。全体的に表面が磨耗しているが、底部内外面にハケメ調整や指頭圧痕が残るものもある。113は底部外面に砂粒が付着している。底部を丸底状にしたまま脚を接合する場合とやや平底にした状態で脚を接合する場合が見られる。脚に関しては端部を丸くおさめたものや端部に面を持ち、端部の面が接地面となるものと面が接地面にならないものなど、形状にも個体差が見られる。第24図118～137は弥生土器壺である。全体的に磨耗しているため調整などは不明瞭であるがハケメ調整や指頭圧痕が残るものもある。118は口縁部内面に断面三角形の突帯が貼付けられている。突帯の先端は指でつまむように成形されているため突帯接合部分には指頭圧痕が残る。119～121は頸部からの立ち上がりやや直線的であり、口縁部面に面をもつ。122は頸部から緩やかな曲線を描きながら立ち上がる。口縁部には粘土帯を貼付け肥厚させ、粘土帯下の端部は下方につまみ出し成形を行う。123はやや長めの頸部で立ち上がり直後は直線的に伸び、口縁部は大きく外湾し広がる。口縁部は仕上げにヨコナデを行い面を形成し

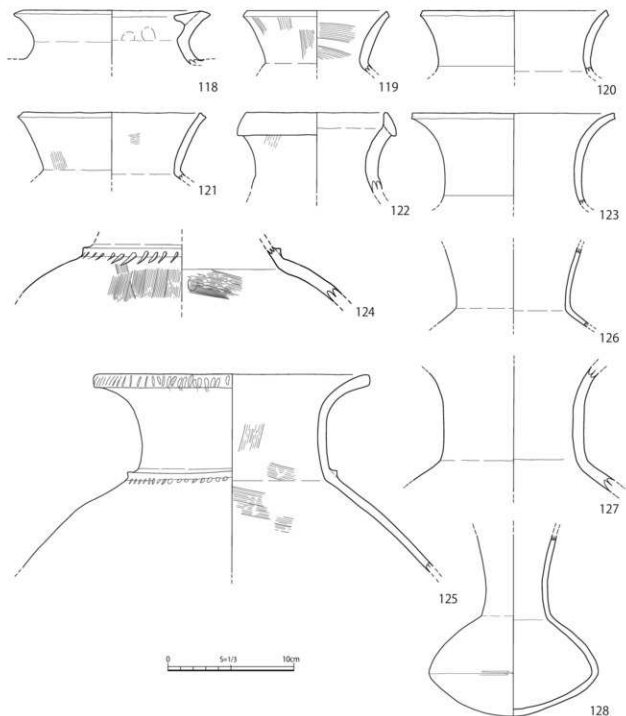


第22図 SD27出土遺物実測図3



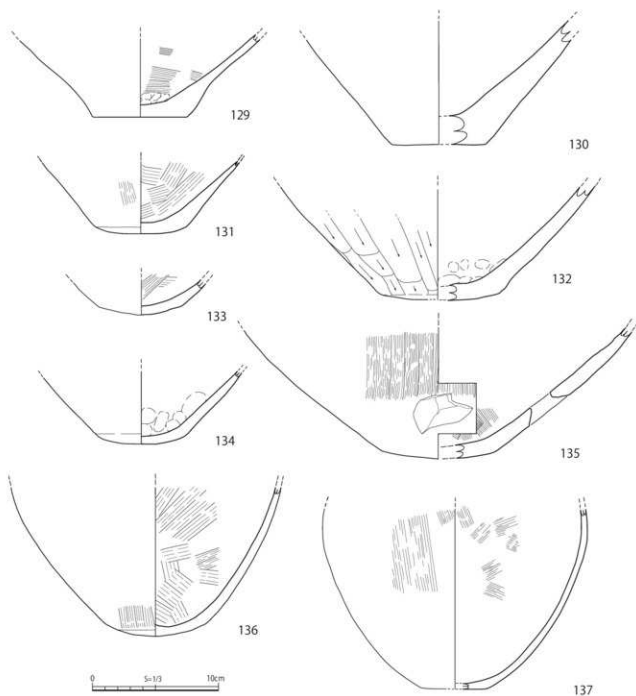
第23図 SD27 出土遺物実測図4

ている。124、125は頸部に断面三角形の突帯を貼付け突帯の下部に斜め方向から刺突文を施す。125は口縁部まで残存しており、その口縁端部は面を形成し、刻み目がめぐる。126～128は弥生土器長頸壺である。全体は摩滅しており詳細な調整は不明であるが、頸部は縦方向の調整、頸部と胴部接合部付近には横方向の調整が行われていた可能性がある。また128は胴部にミガキの痕跡と黒斑が見られた。129～137は胴部から底部にかけて残存している壺である。内外面ともにハケメ調整が見られるものが多い。129は底部と胴部を接合する際のユビオサエを上方向へ行ったため、底部から胴部に至るまでに一旦上方向に立ち上がってから開き始める。底部外面は平滑である。130は底部外面は平滑であり胴部外面には黒斑が見られる。胴部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。131～136は底部外面はやや曲面を呈し、胴部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。



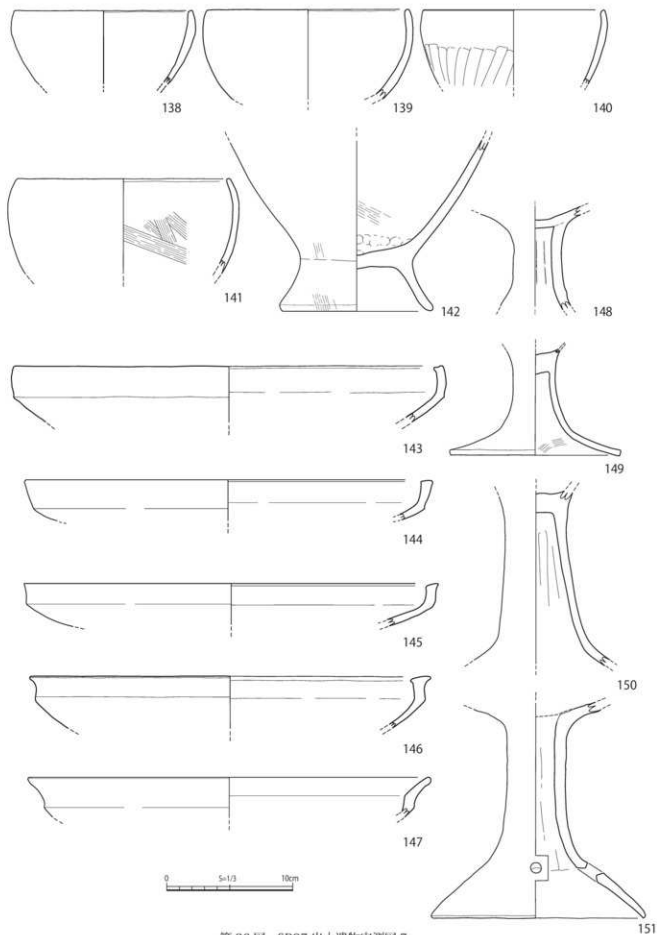
第24図 SD27出土遺物実測図5

132は胴部外面に底部接合時の指頭圧痕が若干残る。器面調整の仕上げに縦方向のケズリが施されたため、その際に指頭圧痕は見られなくなったと考えられる。133は残存する部分全体が黒斑となっている。135は胴部外面に焼成後の穿孔の痕跡と黒斑が見られる。136も胴部外面に黒斑が見られる。137は底部が平滑であり胴部の立ち上がりは緩やかな曲線を描くように立ち上がる。138～142は弥生土器鉢である。138～141は口縁から胴部が残存している。全体的に磨耗し詳細は不明であるが口縁端部はヨコナデ、胴部外面はナデや縦方向のケズリ、胴部内面には縦方向のナデやハケメ調整の痕跡が見られる。胴部から緩やかに曲線を描き口縁部は内湾し、口縁端部は面を持つ。142は弥生土器脚付き鉢である。底部内面には脚接合時のものと思われる指頭圧痕が見られる。それに対応する外面の指頭圧痕は丁寧にナデ消される。脚端部は先端が若干折り曲げられ、外に開く。143～151は弥生土器高環で、143～147は環部のみが残存し、149～

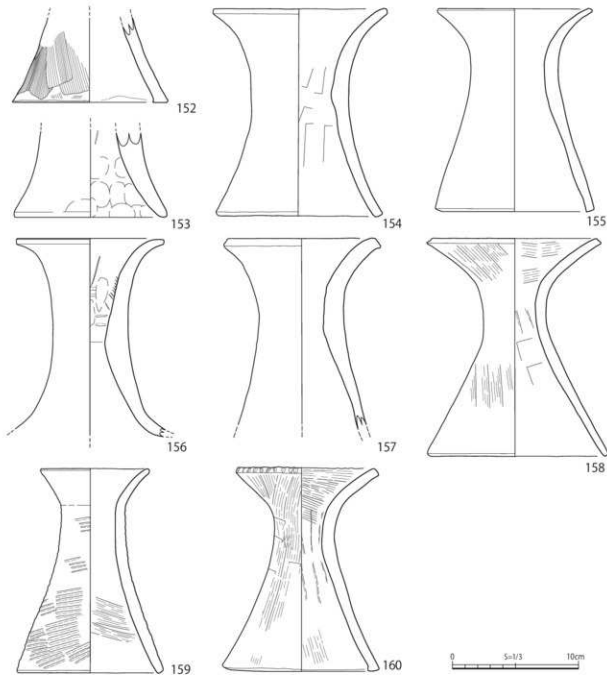


第25図 SD27 出土遺物実測図6

151は脚部のみ残存している。143の坏口縁は若干内湾し、端部は仕上げにヨコナデを行い内側に傾斜する面を持つ。144～146は143と比較して口縁の立ち上がりが短く、端部に見られる面も平坦であるが、145、146では面の角を内外につまみ出すように仕上げられる。特に146ではそれが顕著であり内面には角が突出する。147は坏口縁手前で一度外方へ折り曲げ、さらに外へ開く。端部は丸くおさまる。148～150の高坏の脚部は坏底部にそのまま接合を行う方法をとると思われるのに対し151は最後に半球状の粘土を脚上部につめて仕上げる方法をとっている。148、150、151の脚内面には絞り痕が見られる。148、149と比較して150、151は長脚である。149と151は脚の端部が残るが、脚端部の開きが149がくぼむように曲がっているのに対し、151は緩やかに膨らみながら広がる。また151には2つの穿孔が見られ、完形であれば4つの穿孔があったと思われる。152～160は弥生土器器台である。ほぼ完形であるのは159、160で他は図上復元にて器形の把握に努めた。上部に関しては156が上端部を若干折り曲げているが他の

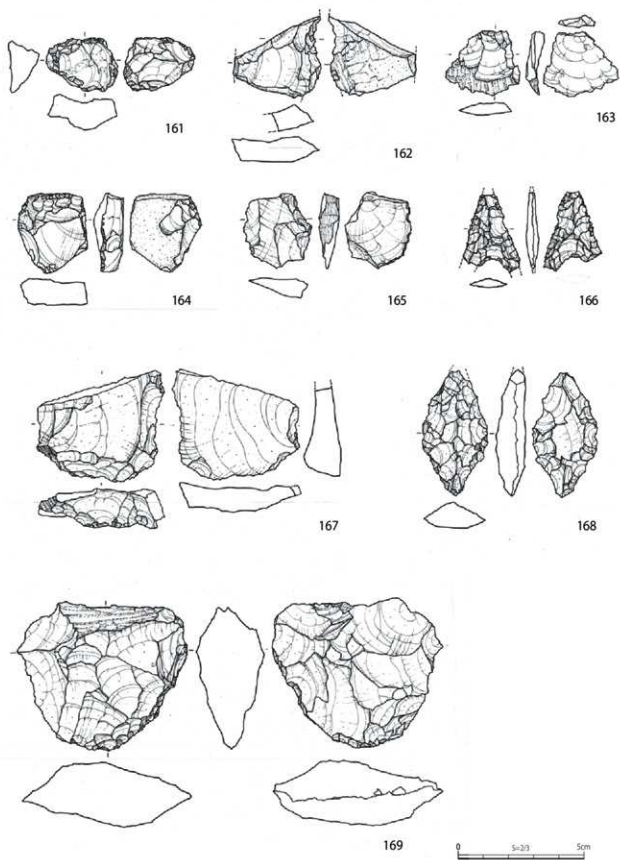


第 26 図 SD27 出土遺物実測図 7

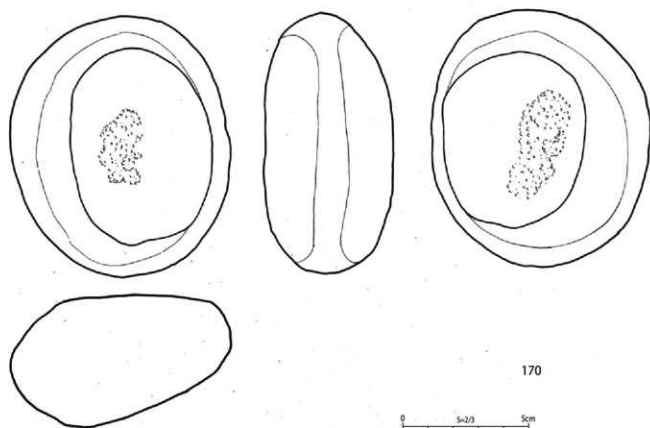


第27図 SD27 出土遺物実測図 8

器台はくびれ部から斜め上方に直線的に立ち上がる。下部は 152、155、158、159、160 が下端部を若干内湾させ接地面を平坦としている。153、152 の下部はヨコナデにより接地面を平坦とし、下端部は内側に若干つまみ出される。153、156 は下端部付近で若干外側に折り曲げられ、153 の下端部は丸くおさまられる。158、160 はくびれ部が細く絞り痕が残る。くびれ部の位置は総じて器高に対し上にある。159、160 は上部径に対し下部径が広がる。159 は外面にタタキ痕が残る。161 は黒曜石製の楔形石器である。斑（ふ）入りではあるが漆黒で良質の黒曜石である。おそらく西北九州産であろう。a 面上端部および b 面下端部に急角度の細かな剥離が連続し、縁辺が潰れた状態を示している。楔形石器はこのような縁辺の潰れが上下、左右で対応することが多く、a 面左端部と b 面左端下部も対応しているようだ。162 はサヌカイト製の内湾型削器（スクレイパー）である。上部が欠損しているため全体の形状は不明である。刃部は a 面右側にある。鋸歯縁状の剥離を連続して施し、内湾するように仕上げている。矢柄などの曲面製作に使用したのかもしれない。163 は斑入りではあるが良質の黒曜石剥片である。70（第18図）の石材



第28図 SD27出土遺物実測図9



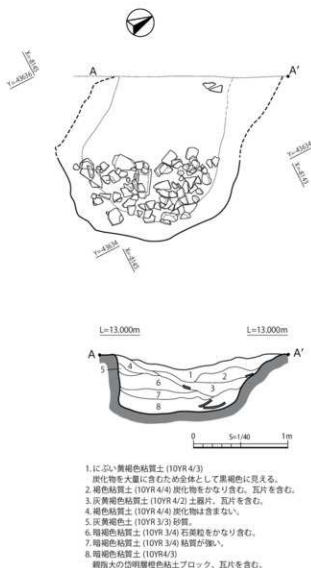
第29図 SD27出土遺物実測図 10

と類似する。当遺跡の標準的な剥片よりは小さいであろう。164は漆黒の良質な黒曜石を用いた楔形石器である。石材は西北九州産であろう。楔形石器に特有の縁辺部の潰れは、a面上端部と下端部折れ面に見られる。また、b面右側边上部・a面左側边上部とa面右側边上部も対応するように細かな剥離痕が連続している。なお、a面左上およびb面には原礫面が残されていることから、板状をした黒曜石の小原礫が素材として利用されたようだ。165はサヌカイト製の剥片である。a面中央部には主要剥離面と見なされる平坦な剥離面が観察できる。おそらく、この剥片を剥ぎ取った石核が大型の剥片を素材としたものであったことが推定される。a面右側辺の細かな剥離痕の連続と対応するようにb面右側辺には細かい刃こぼれ状の剥離が連続しており、楔形石器としての分類も可能である。なお、b面上部の打面には打撃痕が確認できる。166はサヌカイト製の凹基三角打製石鏃である。両面とも丁寧な剥離を施している。扱いは深く、脚部はやや外反するように延びようだ。先端部と両脚部の一部を欠くが、全長を復元すると4cmを超えるだろう。167はサヌカイト製の挿器である。a面下端部から右側辺にかけて急角度の剥離が連続しており、挿器の刃部となっている。上端部が欠損しているため全体の形状は不明である。この石器は43・300とともに風化が著しく旧石器の可能性が高い。168は良質のサヌカイトを用いた有茎菱形石鏃である。全体の剥離痕や整形の状態からみると未成品の可能性が高い。復元全長は5cmを超え、重量が11gの大型品である。45とともに鉄鏃を模倣した製品であろう。B面中央部に剥片の際の主要剥離面が残されている。剥離方向からすると分厚い横長剥片を素材としたようだ。169は斑晶の多いサヌカイト製の石核を転用した削器である。両面とも周囲から中心へ向けて剥離を繰り返し、目的とする剥片を生産している。両面に残された剥離痕から見ると、目的とする剥片は257と同様に方形に近い剥片であろう。なお、この石核はその後、a面右側辺から下端部にかけて細かな剥離を施し刃部としている。それらの稜上には潰れが見られ、特に下端部稜上の一部には使用によると見られる著しい磨耗痕が2カ所見られる。このような磨耗痕を生じさせる使用については、革製品製作のなめし作業もその一つかもしれない。170は安山岩製の磨石である。全面にわたって擦られているが、特にa面とb面の中央部に平坦な磨面が見られる。また、それらの磨面の中には敲打痕と思われる小さな凹みが集まっており、石皿としての利用もあったようだ。

SK29 (第30図)

調査区北部のE8グリッドに位置するややいびつな円形の土坑である。遺構の西側の一部が調査区外になる。炭化物層に覆われ、SD27とSK33を切る。検出長軸1.8m、検出短軸1.5mを測る。長軸は北から西側に63°振れる。深さは0.6mを測り、断面形は箱状をなす。遺構埋土は8層から構成される。

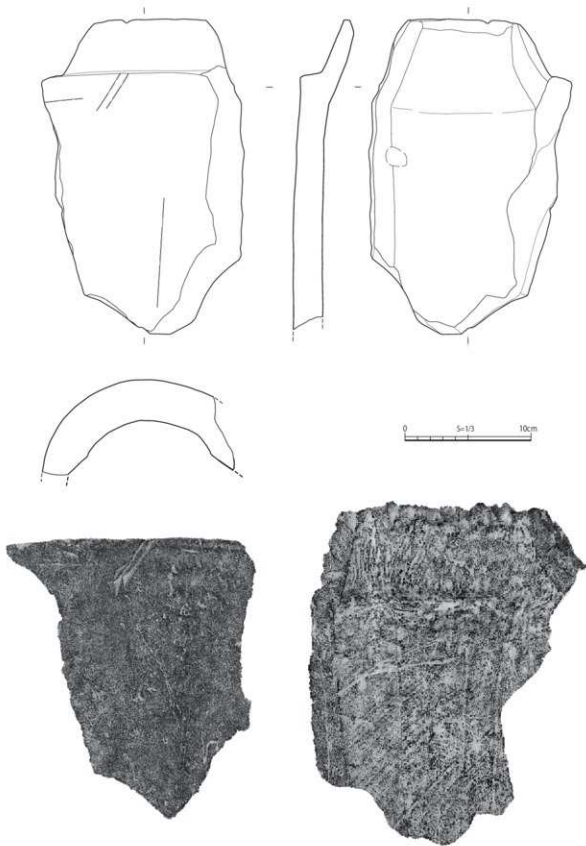
埋土は上層から下層に区分できるが、上層埋土は1～3層の4層であり、褐色～灰黄褐色土からなる。1、2層に炭化物を多く含む。遺物は2層と4層から瓦や土器が出土する。上層埋土は調査区北部を広く覆う炭化物層(西壁7層)と同時期の可能性もある。下層埋土は5～8層の4層からなる。遺物は、中世瓦や中世土器・貿易陶磁器が出土する。上位を覆う焼土・炭化物層(西壁7層)からも同時期の中世瓦、中世土器・貿易陶磁器が出土する。層序で時期差は認められるが、遺物はほぼ同時期と考えられ、土坑の埋積と焼土・炭化物層(西壁7層)による被覆の間隔は短いとみられる。炭化物層(西壁7層)から16世紀中頃に製作された白磁の小皿が出土しており、本遺構は16世紀中頃にはすでに廃絶されていたとみられる。本遺構は中世瓦が多く出土した土坑でもあり、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦が出土している。これらは、軒丸瓦の瓦当の型式、丸瓦や平瓦の粘土塊からの切り出し痕、面取等からみて室町時代のものと考えられる。



第30図 SK29実測図 (S=1/40)

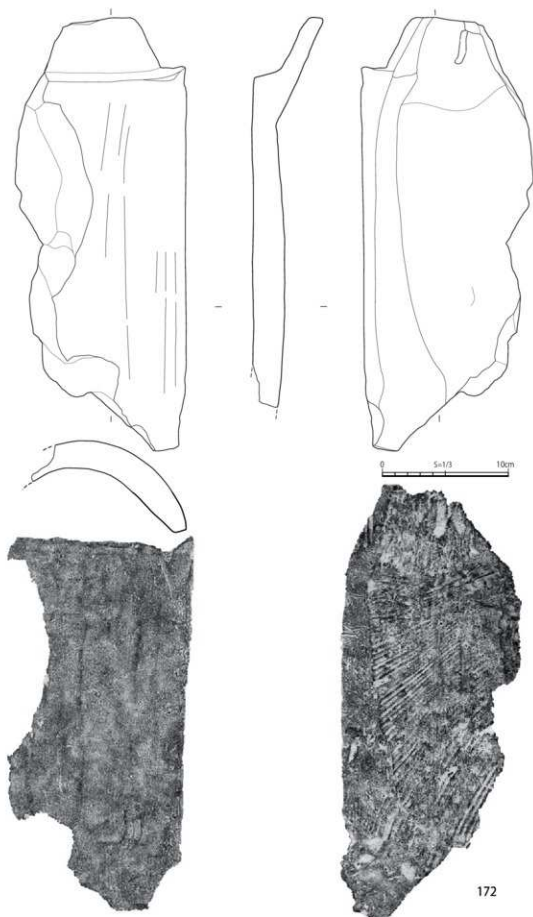
SK29出土遺物 (第31図～第37図)

171、172は丸瓦である。凹面にコビキAの痕跡が見られる。173～193は平瓦である。173の凸面には凹面台成形時の痕跡が見られる。174凸面側縁は若干張り出すが側面は丁寧に成形される。175は凸面にコビキAの痕跡がみられ、凸面側縁は若干張り出し、凹面側縁は面取りされた箇所も見られる。176の凹面側縁付近は指頭圧痕が若干見られる。177の凸面側縁は若干張り出し、凹面には幅1cm程度の縁がみられ、凸面台成形による痕跡の可能性もある。178の凹面にはタタキによる圧痕のような工具痕が見られる。凸面側縁は若干張り出す。179は凸面側縁に凹面台成形時に粘土がみ出したような張り出しが見られる。凹面側縁はつまみながらヨコナデを行う。180は凸面側縁に若干の張り出しが見られる。凹面では約3cm幅で緩い凹凸が見られる。181は凸面側縁が若干張り出す。182は両面に糸切り痕がみられ、凸面側縁は若干張り出す。凹面広端は深めの面取りが行われる。全体的に煙されておらず赤瓦状の外見を呈す。183は凸面に糸切り痕とは別の沈線状の工具痕が見られる。凸面側縁は若干張り出す。凹面側縁は面取りを行っている。184は凸面側縁が若干張り出す(粘土がはみ出した様な痕跡)。凹面には斜め方向の工具痕(ケズリもしくは工具使用によりナデ)が見られる。凹面側縁は丸くなっており面取りされた可能性が考えられる。185は凹面側縁までコビキ痕が確認される。破片のため広端か狭端かは不明であるがこの部分に若



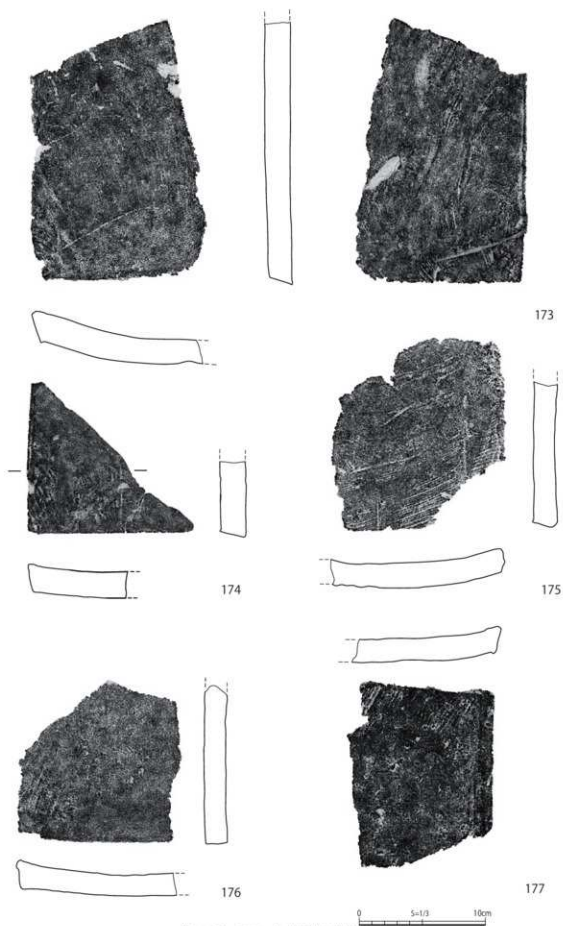
171

第31図 SK29出土遺物実測図1

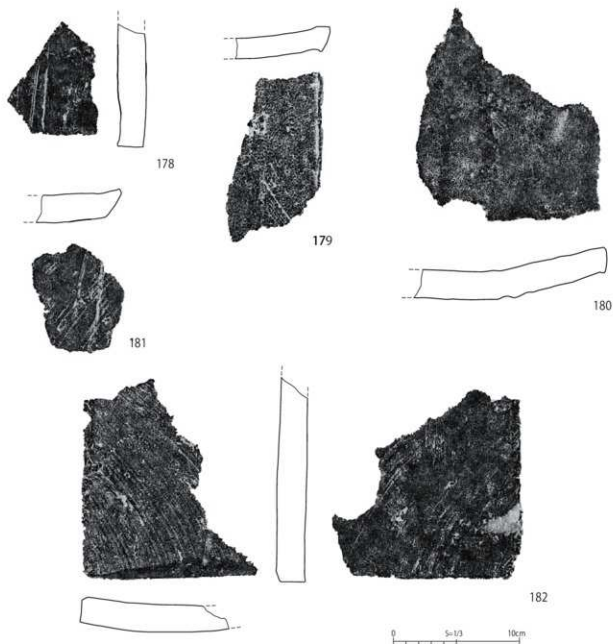


172

第 32 図 SK29 出土遺物実測図 2

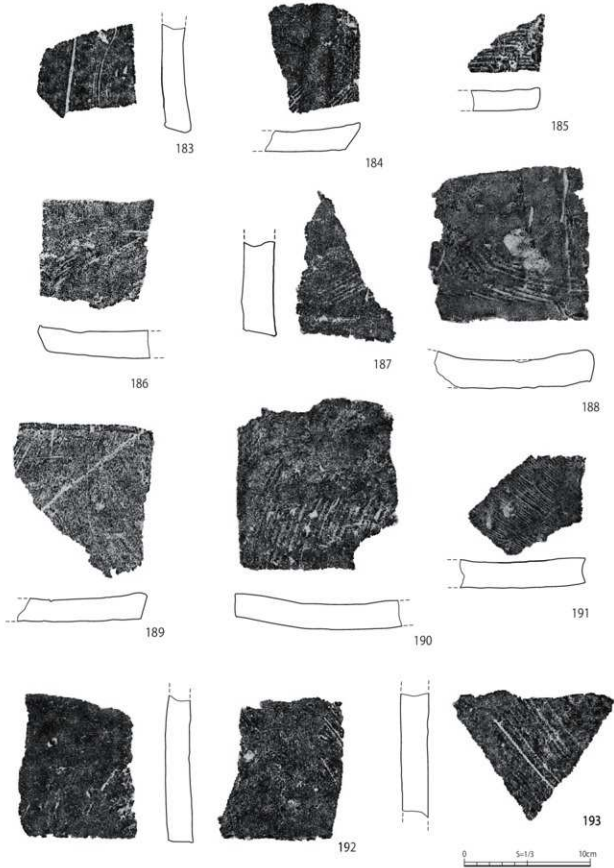


第33図 SK29 出土遺物実測図3

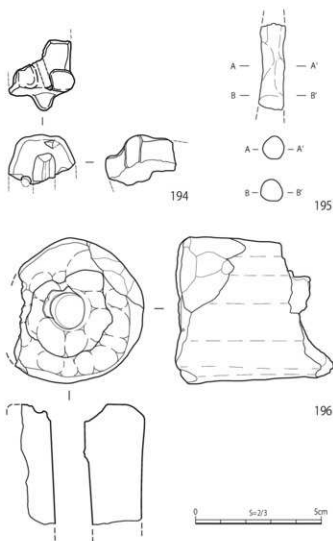


第34図 SK29出土遺物実測図4

干のくぼみが見られ、明確な面取りは確認されない。両面の側縁は丸くなっている。186の凹面側縁も丸くなっており面取りをされた可能性がある。広端（狭端の場合もあり、以後は端部とする）には浅い面取りが見られる。187は凸面端部縁が若干張り出す。凹面端部には浅い面取りが行われる。比較的厚い。188は凸面には沈線状の工具痕を境界として側縁まで幅2cm程度の平滑な面を持つ。凹面では端部に浅い面取りが行われる。凹面にも凸面と同様に沈線状の工具痕を境界として幅1.5cm程度の平滑な面が見られる。凹面側縁は丸くなっており面取りされた可能性がある。189の凹面には斜め方向（対角線状）に沈線が見られる。端部には角に少し面取りが行われる。190は凸面端部縁が張り出す。凹面端部には浅い面取りがみられ、凹面側縁は丸く、面取りが行われている可能性がある。191は凹面には側縁との間に幅1.5cm程度の平滑面が見られ、側縁にはユビオサエが行われている。192は凸面端部が若干張り出し、凹面広端には浅い面取りが見られる。193は凸面にコピキ状の痕跡が見られる。194、195は瓦質土製品である。194は粘土を貼付け、ナデを行い成形している。一見すると犬の顔のようにも見えるがモチーフは不明である。2箇所穿孔がみられ、内一つは内側に押しつぶされた三角形の形状をしている。195は細い柱状の土製品。全体をユビオサエ（握り）にて成形しているが詳細は不明である。196は



第35図 SK29 出土遺物実測図5



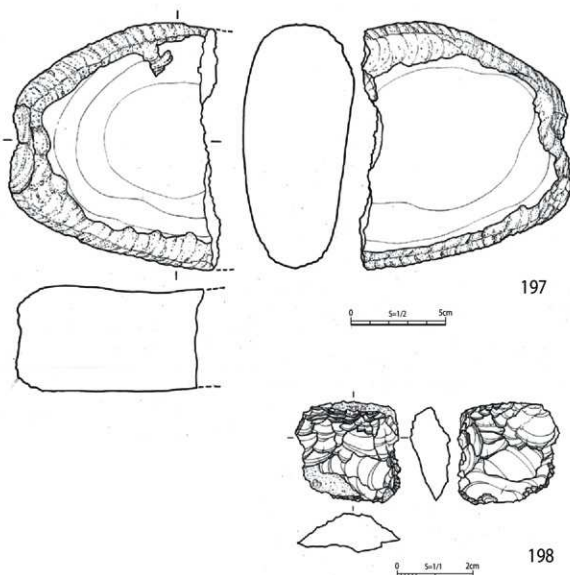
第36図 SK29 出土遺物実測図6

玉縁狭端部に向けてケズリが行われ、199はその後胴部広端部から肩部に向けて側面のケズリが行われる。凹面には糸切り痕が見られるが、コビキの可能性もある。203は軒丸瓦である。残存している瓦当から径は約17cm程度で珠紋は20個程度あったと想定される。204は軒平瓦である。瓦当部分は破損しており詳細は不明であるが交差する細い陽線状の紋が見られた。図では陽線が直線で表現しているが曲線の可能性がある。瓦当の外区には粘土が張り付く。205は凹面端部に深い面取りが行われるが、面取りの始点は縁に近い。凹面に側面に沿って爪のような痕跡も見られる。206は凸面側縁が若干張り出す。凹面端部には浅い面取りが行われるが、面取りの始点は縁に近い。凹面側縁は複数回面取りが行われる。207は丸瓦の玉縁狭端部分の破片である。肩部からの面取りは玉縁狭端部に向けて行われる。208は凸面側縁には側面の成形に起因すると思われる粘土の張り出しが見られる。これは凹面台に乗せたまま瓦に対し垂直方向に側面を切り落とした可能性が考えられる。凹面端部は面取りがされるが、ケズリではなくナデの可能性もある。209は凸面側縁が若干張り出す（粘土がはみ出した様な痕跡）。凹面は胴部から側縁に向けて強いナデが行われ、胴部から動いた粘土が側面に残される。これは凹面側縁の面取り後の調整である。凹面端部には浅い面取り後、更に縁の角を面取りしている。210は凸面端部に若干の張り出しが見られる。凹面端部は角の部分で面取りしている。211は凸面端部に若干の張り出しがある。凹面端部には明確な面取りは見られない。212は凸面端部に若干の張り出しがある（粘土がはみ出した様な痕跡）。凹面側縁は角が緩い。213は凸面端部に若干の張り出しがある（粘土がはみ出した様な痕跡）。凹面側縁には側面の成形に起因すると思われる粘土の張り出しが見られる。214は凹面端部に浅い面取り（ケズリでなくナデか）が行われるが、面取りの始点は縁にやや近い。215は凹面端部に深い面取りが行われる。216は両面の側縁に面取りが行われている。217は凸面側

筒状の瓦質土製品である。中央に穿孔があり穿孔の周辺は一段窪む。道具瓦の一部である可能性も考えられるが詳細は不明である。197は安山岩製の石皿である。約1/3が欠損している。a面、b面ともその中央部に摺面があり、b面はほぼ平坦面となっている。それに比べ、a面は曲面になっており、磨耗の度合いも高く、つるつるの面となっている。砥石としての機能も考慮しなければならない。198は漆黒で良質の黒曜石を用いた楔形石器である。石材は西北九州産であろう。a面左側辺上部とb面右側辺上部をのぞき両面の縁辺に細かな剝離痕が連続しており、潰れが認められる。また、両面は上下左右方向の剝離痕でほぼ覆われており、楔形石器の典型例とすることができる。

E8 トレンチ出土遺物 (第38図～第41図)

199～221はSK29からの出土遺物ではないが、E8トレンチ(第9図参照)掘削にはSK29の一部が含まれ、(E8トレンチ掘削の結果、SK29の検出につながった)SK29に関連する可能性が高い。そのためSK29出土遺物に続けてE8トレンチ出土遺物の報告を行う。199～202は丸瓦である。199、200の玉縁凸面狭端縁は若干張り出す。199～201の玉縁凹面狭端縁は面取りが行われている。玉縁凹面側面は肩部から



第37図 SK29 出土遺物実測図7

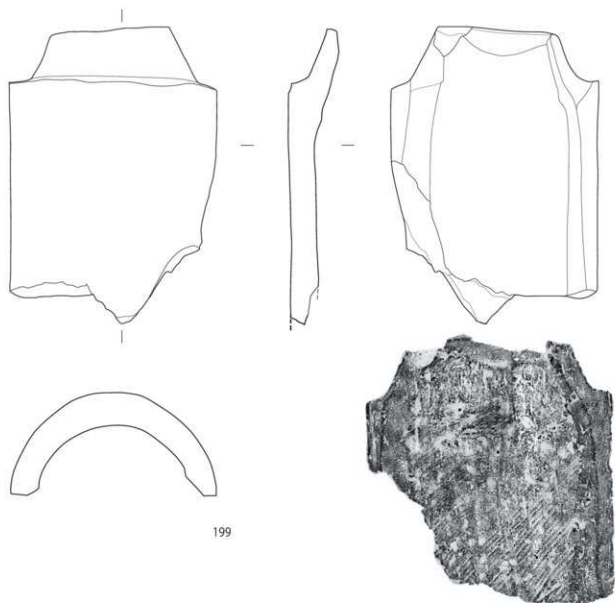
縁が若干張り出す（粘土がはみ出した様な痕跡）。凹面側縁は面取りが行われる。218は凸面端部が胴部からのユビオサエにより若干張り出す。凹面端部には明確な面取りは見られない。219は凸面側端は面取りが行われている。220は側面成形時に押された粘土が凹面側縁に張り付く。凹面端部には面取りが見られない。221は比較的薄く、凹面側縁がつまみ出され、側面が反る。

SD09（第42図）

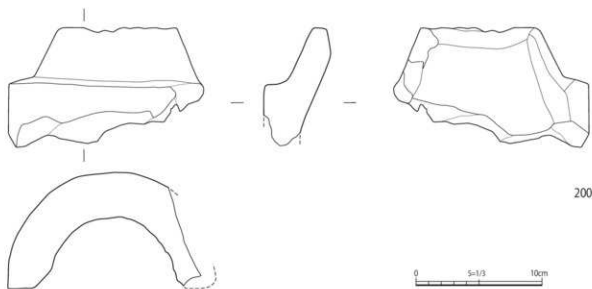
調査区北側のD7、E7、E6、E5グリッドに位置し、南北に延びる溝状の遺構である。道路状遺構の西側を平行に延びる溝である。SK12に切られる。検出長6m、幅0.7mを測る。長軸は北から西側に15°振れる。深さは0.5mを測り、断面形は半円状をなす。遺構埋土は単層で、褐色土である。

SD10（第42図）

調査区北側のD7、E7、E6グリッドに位置し、南北に延びる溝状遺構である。SD09同様に道路状遺構の西側を平行に延びる溝であり、SD09よりも道路状遺構寄りに位置する。検出長18.58m、幅0.9mを測る。長軸は北から西側に12°振れる。SK11、SK12、SK26土坑を切る。深さは0.23～0.24mを測り、断面形は丸みを帯びた浅い葉研形をなす。遺構埋土は4層から構成され、1層は暗褐色土（表土由来）、2～4層は灰黄褐色土（岱明層由来）である。埋土は位置によって単層になることもある。

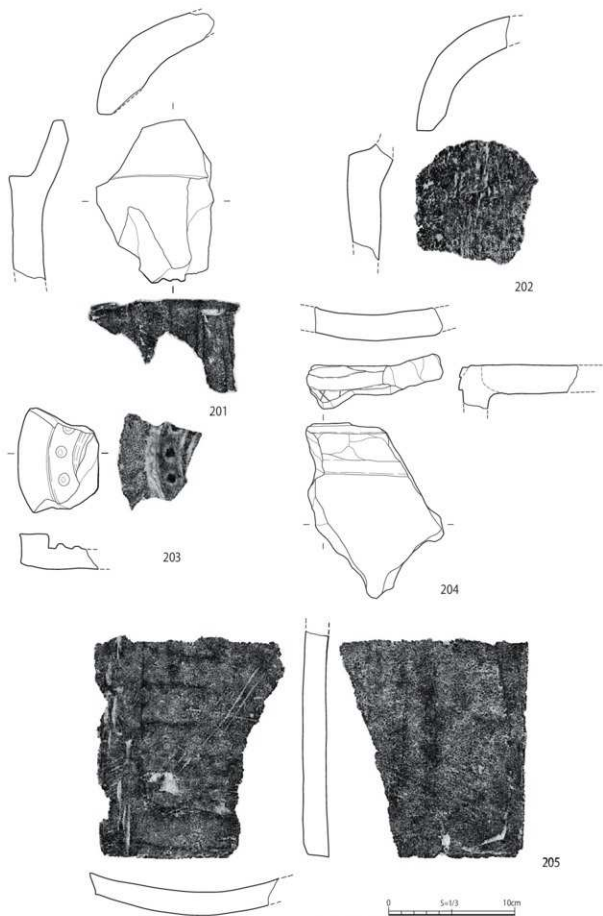


199

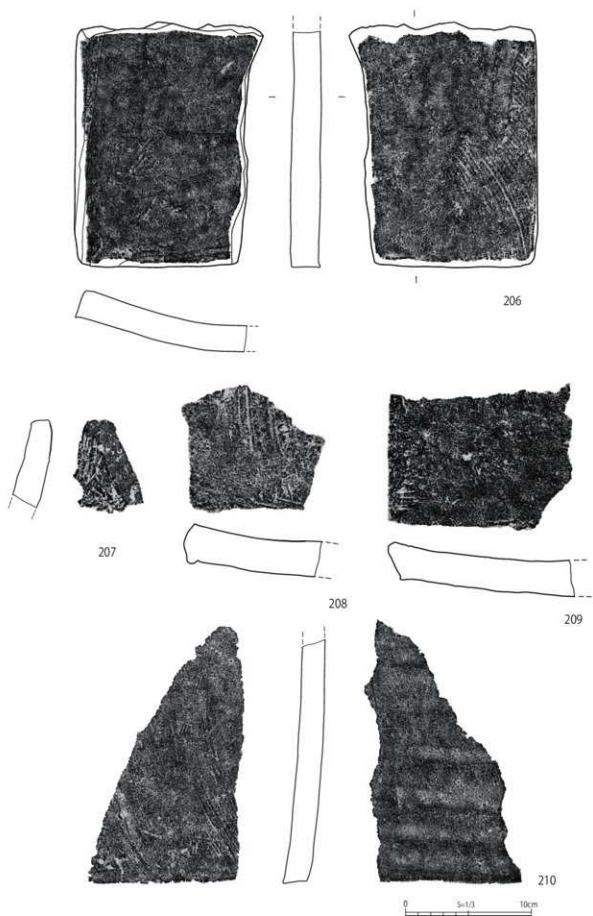


200

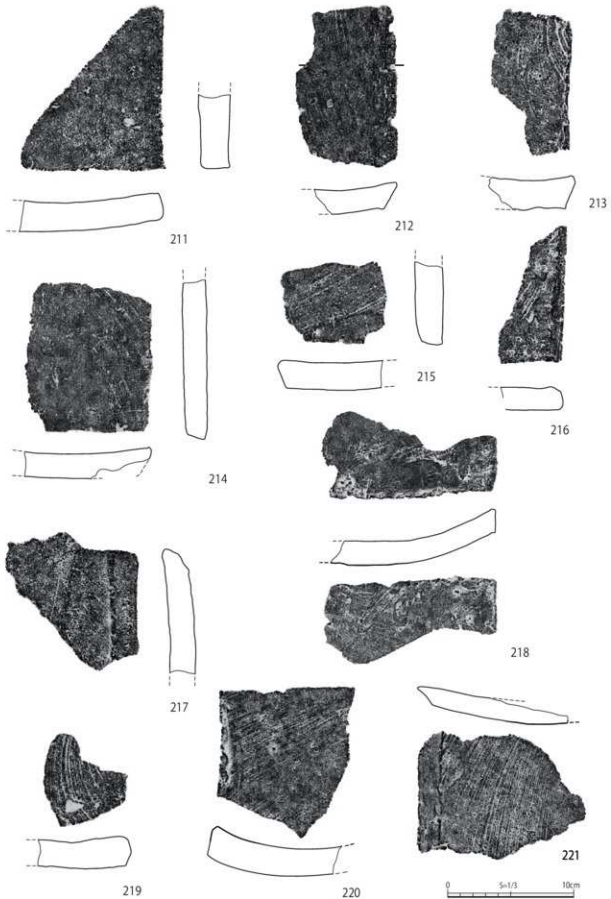
第38図 E8トレンチ出土遺物実測図1



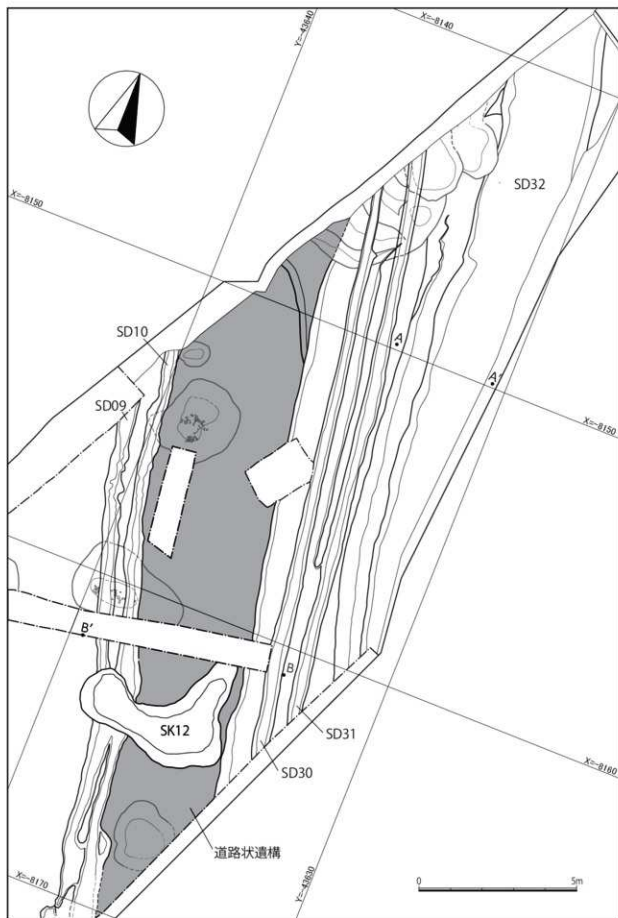
第39図 E8トレンチ出土遺物実測図2



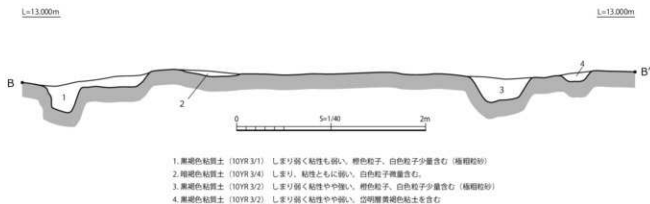
第40図 E8トレンチ出土遺物実測図3



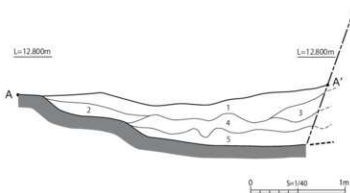
第41図 E8 トレンチ出土遺物実測図4



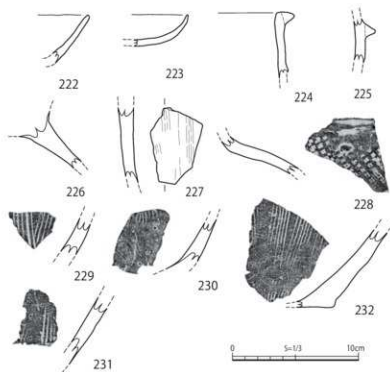
第42図 調査区北側道路状遺構周辺実測図 (S=1/120)



第43図 道路状遺構土層断面図 (S=1/40)



第44図 SD32土層断面図 (S=1/40)



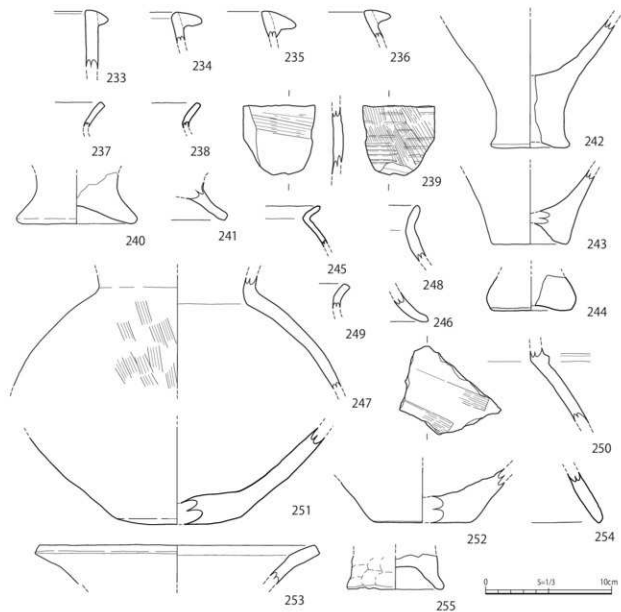
第45図 SD10・SD32出土遺物実測図

SK12 (第42図)

調査区北側のE6グリッドの西壁付近に位置するいびつな不定形の土坑である。長軸4.9m、短軸3.9mを測る。長軸は北から西に85°振れる。SD09、SD10を切る。深さは0.28mを測り、断面形は浅い挿鉢状をなす。

SD32 (第42図)

調査区北部のE7、E8、E9、F7、F8グリッドに渡って位置し、ほぼ南北に延びる溝状の遺構である。道路状遺構の東側に位置する大溝である。方向は道路状遺構と同じである。検出長27m、幅2mを測る。長軸は北から西側に7°振れる。深さは0.54mを測り、断面形は一段のテラスを持つ浅い逆台形をなす。本遺構は谷底と段丘の境目に設置されており、溝底のレベル高は南北でほとんど変わらず、塚原Ⅱ区におけるS001のレベルも高低差は10cm以内である。遺構埋土は5層から構成される。埋土は1、2層が粘性の弱い黒褐色土～暗褐色土であり、3層が粘性の強い暗褐色土、4層が粘性の強い黄褐色土、5層が粘性の強い褐色土である。4、5層と粘性が高いので水中での堆積物であろう。一度掘りかえてその後、1～2層が堆積もしくは埋め立てが行われたものとみられる。



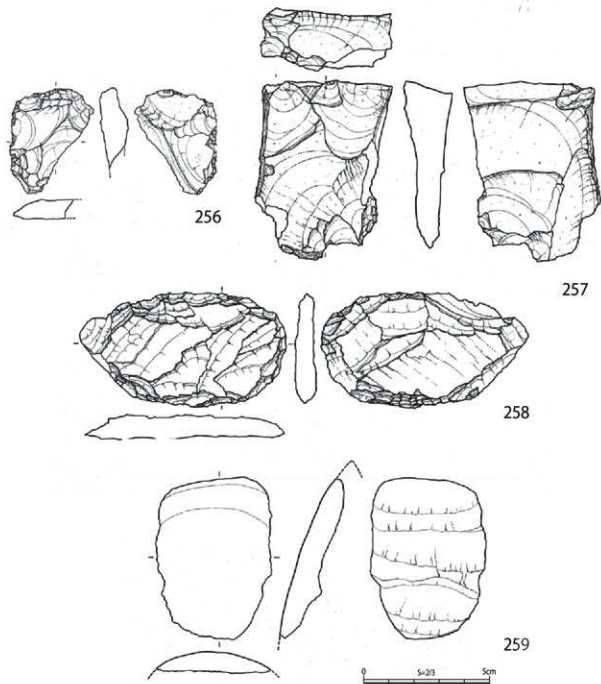
第46図 SK12出土遺物実測図1

道路状遺構（第42図 網掛け部分 第43図）

E8、E9 グリッドに南北に伸びる幅約4mの硬化面が検出された。その硬化面はSD09、SD10、SD32と同様の方向に伸びる。波板状遺構などは検出されていないが、硬化面が帯状に伸びる状況から道路であると想定される。硬化面東側にある2条の溝（SD30、SD31）は道路状遺構の埋没後に掘削されていることから、この遺構の伸びる方向は少なくとも近代まで地割として残っていたと考えられる。

SD10 出土遺物（第45図）

222は弥生土器高坏の坏部である。端部は内湾し丸くおさまる。223は弥生土器鉢胴部である。口縁部は緩く立ち上がる。224は弥生土器甕口縁部である。断面三角形の突帯が貼付けられる。225は弥生土器壺の胴部である。断面三角形の突帯が貼付けられる。突帯上部には指頭圧痕が見られる。226は弥生土器甕の脚部である。端部が残っていないが「ハ」の字状に開くと思われる。227は弥生土器器台である。外面にハケメ調整を行う。



第47図 SK12出土遺物実測図2

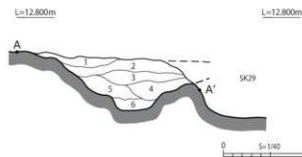
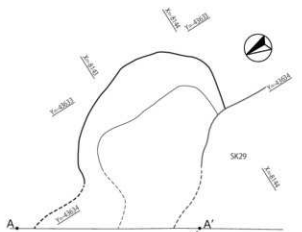
SD32 出土遺物 (第45図)

228は瓦質土器甕の頸部である。胴部に格子目タタキのち頸部にヨコナデが行われる。229～232は瓦質土器播鉢である。232は6本1単位とした播目が内面に残る。円盤状の底部を持つ。228、229、232は焼成が良好であり、硬質である。

SK12 出土遺物 (第46図)

233～238は弥生土器甕口縁である。断面三角形の突帯が貼付けられる。233は胴部が直立気味である。237、238は口縁部が外反し、端部はヨコナデにより面を持つ。239は甕胴部では胴部にタタキのちハケメ調整が行われる。240～244は脚部である。240、242～244は端部は肥厚し、上底状になる。241は脚端部が「ハ」の字状に開く。245、247～252は弥生土器壺である。245は全体的に薄く口縁が「く」の字に折れ曲がる。247は頸部から胴部である。胴部外面にはハケメ調整が行われ、頸部と胴部接合付近にはヨコナデが見られる。248は口縁で端部は若干上方に

立ち上がる。249は口縁部で端部はヨコナデにより面を持つ。250は頸部から胴部である。頸部には断面三角形の突帯を貼付ける。251、252は底部で、全体的に磨耗しており詳細は不明である。253は高環の環部である。端部は面を持っており、その面もやや凹みが見られる。254は器台下部で端部は「ハ」の字に広がる。255は鉢の脚部である。全体に指頭圧痕が見られる。256はサヌカイト製の楔形石器である。a面側からの圧力により、a面右上から左下にかけて斜めに折れ、石器の約半分は欠損している。想定される全体の形状は長方形である。残された長辺と短辺には両面に向けて急角度の細かな剥離が連続しており、楔形石器に特有の縁辺部の潰れが観察できる。257は良質のサヌカイトを用いた石核である。a面下半部には石核の素材となった大型剥片の主要剥離面(腹面)を残している。a面下端部と左端部には主要剥離面と平行する原礫(石核の素材となった大型剥片を剥ぎ取った岩石)の節理面が残っており、大型剥片の剥離が節理に沿って行われたことを物語っている。剥離作業面(石核から目的とする剥片を剥離する作業面)はa・b・cの三面あり、a面はb面とc面、b面はa面、c面はa面を打面(剥片を剥離する際にハンマーを打ちつける面)として利用している。石核に残された剥離痕は3cm前後の方形となっている。得られた剥片はおそらく石礫の素材として利用されたのだろう。258は結晶片岩製の打製石包丁と思われる。a面左半部とb面右下半部に結晶片岩の節理面が残されており、素材が板状であったことがわかる。素材には成形のための比較的大きな剥離が施され、周囲には整形のための細かな剥離が連続している。特にa面上端部にはb面からの打撃による小さな剥離痕が連続し、ゆるやかな弧状になっている。おそらく片刃の刃部であろう。刃部の先端部は磨耗が進んでいる。また、両面の下半部にも磨耗痕が面として広がっている。これは手による擦れかもしれない。259は福岡市今山産の玄武岩質安山岩を用いた石斧の刃部碎片である。形状から見ると刃縁直下の部分と考えられる。碎片の傾きから想定すると両刃磨製石斧であろう。



1. に近い黄褐色粘質土 (10YR 4/3) 鉄分をかなり含む。
2. 褐色粘質土 (10YR 4/4) 空明礫黄褐色砂質土を大量に含む。硬く締まる。
3. に近い黄褐色粘質土 暗褐色粘質土 (10YR 4/3) 白色石礫をかなり含む。
4. 黄褐色粘質土 (10YR 5/6) 空明礫土ブロックを含む。
5. 黄褐色粘質土 (10YR 5/6) 粘質が強い。
6. に近い黄褐色砂土 (10YR 5/4) 空明礫黄褐色粘質土ブロックをわずかに含む。

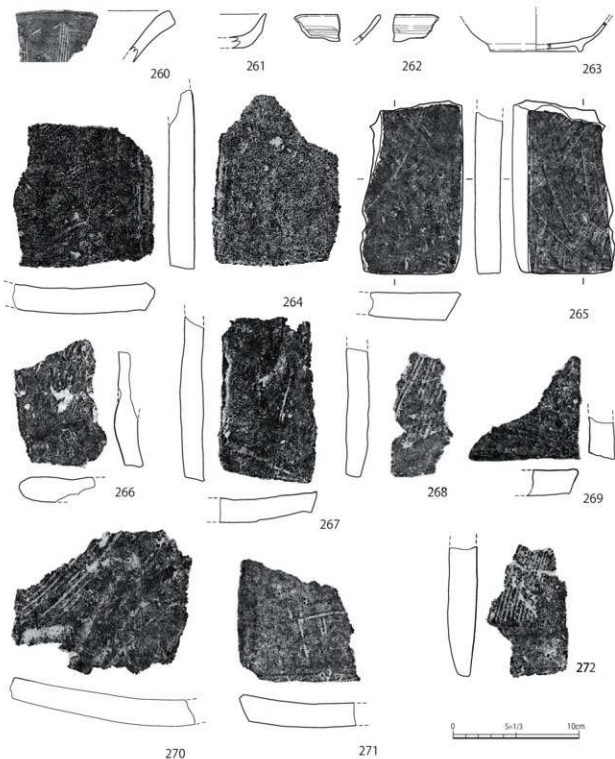
第48図 SK33実測図 (S=1/40)

SK33(第48図)

調査区北部のE8グリッドに位置するやや歪な楕円形の土坑である。SD32掘削時に見つかったため遺構の一部は破壊してしまったが、SD32の埋没後に掘削されている。遺構の西側の一部が調査区外になるため、SD27と同様に溝となる可能性も考えられる。南西側はSK29にも切られており全体の形状は不明である。検出長軸1.9m、検出短軸1.3mを測る。長軸は北から東側に3°振れる。深さは61cmを測り、断面形は浅い半円状をなす。遺構埋土は8層から構成され、各層とも黄褐色土である。遺物は、弥生土器であり、城ノ越式の甕、壺の破片が出土し、安山岩製の巖石片も出土している。須臾器の破片も1点出しており、遺構時期の詳細は不明であるが遺構の切り合い関係からSD32より新しくSK29よりも古いと想定される。

E8炭化物層(第42図X=8150以北)

SD27が位置するE8グリッドでは遺構埋土の上に炭化物層が堆積している。炭化物層の厚さは最大で0.2m程でSK29付近を起点とし、北側や東西に広がり、調査区外へ至る。炭化物層から出土した遺物からSK29とそれほど時期差はないと思われる。窯業時の灰原の可能性

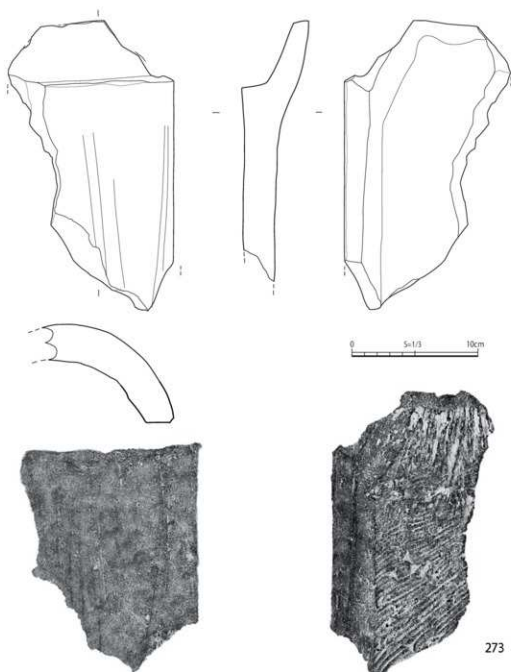


第49図 E8炭化物層出土遺物実測図1

も十分考えられるが、調査区が狭い範囲であったため詳細は不明である。

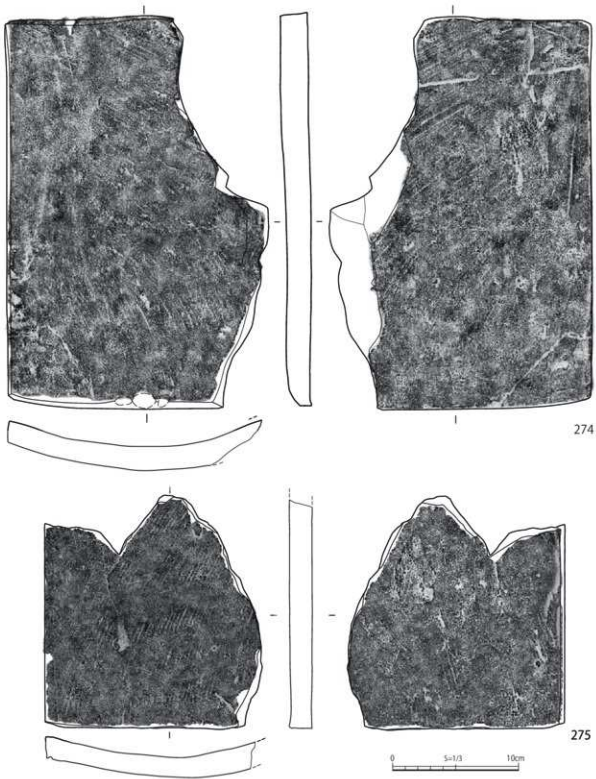
E8炭化物層出土遺物（第49図～第51図）

260は瓦質土器播鉢である。播目は5本程度を1単位としている。焼成は良好で硬質である。261は土師皿である。体部、口縁部の2段階のヨコナデが見られる。262は瓦器碗である。体部には内外面にミガキが見られ、端部はヨコナデが行われ、帯状に黒化している。硬く焼きしまる。263は白磁皿である。高台端部は無軸で砂目の砂粒が付着する。264～272、274、275は平瓦である。264は凸面側縁が若干張り出す（粘土がはみ出した様な痕跡）が他の同様の痕跡と比較すると明確に観察で



第50図 E8炭化物層出土遺物実測図2

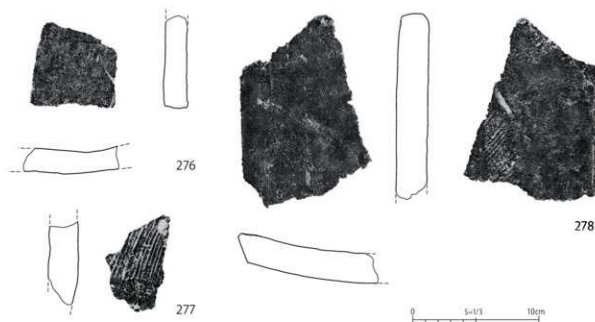
きる。凹面側端は丸く成形されているが、これはナデによる可能性がある。265は凸面側縁が若干張り出す（粘土がはみ出した様な痕跡）。266は凸面端部は若干張り出し、凹面端部は深い面取りが行われる。側面は丸く、指頭圧痕が一部残る。267の凹面端部はやや深めの面取りが行われる。凸面側縁が若干張り出す（粘土がはみ出した様な痕跡）。凹面側縁にも同様の痕跡が見られる。268は凹面端部に深めの面取りが行われる。269は凹面端部に浅い面取りがされ、その始点は端部に近い。270は凹面側縁に面取りが行われる。271は凹面端部は非常に浅い面取りがされ、その始点は端部に近い。272は凹面端部にやや深めの面取りが行われる。273は丸瓦である。凸面胴部にケズリが行われ、凹面胴部にはコビキ痕が見られる。側面は広端から狭端に向けてケズリが行われ、その流れて側縁は玉縁狭端に向かってケズリが行われる。凹面玉縁狭端は浅い面取りが行われる。274は凸面にコビキ状の痕跡が見られる。凸面側縁が若干張り出す（粘土がはみ出したような痕跡）。凹面端部に浅いナデによる傾斜が見られるが、もう一方の端には見られない。275は凸面側縁が若干張り出す（粘土がはみ出した様な痕跡）。



第51図 E8炭化物層出土遺物実測図3

E8炭化物層下面出土遺物（第52図）

276～278は炭化物層の下から出土した平瓦である。これはSK29検出面と同一の面である。276は凸面端部に指頭圧痕が縁に沿って見られる。277は凹面にはコビキ痕が見られ、凹面端部に深めの面取りが行われる。278は平瓦の一辺を斜めに切り落として成形していると思われる。これは間棟に接する場所に葺かれていた瓦の可能性が考えられる。

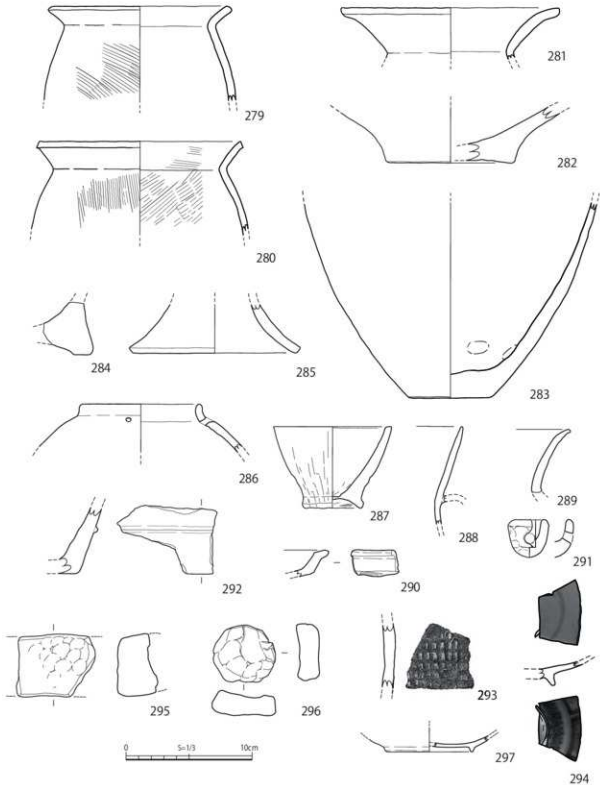


第52図 E8炭化物層下面出土遺物実測図

E8・E9 包含層出土遺物 (第53図・第54図)

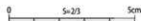
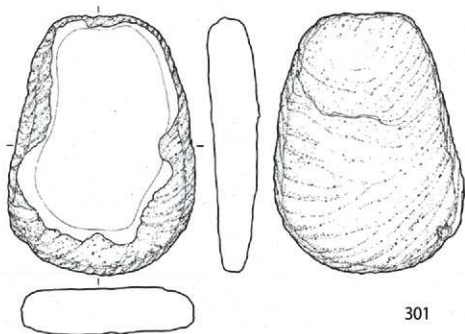
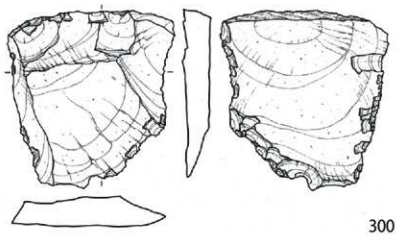
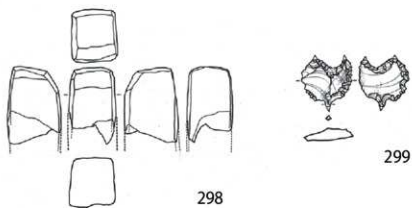
279、280は弥生土器甕である。いずれも口縁から胴部までの破片である。口縁端部はヨコナデにより面を持つ。279は口縁部外面に横方向のハケメも若干見られる。280は口縁端下部はつまみ出され、頸内部の屈曲部には明確な角を持つ。281～283、289は弥生土器壺である。281は口縁部は緩やかに立ち上がり端部を一段更に外側に開く。口縁部には縦方向のハケメ状の調整を行い、口縁端部はヨコナデを行っている。282は底部と胴部の一部である。胴部は大きく外側に開く。底部はやや上底となり内面も中心部付近は周りと比較して器厚が薄くなる。283は底部から胴部まで残存している。胴部と底部接合部の内面と底部内面の中心付近には指頭圧痕が見られる。284は弥生土器甕の底部である。底部は肥厚した円柱状で接地面は平坦で底部外面は上底になっている。285は弥生土器脚付甕の脚である。端部付近はヨコナデを行い、端部は面をもつ。286は弥生土器短頸壺である。口縁端部は丸く若干外反する。頸部付近には穿孔が見られる。287は弥生土器鉢である。底部の器厚は非常に薄い。脚から胴部にかけて縦方向のナゲが行われる。288は弥生のジョッキ形土器である。取っ手部分は破損しているが接合部の観察によりやや上方に立ち上がると想定される。口縁は直線的に外方に開き、端部は丸くおさまる。289は弥生土器壺の口縁である。口縁は直線的に開き、端部は更に外反させる。全体的に磨耗しており調整は観望できない。290は弥生土器高環の坏部である。口縁部中ほど一旦外方へ折り曲げたのち、更に口縁端部を外反させ、ヨコナデにより成形する。291は弥生のミニチュア土器の鉢である。胴部には内面から外面へ傾いた穿孔が一つみられ、穿孔の位置は底部内面の高さとはほぼ一致している。底部から口縁部にかけて黒斑が残る。292は瓦質土器火鉢の底部付近の破片である。断面半球状の突帯が貼付けられる。残存している範囲では燻された状況は確認されない。293は瓦質土器甕の胴部である。外面に格子目タタキが行われている。294は染付の碗である。高台外面には團線が2条、高台接合部付近の体部には芭蕉葉紋、体部には植物紋、見込み部には團線が2条見られる。295は窯の部材、もしくは窯道具と思われる。土師質で直方体の形状が想定される。296は窯道具と思われる。手づくねで円盤状に成形している。297は白磁皿の底部である。断面三角形の高台が貼付けられる。高台端部は無軸である。

298は炭化物層である7層(土層図F)から出土した柱状片刃石斧(石鑿(のみ))の基部である。北九州産の層灰石を用いており、断面にも層理脈が浮き出ている。研磨方向は不明瞭であるが、すべて研磨面で覆われている。幅1.7cm、厚み2.2cmである。299は黒褐色土層(E-7区包含層)から出土した石鏝である。漆黒で良質の黒曜石を用いている。石材は西北九州産であろう。方形をした小型の剥片の3カ所に突起部を作り出している。特に下部の突起は抉りも深く鋭い。3カ

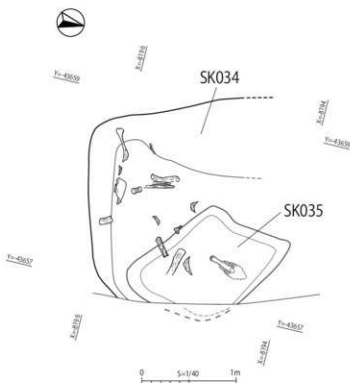


第53図 E8・E9 包含層出土遺物実測図

所とも先端部が欠けている。300は褐色土層(E-8区包含層)から出土した削器(スクレイパー)である。節理面の発達したサヌカイトの大きな剥片を用いている。b面(腹面)下端部にa面側からの連続した加撃により刃部を作り出している。この石器も、44・167と同様に風化が著しく、旧石器の可能性が高い。301は褐色土層(E-8区包含層)から出土した石皿である。扁平な安山岩の転石を用いている。A面中央部に平坦な磨面が見られる。



第54図 包含層出土遺物実測図



第55図 SK34・SK35 馬骨出土状況実測図

SK34 (第55図)

SK34はC3グリッドの周囲に粘土採掘坑と思われる土坑が複数ある中で検出された土坑である。土坑の形状は隅丸方形と思われるが一部は調査区外に伸びるため形状の詳細は不明。埋土は砂粒混じりの暗褐色土で遺構内には馬骨が散乱した状態で検出された。土坑の大きさは径約2m、土坑の深さは検出面から5cm程度である。馬骨の散乱している状況から馬を埋葬した可能性は低いと考える。

SK35 (第55図)

SK35はSK34の完掘後、SK34の底面でプランを確認した土坑である。SK34と同様に馬骨の上顎骨が頭部を下にした状態で出土している。埋土は砂粒と黄褐色土ブロック混じりの灰白色粘質土である。土坑の形状は一部が調査区外にのびるが隅丸方形と思われる。土坑の大きさは最大で約1.7mで、深さは約0.2mを測る。切り合いとしてはSK35がSK34に切られる状況であるが、時期的に大きな差はないと思われる。遺構の全体が検出できていない状況で断定することはできないが、特定の部位のみの出土であると想定するとSK35は祭祀的な埋納遺構の可能性も十分考えることができる。SK34とあわせて粘土採掘坑の中でもあることから、出土した馬骨は採掘した粘土運搬などの労働力を担っていた馬の可能性も考えてよいだろう。

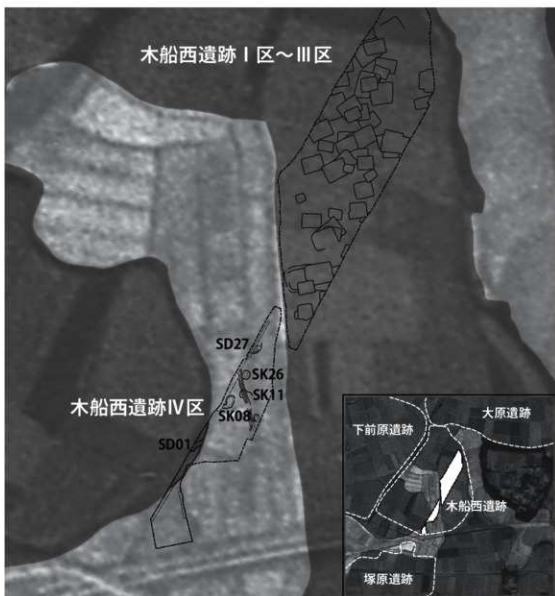
第V章 総括

第1節 はじめに

木船西遺跡Ⅳ区では弥生時代から近代までの遺構が検出されている。調査範囲が狭いため遺構密度自体は高くはないが、弥生時代後期の土器が一括して多量に出土したSD27、底部穿孔のミニチュア土器が出土したSK11、破片であるが遺物が出土しているSD01、その他SK08、SK26などの同時期の遺物が出土している遺構や、中・近世瓦が一括して出土したSK29、中・近世瓦を含む炭化物層の下から検出されたSD32・道路状遺構（中・近世期）、近代の土地改変時に設置された石垣とその裏込めの下から検出された道路状遺構（近代）などいろいろな遺構が検出されている。このことは、この地が弥生時代から近代・現代にわたって長い間、何らかの形で利用されていたことを意味する。ここでは木船西遺跡が位置するこの場所がどのように利用され現在に至るのかを木船西遺跡Ⅳ区で検出した遺構の時期である弥生時代後期、中世、近代を中心にまとめる。

第2節 弥生時代の木船西遺跡

第56図は木船西遺跡周辺の1947年米軍撮影空中写真の地割を参考にしながら、現在の土地の高低差から想定できる段丘面の範囲を網掛けで図示した中に木船西遺跡Ⅰ区からⅣ区の弥生時代後期の遺構を重ねたものである。これを見ると木船西遺跡Ⅳ区でSD01が検出されている遺構面の段差が1947年の空中写真で見られる地割の形状とほぼ一致し、木船西遺跡Ⅳ区で検出された段差はこの段丘の東端の形状を踏襲したものであり、木船西遺跡Ⅳ区の調査区全体が細長く南北に伸びる谷の中に設定されていることがよくわかる。一方で木船西遺跡Ⅰ区からⅢ区は調査区全体がⅣ区に隣接しているものの谷の中ではなく、段丘面上に位置しており、この状況が検出された遺構種類の差異を生じる要因となっている。一旦ここで地形的にも断絶があり、検出される遺構もこの状況に合致していることを考慮すると、同段丘上に位置する木船西遺跡北隣の大原遺跡と西隣の下前原遺跡を含めた遺跡群が弥生時代後期に一つの集落群を構成し、木船西遺跡が属するこの集落群は木船西遺跡Ⅲ区を南限とすると考えることができる。今回の調査で検出したSD01、SD27の溝がこの集落域の境界をさらに明確にしている。SD27は木船西遺跡Ⅲ区の南側に位置しており、内側の溝と考えることができる。SD27は今回の調査区内で一旦収束していることから、土橋状の空間を挟んで東側にも同様の溝が埋没していることが想像されるが、現状では弥生時代後期に土橋状の空間から東側へ溝が更に掘削されていたとしても、調査区内ではSD32が掘削された時点でその痕跡を確認することができなくなっている。SD01は調査区内で一段高くなった場所で検出された溝で、この一段高い範囲は復元した段丘面の形状と一致する。SD01は段丘面上に掘削した溝を谷と接続することで境界としての役割をさらに明確化させている。このことから木船西遺跡が属する集落はこられる二つの溝が集落全体を巡れば2重の環濠を持つこととなる。遺構の時期は出土している遺物からどちらも津袋Ⅰ期からⅡ期までの段階と想定される。同時期の環濠を持つ遺跡としては蒲生・上の原遺跡、うてな遺跡などが挙げられる。蒲生・上の原遺跡では濠Ⅰから濠Ⅵまでの6本の環濠が想定され、それぞれ濠Ⅳ、濠Ⅰ・Ⅴ、濠Ⅱ・Ⅲ・Ⅵと埋没時期の違いから3つの時期に分けられる。その中でも濠Ⅰと濠Ⅳは台地の端部を切るように伸びていることが調査により明らかとなっている。濠Ⅰは土橋状の空間も見られ濠の内側に住居址が広がっている状況は木船西遺跡とよく似ている。うてな遺跡では10号溝（A溝、B溝）が70mにわたって緩斜面上で検出されている。溝内には多数の遺物が廃棄されており、この状況は木船西遺跡Ⅳ区SD27と同様である。方保田東原遺跡では幅7.4mの3号溝が検出されている。この3号溝のなかに幅1.1m～1.8mの小溝もあり、その小溝（3号溝の西端）では大量の土器廃棄が見られる。土器は溝内の中位から上位で出土して



第56図 木船西遺跡弥生時代後期遺構配置図

おり、SD27の遺物出土状況とよく似ている。近隣の遺跡では築地館跡、東南大門遺跡、下前原遺跡が溝を検出された遺跡として挙げられる。築地館跡では最大幅約8m、深さ約1.2mの東西に伸びる一条の溝が検出され、その北側で住居址が検出されている。木船西遺跡から約0.8km北上した場所にある東南大門遺跡では溝SD-08が検出されている。この溝の北側では石棺墓、土坑墓に加え張棺墓が多数見つかり、その北側でも調査区にわずかに溝状の遺構が見られる。この溝状の遺構が集落域と墓域を分けていた可能性が考えられる。木船西遺跡の友田川を挟んで西に位置する下前原遺跡では昭和32年に緊急調査が行われた際に31基の住居址が検出されているが、その周辺をめぐるように溝がみられることから、環濠を伴う可能性が指摘されている。しかし、この溝は調査時に発見されたものではなく、当時から現況で確認できるものであったため、住居址に伴うものかは言及を避けている。以上のように熊本県北部でも弥生時代後期になると環濠をもつ集落の出現がみられるが、木船西遺跡においてもその一連の流れで出現した集落の可能性は十分考えられる。

ただ、現段階で木船西遺跡が属する集落が2重の環濠をもち、木船西遺跡Ⅲ区を集落範囲の南限として考えるにはいくつかの問題点がある。それはまず根本的な問題であるが、SD01やSD27が環濠となるかどうかである。上記で述べたように今回の調査では環濠と認識するほど遺構のプラン

は検出できておらず、これを明らかにするためには隣地の調査を待たなければならない。また2つの遺構が環濠であったとしてもそれが即、集落の境界の環濠としてなりえるのかどうかは更なる調査と検証が必要となる。地形的断絶は木船西遺跡Ⅲ区南側ではみられるが、東側では現状では見られず、木船西遺跡Ⅲ区の住居址も更に南側に広がることは想像に難くない。地形的にも木船西遺跡Ⅲ区の東側で谷が埋められているような痕跡も見られず、復元した段丘面の範囲は木船西遺跡Ⅳ区の東側を進み、更に塚原遺跡が立地する南側まで広がる。この木船西遺跡と塚原遺跡との間に境界を設けるとするならばSD01、SD27に対応する溝が木船西遺跡Ⅳ区東側でも検出される必要がある。また弥生時代中期であるが塚原遺跡においても環濠の可能性を考慮することができる区画溝が確認されており、塚原遺跡との関係性も注目しておかなければならない。

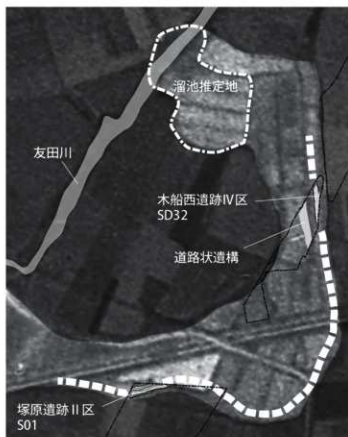
第3節 中・近世の木船西遺跡

今回の調査で検出した遺構で中世期の可能性のあるものはSK29、SK33、SD32である。SK29は瓦の廃棄土坑であると考えられる。この廃棄土坑の上には炭化物層が広がっており、瓦窯の存在を意識せざるを得ない。包含層内ではあるがSK29が検出された付近には窯道具や窯体と思われる遺物も出土している。SD32は少なくとも16世紀中には埋められており、SD32は中世期の遺構であると判断している。SD32は復元した段丘面の縁辺に沿って検出されているため、木船西遺跡Ⅳ区で調査した谷部の中を段丘面の縁辺に沿って西に流れている可能性が考えられる。段丘面の縁辺に沿う溝は塚原遺跡Ⅱ区でも検出されている。塚原遺跡Ⅱ区のS01がそれにあたるが、S01は上部が削平されているものの幅約6m、深さ約1.5mを測り、遺構の時期は不明となっているが、埋土に近世の磁器類が含まれていることから埋没時期を近世以前に求めることができる。そのためSD32と同時期に存在し、SD32と接続していた可能性がある。

この溝は谷の奥から下流域の谷底平野へ水をもたらすための水路としての役割が考えられるが、その水の供給源としては谷からの湧水、溜池、友田川との接続の3つの経路を考慮することができる。

旧玉名郡岱明町付近では溜池が多く、全国的に見てもその比率が高い地域となっている。この地域は灌漑用水として使用できる河川が少なく、旱魃被害が顕著な地域である。そのため小谷であっても溜池を築造したり、谷の上下に分かれて複数の溜池を築造する場合もある。この地域の溜池は谷を堰き止める形で谷奥からの湧水を溜める構造のものがほとんどであり、木船西遺跡の北側には同構造の溜池が現在も残っている。木船西遺跡Ⅳ区の調査区が内包される谷は一旦狭まったのち奥が広がるプランが想定される。これは溜池を作るのに適した地形であり、谷の中では岱明層付近まで掘削をすることで湧水が得られるため地表面からの自然の湧水に頼ることなく溜池を築造することも十分可能であったであろう。玉名の溜池は多くが明治以前に築造されたと考えられているが、遺跡から1.6km北上した場所にある四十九池では大野氏の関係者が入水したという伝承も残っており、一部の溜池に関しては中世後期まで遡るものもあったと考えられている。そのため木船西遺跡Ⅳ区で検出した谷では中世段階に溜池があり、そこからSD32や塚原遺跡Ⅱ区S01の溝を通じて下流域に供給していた可能性は十分にありえる。

谷の西側に流れる友田川もこのSD32や溜池とともに遺跡周辺の水利に関して注目すべき点が多い。友田川は小岱山山腹から端を発し、四十九池の南をかすめ築地集落がある段丘上を南進し、さらに国道208号線を越え、木船西遺跡まで至る。この友田川は以前から人工的に掘削された水路と考えられているが、復元した谷を横切ることを踏まえると友田川の現流路になる以前は谷内のSD32と接続し、現在とは違う流路を経て下流域に流れていたと考えることは十分可能であろう。友田川掘削以前(溜池とSD32)、旧友田川(SD32経由)、現友田川の3つの水利経路は木船西遺



第57図 木船西遺跡SD32 流路と溜池復元図

跡周辺の水利が湧水を利用した溜池から始まり、周囲の環境の変化（耕作地の増加など）により溜池ではなく水路を谷の中のSD32に接続することで状況を改善させるに至る。その後さらに水路（友田川）を南に伸ばし、水利経路の再々編が行われ現在の状況となるという一連の水利系統の変遷として捉えることができる。

友田川の掘削時期は資料が乏しいこともあり、不明となっている。第57図の様に復元した谷を友田川が横切ると仮定すれば、溜池を含めた水利系統の廃絶後に掘削されたと見ることができる。そのためSD32の埋没時期である16世紀中頃前後に友田川の掘削時期を求めることができよう。

SD32の埋没後は木船西遺跡では生産地としての一面が強くなる。SD32が埋没後の埋土上面には炭化物層が広がり、その範囲はE8、E9グリッドに及んでいる。E8グリッド下の炭化物層下ではSK29が検出されており、廃棄された状態で多数の瓦が見つまっている。SK29やE8炭化物層中から出土した瓦と類似するものは玉名市春出の中村館跡からも出土している。出土した瓦と共に多くの炭化物、還元焙焼成で面取りされた焼土塊もみられ、SK29は瓦窯に関わる廃棄土坑であると考えられる。遺構埋土は暗褐色土であるが、出土した瓦片には赤褐色土が付着したものがしばしば見られ、また、瓦の断面が燻されたり、窯糞が付着するなど瓦窯の窯体に築き込まれたと思われる瓦片が出土しているのも特徴である。加えて、本遺構を覆う焼土・炭化物層（西壁7層）からも同様の瓦窯に関わる遺物に加えて窯道具とみられる土製品も出土しており、焼土・炭化物層は瓦窯の物原の一部である可能性が高い。一方で木船西遺跡Ⅰ区～Ⅲ区では窯やそれに関連するような遺物は出土しておらず、谷の中では湧水や雨水が集まりやすく窯の立地には不向きであることを考慮すると窯が操業されていた場所は木船西遺跡の西側段丘上に求めることができよう。瓦は平瓦が多く、1枚作りに見られる端部粘土の盛上がりが見られ、凹面の調整はコピキAの痕跡のみ。丸瓦の凹面コピキAの痕跡は見られるが吊り紐痕がほとんど見られない。（1点破片で観察できるのみ）軒丸瓦、軒平瓦も各1点ずつ出土しているがいずれも破片であり、瓦当の文様構成などはつかみきれない。軒丸瓦では径が17cm程度、珠紋は小柄で20個前後配置され、巴が比較的細長くめぐる巴紋の瓦と想定される。軒平瓦は更に紋がはっきりしない。わずかに残る状態から文様の上部に「×」状の細い線を持つものであると想定がされる。軒平瓦の瓦当接合に際しては瓦当貼付け技法と呼ばれる接合方法をとっている。出土瓦にはコピキAが見られ、コピキBは確認することができないことから瓦の時期は中世末期が上限となることが想定される。天正19年（1591）に加藤清正が領内において名護屋城の御唐物蔵の瓦を焼かせ高瀬廻りで運送することを命じたことが記録に残っている。瓦窯の場所は明確ではないが高瀬周辺で造瓦していたと考えられ、瓦窯操業時期を中世末期としても矛盾は

ない。同記録内では桐紋や巴紋、唐草紋の瓦当の瓦を作らせたことをうかがわせる表現や、鬼瓦に大黒天と恵比須を指定するなどの具体的な記述が見られ、SK29で出土している196などはそのような鬼瓦の一部である可能性も否定できない。瓦の供給先が短期間で築城された名護屋城であると仮定するならば、複数の窯の存在も容易に想像できる。また、木船西遺跡IV区で出土している小型窯道具の存在を考慮すると瓦専用窯ではなく、陶瓦兼用の窯があったことも想定される。中世期の瓦窯としては九州では荒尾樺番城窯跡が挙げられるが、木船西遺跡で瓦窯操業がなされたのであれば、何らかの形で関与していた可能性も考慮すべきであろう。いずれにしても九州全体でも中世末期段階の窯跡は非常に少なく、今回は窯自体の発見ではないにしろ重要な意味をもつといえる。

SD32に沿うように伸びる道路状遺構に関しては時期を想定するには物証が乏しいが、SD32、SK29を覆う炭化物層と標高が同じである点からこれも中世末期から近世であり、窯操業に関連していたと考えてもおかしくはない。木船西遺跡IV区B2、B3、C2、C3グリッドでは造瓦に使用した粘土採掘坑と思われるものが見られる。ここでは主に岱明層と呼ばれる砂粒が混入した灰黄色粘土を採取していたと考えられる。ここで採取した粘土の運搬は検出された道路を利用していたと考えられる。またこの採掘坑の中には馬の骨が複数見つかっており、馬自体も粘土採取・運搬になんらかの関与をした可能性が考えられる。

近代になると木船西遺跡IV区の谷は耕地化が進められる。その状況を段階的に示していると思われるのが石垣の存在である。D5、D6グリッドでは段丘の縁辺に沿うように石垣が築かれているが、調査区東側壁面では石垣は確認されておらず、そのまま段丘に沿って築かれているわけではない。石垣に使われたのは安山岩質で四角錐の形状をしている。石垣の面は東を向き、地山面に直接置かれているが、四角錐の頂点部分の下には栗石を置き石垣面の角度を調整している。石垣の裏込めからは新しい陶磁器類が見られたためこの石垣は近代以降のものだと判断している。石垣が築かれる以前には道路状遺構が段丘に沿うように検出されている。この道路状遺構も石垣と同様にB3、4グリッド、C3、4グリッドで検出されず段丘に沿うことなく南側に伸びる可能性が考えられる。石垣はE8グリッド(第6図参照)でも確認された。こちらの石垣は面が南側を向いて東西に設置されているが調査区東壁面には見られないため調査区の中で取束していたと考えられる。いずれの石垣も現地表面とほぼ同じ高さまで伸びているが東西方向の石垣に関しては1947年段階の写真にそれに対応するような土地改変が見られないため戦後しばらくしてから築かれたものと考えられる。

1960年代の航空写真では谷は完全に埋められ、工場が建っている様子が写されており、この時期あたりをもって現在の景観となったといえる。余談であるが1960年代の航空写真で見られる工場は玉名製作所である。玉名製作所は終戦間際の1944年に鳥津製作所四条工場の一部を現在の玉名高校の講堂に工場疎開させたことが発端であり、終戦後、玉名市亀甲の乾綱工場跡に移転した際に新たに結成された会社である。これは高度な航空兵器技術が戦時に玉名に入ってきたことを意味しており、戦時中、玉名に大派飛行場があったことを考えると無関係ではないであろう。

今回調査区で検出できた遺構は、旧地形も含めごく一部でしかない。そのため総括で述べた内容は仮説の域をでない。しかしながら、今回の調査区周辺には今回検出した遺構の本体が眠っているのは疑う余地もなく、今後この周辺が開発される際は、全国レベルで貴重な遺跡が包蔵されていることを念頭に注意しておかなければならない。

【謝辞】

弥生土器の遺物所見・図版作成に当たり塚原遺跡発掘調査の担当者であった田中康夫課長補佐、古閑敬士氏にはいろいろと御教示をいただきました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 『玉名市史 資料編5 古文書』1993 玉名市史編集委員会
 西住欣一郎 1992 『うてな遺跡』熊本県文化財報告 第121集 熊本県教育委員会
 木崎康弘・宮崎敬士 1996 『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財調査報告 第158集 熊本県教育委員会
 宮崎敬士 2013 『築地館跡』熊本県文化財報告 第283集 熊本県教育委員会
 中村幸史郎ほか 1984 『方保田東原遺跡(2)』山鹿市立博物館
 田中康雄ほか 2000 『東南大門遺跡』玉名市文化財調査報告 第8集 玉名市教育委員会
 未永 崇ほか 2004 『玉名市内遺跡調査報告書Ⅱ』玉名市文化財調査報告 第13集 玉名市教育委員会
 未永 崇ほか 2011 『南大門遺跡』玉名市文化財調査報告 第28集 玉名市教育委員会
 中村安宏ほか 2017 『木船西遺跡』玉名市文化財調査報告 第34集 玉名市教育委員会
 田中康雄ほか 2017 『塚原遺跡Ⅰ』玉名市文化財調査報告 第36集 玉名市教育委員会
 田中康雄ほか 2018 『塚原遺跡Ⅱ』玉名市文化財調査報告 第40集 玉名市教育委員会
 田辺哲夫・田添夏喜 1957 「日本考古学協会第十九回総合研究発表要旨ペッドを有する弥生末期の
 方型竪穴住居群—肥後下前原遺跡—」『玉名高校考古学部考古学部報』19号
 門岡 久 1969 『明治百年記念 岱明町地方史』岱明町
 『熊本藩年表稿』1974 細川藩政史研究会
 高木正文 1979 「熊本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第6集 九州古文化研究会
 田辺哲夫 1990 「玉名の歴史 第三回 一縄文(二)・弥生時代—」『歴史玉名』第3号 玉名歴史研究会
 大倉千寿 2011 「玉名市内に残る農業用ため池について」『歴史玉名』第55号 玉名歴史研究会
 廣瀬岳志 2017 「瓦製作技法痕跡の再整理」『続 縄豊期城郭瓦研究の新視点』縄豊期城郭研究会
 美濃口紀子 2018 「九州地方の城郭瓦の様相」『続 縄豊期城郭瓦研究の新視点』縄豊期城郭研究会
 松田麻里・桃崎裕輔 2019 「筑前・筑後・豊前・肥前」『中世瓦の考古学』中世瓦研究会
 小林康幸 2019 「中世瓦生産の諸相」『中世瓦の考古学』中世瓦研究会
 上原真人 2019 「中世瓦研究の到達点と展望」『中世瓦の考古学』中世瓦研究会

※第56図・第57図は国土地理院で公開されている米軍撮影の空中写真(1947年撮影)を加工し作成したものである。

附編

木船西遺跡第IV調査区出土の弥生時代石器群について

[木船西遺跡IV区出土の石器]

木船西遺跡IV区で出土した石器は29点である。内訳は、石核1点、剥片7点、石鏃4点、楔形石器4点、削器4点、石皿2点、搔器1点、打製石包丁1点、石包丁素材1点、柱状片刃磨製石斧1点、両刃磨製石斧碎片1点、石錐1点、磨石1点となる。このうち、搔器1点と削器2点は石器器種と風化度から見て旧石器時代の石器と思われる。

これらの石器はE6・7・8調査区内の遺構SK11・SK12・SK26・SD27・SK29とそれらの直上に堆積する黒褐色炭化物層(土層図F7層)やその上層のにぶい黄褐色土層(土層図F6層)から出土している。6・7層は弥生時代の遺跡を何らかの理由で削平した後に堆積した層であり、それらの層から出土した石器は本来遺構に存在したものと考えられる。

遺構出土の石器は、ともに出土した土器が弥生時代中期初頭と後期中ごろの形式を示していることから、これらの石器の時期がおおよそ推察される。なお、木船西遺跡I～IV区およびその周辺において、縄文土器は表面採集を含めて確認されていない。

[石器の出土状況と製作時期]

SD27では9点とまとまった数の石器が出土しており、しかもそれらの使用時期や使用場所が特定できる良好な出土状況であった。

SD27は溝跡と考えられるが、その断面がV字形をしており、遺跡が削平される以前は、SD01とともに、弥生時代によく見られる集落を取り巻く環濠の一部と見ることもできる。出土した土器類は溝の底部から少し上の位置で検出され、隙間もないほど重なり合って堆積していた。これは土器類を一括して溝の底部に廃棄したとみることができる。石器類はその一括廃棄土器の中に含まれていたもので、集落で使用され、土器と一緒に廃棄されたとみることができる。土器類の形式は弥生時代後期中ごろであり、集落は溝の北側に広がる木船西遺跡I～III調査区(報告書既刊)の可能性が高く、木船西遺跡の中心部分にあたる。つまり、SD27出土の石器群は弥生後期中ごろに木船西遺跡内で確実に使用された石器と言える。

他の遺構も削平されているものの、後期中ごろの土器が中心であり、一部中期初頭の土器が混入している状況であった。ただ、石器も土器と同様に混入の可能性があり、石器だけを後期中ごろの製作・使用とするには無理がある。したがって、石器群は弥生時代中期から後期の年代幅で捉えておく必要がある。

[IV区石器群の観察から見える課題]

IV区石器群の観察から二つの課題が浮かび上がった。一つは弥生時代の石器の流通がどのように行われていたのかという課題である。というのもIV区石器群には西北九州から北部九州に原産地を推定できる石材を使用しているものが確認できるからだ。石器259は福岡県福岡市西区の今山産の玄武岩質安山岩の両刃磨製石斧碎片であり、石器298は福岡県北九州市産とされる層状岩の柱状片刃磨製石斧であろう。また、黒曜石とした各種剥片石器の原産地は佐賀県伊万里市腰岳をはじめとする西北九州産の特徴を備え、サヌカイトとした安山岩は明らかに佐賀県多久市鬼の鼻山産のものである。また、IV区での出土はなかったが、I区出土の石包丁には福岡県飯塚市立岩産とされる輝緑凝灰岩(赤紫色泥岩)の石包丁が確認されている。

今山産の両刃磨製石斧や層状岩製の片刃磨製石斧、それに輝緑凝灰岩製の石包丁などの磨製石器に

については先行研究が多々ある。それらの研究は石斧や石包丁の生産・流通・消費を焦点としたものであるが、それらのほとんどが石材の原産地近くに工房を構え、石斧や石包丁を製作する専門集団を想定しており、製作された製品の流通に生産地が所属する「国」の首長層の「差配」を捉えようとするものである(下條 1975a・1975b など多数)。

ところが、弥生時代の剥片石器についての研究はほとんどなく、遺跡における基本的な情報の提示もままならない状況にあると考えられる。近畿地方の弥生時代遺跡は前期から後期までサヌカイト製打製石鏃を中心とした剥片石器がまとまって発見され、特に中期から後期にかけての数量は目を見張るものがある。実は九州地方の弥生時代遺跡からもまとまった数量の剥片石器が検出される。しかも遺跡内で複数の器種の石器が製作されるため、剥片等の数量が多くなる。また、調査者の任意により設定された「遺構検出面」より上位の「包含層」と呼ばれる土層で出土した場合、二次資料として扱われることが多いようだ。

しかし、遺構出土の石器も数多くあり、分析対象として取り上げられる価値は十分に持っている。また、石材もほぼ西北九州産黒曜石や多久産サヌカイトに限定されるようであり、原産地と消費地の関係を捉えることも十分に可能であろう。このため、IV区石器群の母体ともいえるI・Ⅲ区の剥片石器群を検討し、それらの分類と数量確認により、石器群の持つ大まかな属性を抽出し、当時の剥片石器石材の流通の一端に触れる試みを行った。

二つ目の課題はSD27出土石鏃の使用目的である。2点の石鏃は凹基三角打製石鏃と有茎菱形打製石鏃である。解説でも述べたように、有茎菱形石鏃はおそらく鉄鏃を模倣したものであり、狩猟具というよりは武器としての使用が考えられる。また、伝統的形態の凹基三角打製石鏃はより大型となり、武器としての機能を意識しているようだ。このような鉄鏃の模倣や石鏃の大型化がSD27の一括廃棄土器の時期である弥生時代後期中ごろに見られることになる。打製石鏃の武器化という課題は広範囲に点在する遺跡での分析や統計処理が必要であり、今後の課題としておく。

[サヌカイト製の石核]

I・Ⅲ区の剥片石器群を検討するきっかけとなったのは、IV区SK12とSD27から出土したサヌカイト製の石核(257、169)である。サヌカイトは明らかに佐賀県多久市産のものである。これらの資料からは二つの事実が指摘できる。一つは、石核の存在から木船西遺跡内で剥片の生産が行われたことがわかること。二つ目の事実は257の石核がa面下半部に主要剥離面(腹面)を残していることから、石核の素材として大型剥片が使用されていたことである。また、このことに関連して、調査終了後に遺跡の掘削土集積地から採集された石核もその素材となった大型剥片の主要剥離面(腹面)が大きく残されたものだった。複数存在することの意味は大きい。

通常、剥片生産は原礫から剥片を順次剥ぎ取っていく過程を想像する。なぜ大型剥片を素材として用いたのであろうか。169は石核転用の削器だが石核の際の剥離面を数多く残している。しかし、それらから素材を想定することはできない。ただ、もし大型剥片を素材として用いていたとすれば、おそらく小さい拳大ほどの大きさであろう。257と採集品も169とほぼ同じ大きさであり、素材の際は小さな拳大の大きさになるようだ。大きさの上で流通上の制約があったのだろうか。石核素材の問題をきっかけとして、豊富な石器数を持つI・Ⅲ区剥片石器群の検討を行い、木船西遺跡の剥片石器群に伴う大まかな属性を抽出し、一つ目の課題の解決に迫ることにした。

[I・Ⅲ区剥片石器群の検討]

石器の内訳

I区とⅢ区の剥片石器群は報告書(中村 2017)掲載分を含めて合計1345点である。その内訳は別

表に示した。Ⅰ区は793点(包含層出土287、遺構出土506)、Ⅲ区は552点(包含層出土239、遺構出土313)、Ⅱ区からの出土はなかった。

今回の器種分類では、剥片の中で次の特徴を持つ剥片を分離した。両面とも主要剥離面からなるa「両面ボジ剥片」、黒曜石製の縦長剥片のうち平行する長側面を持つb「石刃状剥片」。また、方形をした剥片で相対する側面に連続する細かな剥離痕があり、縁辺が潰れた状態を示すc楔形石器を器種として加えた。

目的として、aは石核の素材になったと思われる大型剥片から剥片を剥ぎ取る際の初期段階の剥片であり、石核の素材として大型剥片が安定的に供給されているかを見るためである。bは縄文時代に黒曜石の原産地である腰岳中腹で量産され、北部九州を中心として縄文時代に流通した鈴桶型石刃技法(小畑2002)で生産された石刃が弥生時代の当遺跡にも搬入されているかを確認するためである。cは旧石器時代や縄文時代には定着している楔形石器が弥生時代にも使用されているかどうかを調べるためである。

石器群の出土地点

石器には包含層出土のものや遺構出土のものがあった。包含層は遺構検出面の上に堆積した層で、総石器数の約40%を占めていた。グリッド(10×10m)ごとの包含層出土石器数の粗密を調べたところ、それは遺構ごとの粗密とほぼ同じ傾向を示していた。つまり、包含層出土の石器は、本来、出土地に近い遺構内にあったものと見なすことができる。ただ、Ⅰ区S68周辺では包含層出土の石器は皆無であった。おそらく、北に向けて低くなる地形の影響を受けていることが考えられる。

石器の石材

当遺跡で剥片石器の素材となった石材は、サヌカイトと黒曜石に限定される。しかも、そのほとんどが佐賀県多久産のサヌカイトと佐賀県腰岳産の黒曜石である。Ⅰ区ではサヌカイト66%、黒曜石34%であり、Ⅲ区ではサヌカイト58%、黒曜石42%となっている。つまり、Ⅲ区では黒曜石とサヌカイトがほぼ併用されるが、Ⅰ区ではサヌカイトの多用が目立つ。

石器出土遺構の時期

石器をより多く出土した遺構と報告書掲載の土器形式から判断したその時期を示すと以下のようになる。

Ⅰ区：S68(134点 住居跡 中期前半)、S34(53点 住居跡 後期後半)、S12(27点 住居跡 後期後半)、S05(24点 住居跡 後期前半)、S62・84(18点 住居跡 後期後半)

Ⅲ区：S35(35点 土坑 中期前半)、S39(24点 土坑 中期前半)、S32・26(31点 土坑 中期前半)、S17(23点 住居跡 中期前半・後期後半)、S27(20点 住居跡 後期前半)、S29(19点 土坑 中期前半)、S38(19点 土坑 中期前半)、S45(19点 住居跡 後期前半)、S09(18点 住居跡 中期前半・後期前半)

これらのことから、Ⅰ区は、中期前半のS68(住居跡)に約17%の石器が集中するものの、中心となる後期後半の住居跡からも安定した数の石器が出土する。また、Ⅲ区は中期前半の土坑からの出土が多数を占めていることがわかる。

Ⅰ区とⅢ区の石器保有率

Ⅲ区出土の石器数はⅠ区の約2/3であるが、遺構数はⅠ区の1/4ほどである。このことはⅢ区の遺構の方がより多くの石器を保有していることになる。飛躍した論理とはなるが、弥生時代後期後半(Ⅰ区)より中期前半の方が石器に対する依存度が高かった可能性がある。

黒曜石原石

原石として分類した石材は黒曜石に限られ、サヌカイトの原石は皆無であった。また黒曜石の原石はⅢ区の2点を除けばすべて径1～2cm大の円礫である。円礫は阿蘇火砕流堆積物の中に含まれるものに酷似している。石核にこの円礫を用いたものは数点あるが、いずれも1回の打撃で半割の状態であり、石核としての役割は感じられない。ただ、阿蘇火砕流堆積物は当遺跡周辺の地下には堆積しておらず、当時、住居などの建築に際して地下から掘り出されたものでもなく、遺跡に持ち込まれたものであることは確かなようだ。

Ⅲ区S09・17から発見された2点の黒曜石原石は明らかに腰岳産の角礫である。小拳大の大きさであり、どのような経路をたどったかは別として、原産地から原石として確実に搬入されていたことになる。出土地点はいずれも中期前半と後期前半の遺構が重なり合った部分になっている。前に述べたようにⅢ区は中期前半の土坑からの石器出土が多数を占め、しかも黒曜石の占める比率が高い傾向にある。これらの黒曜石原石も中期前半の可能性が高い。

両面ボジ剥片

総数38点のうち、黒曜石製は1点で、他はすべてサヌカイト製であった。サヌカイト製石核は総数35点であり、剥片数が石核数を上回る。また、Ⅰ区で3点、Ⅲ区で3点の小拳大のサヌカイト製大型剥片が見つまっている。Ⅰ区ではC-3とE-4・5グリッドの包含層とS68から、Ⅲ区ではS06・21・32の土坑からで、両地区とも高い石器密集度を示している地点である。

これらのことから、中期から後期にかけて、サヌカイト製の大型剥片を石核の素材とする剥片生産体制は遺跡内の中心となっていたと思われる。

石刃状剥片

石刃状剥片を剥片から分離して分類した目的は、小畑弘己が技法の見直しと再定義を行った鈴桶型石刃技法(小畑2002aほか)で生産された石刃が弥生時代にも流通しているかを確認するためであった。

小畑やその研究を継承し、消費地遺跡における分析を行った神川めぐみ(神川2008)によれば、鈴桶型石刃技法は、黒曜石の原産地である佐賀県伊万里市腰岳の中腹(生産地)で端整で長身の石刃を大量に生産し、九州北部を中心とした消費地遺跡に流通させる際の石刃生産技法である。主に縄文時代後期から晩期にかけて盛行したとしている。そして、消費地遺跡内でその技法による石刃と判断するためには2つの要素が必要であるという。一つは石刃の打面にスリガラス状の擦痕が残されていること。もう一つは打面が石刃幅より小さく、丸みをおびていることである。

観察の結果、当遺跡では、鈴桶型石刃技法から生産される石刃は見当たらないことがわかった。ただ、自然面打面を持ち打面幅も石刃幅とほぼ同じで、2つの長側辺が平行した幅約1cmほどで、長さも鈴桶型石刃のように長くはない縦長剥片はまとめて検出された。これらを石刃状剥片とした。

石刃状剥片はⅠ区21点、Ⅲ区12点、合計33点出土している。いずれも黒曜石製である。Ⅰ区では石器があまり出土しない遺構やグリッドから発見される傾向にあり、Ⅲ区は石器が集中する土坑からの出土が多い。

33点のうち9点は、長側辺全体に微細な剥離痕が連続する使用痕が認められ、また、他の石刃状剥片の長側辺にも微細な剥離痕が部分的に認められる。これは、この石器が素材としての剥片ではなく、それ自身が一つの石器器種として機能していたと考えてもいいのではなからうか。

また、石刃状剥片の背面に残された剥離痕を観察すると、打面側からの連続した剥離痕が認められ、下方向からの剥離痕はなかった。つまり、一つの打面から連続して縦に長い剥片を剥ぎ取ったことになる。おそらく、打面は自然面のままであろう。このような剥片を剥ぎ取る技術は、鈴桶型石刃技法

のような厳密さはないものの、広義の石刃技法とすることができる。このことに関して、小南裕一は縄文時代晩期になると一方向からの剥離が増加し、石刃の長さも短くなるという(小南 2006)。あるいは晩期以降弥生時代までこのような石刃が継続して製作された可能性はあるだろう。

このような石刃状剥片を剥ぎ取ったと思われる石核を探したが、皆無であった。出土した石核からは主に正方形に近い剥片が剥ぎ取られていた。はたして、石刃状剥片は遺跡内で生産されたのだろうか。原産地で生産され、遺跡に剥片のかたちで持ち込まれた可能性も否定できない。

なお、1点のみではあるが、石刃状剥片の腹面に打面直下から末端部までスリガラス状の擦痕が続く資料が出土している。スリガラス状の擦痕を付けるという技術は保持されていたのかもしれない。

打製石鏃

報告書掲載分を含めて、Ⅰ区20点、Ⅲ区25点、合計45点出土している。サヌカイト製が約76%を占める。これらの打製石鏃には明らかな特徴が見られた。すなわち、中期前半の遺構からは、凹基三角石鏃や平基三角石鏃がほとんどであるが、後期の遺構からは、それらに有茎三角石鏃や有茎菱形石鏃が加わっている。また、後期の凹基三角石鏃や平基三角石鏃は長大化していることもわかった。Ⅳ区S27から出土した2点の打製石鏃はこの現象に当てはまる。

サヌカイトが圧倒的多数を占め、既存の石鏃が長大化し、有茎石鏃が新たに加わるという現象は当遺跡だけのことであり普遍化できないものなのだろうか。隣接する玉名市塚原遺跡(田中・古閑・江見 2017)では中期の遺構からも出土しており、詳細な分析が必要であろう。また、北部九州の他の遺跡でもそうなのか検討が必要である。

楔形石器

Ⅰ区9点、Ⅲ区7点、合計16点出土している。石材による数量の違いはない。この石器はよく打製石鏃の未成品と間違われる。しかしよくよく観察すると、相対する縁辺に連続する細かな剥離痕とともに縁辺の潰れが認められる。したがって、全体の形状は四角形であり、三角形ではない。当遺跡では、少ないながらも10点を超えており、器種として認定できる。

未成品

連続する剥離痕が剥片側辺の一部に見られるものである。通常は2次加工のある剥片とすべきであるが、形状、大きさ、厚みからみて、ほとんどが打製石鏃の未成品と考えてよい。

未成品は原石と石核、および剥片を除いた製品のうち64%を占める。打製石鏃は製品のうち21%を占めることから、打製石鏃とそれを意図した未成品を合わせた割合は85%と圧倒的に高いことがわかる。つまり、当遺跡では打製石鏃の生産を目的として石器製作を行ったといえる。なお、未成品における黒曜石とサヌカイトの比率はほぼ半々である。

[木船西遺跡Ⅰ・Ⅲ区剥片石器群の属性]

石器群の検討は、すべての石器の観察、器種分類とその数量把握、出土層・出土遺構ごとの数量把握、遺構年代の検討など基本的な検討だけではあったが、それらの結果をもとにした石器群の属性を提示する。もちろん、それは時間的制約のため、石器組成表の提示のみであり、統計処理や細かい分析、資料の図示はなく大まかで粗いものになったことはご容赦願いたい。

- ① 遺構から出土する石器数量の粗密は、遺構が所在するグリッドの包含層から出土する石器数量の粗密と同調している。つまり、包含層出土の石器は、包含層下の遺構に本来の位置があったと考えられる。
- ② 剥片石器に使用された石材は黒曜石とサヌカイトに限定される。黒曜石は佐賀県伊万里市腰岳産がほとんどであり、他の黒曜石も西北九州産と思われる。サヌカイトは佐賀県多久市鬼の鼻山産である。

- ③ 当遺跡への石材供給は黒曜石とサヌカイトで形態が異なっている。黒曜石は原石のままであり、サヌカイトは厚みのある大型剥片で供給されている。ただ、大きさは両石材とも拳大の大きさである。
- ④ 石核と剥片の観察から推定すると、黒曜石はほぼ方形、サヌカイトはやや横に長い剥片の量産を目的としている。
- ⑤ 未成品や剥片の形状から判断すれば、当遺跡の剥片石器生産は打製石鏃の生産を最大の目的としている。
- ⑥ 黒曜石製の剥片で、鈴桶型石刃技法による石刃は検出されなかった。ただ、広義の石刃技法によると思われる石刃(石刃状剥片)は、おそらく石材原産地周辺で作られており、剥片のまま搬入されている。
- ⑦ 打製石鏃は後期になり、長大化した凹基・平基三角石鏃が見られるようになり、有茎三角石鏃や有茎菱形石鏃などが新たに加わるといった変化が見られる。
- ⑧ 剥片石器を製作するための石材は、黒曜石とサヌカイトの併用からサヌカイト中心へ変化する。

[総括]

今回報告した木船西遺跡IV区は遺跡の南端部と考えられる。したがってIV区石器群は、その本体であるⅠ～Ⅲ区石器群と同様に中期前半の石器類と後期前半・後半の石器類とに分けられるだろう。先行研究を参考にすれば、大陸系磨製石器類はおそらく前期から中期を中心とした時期と考えてよいであろうから両刃磨製石斧片と柱状片刃磨製石斧は中期前半に位置づけられるだろう。そして、SD27出土の剥片石器類は出土状況からみて明らかに後期に属している。しかも打製石鏃はⅠ～Ⅲ区石器群の属性⑦に当てはまっている。

属性⑦は打製石鏃の武器化と考えられるが、属性⑤・⑧から判断すると鉄鏃とほぼ同等の威力を発揮するサヌカイトを用い、鉄鏃に匹敵する打製石鏃を大量に生産する時代状況が後期に発生していたことになろう。

サヌカイトは安山岩の中でも緻密で重く、また固くて耐久性も高い。鉄に代わる素材としては最良のものであろう。したがって、原産地からの石材搬出に際しては在地権力によるさまざまな規制がかかることは容易に想像できる。属性③のように小拳大の大型剥片にして搬出されているのは、商品性の向上のためなのだろうか。あるいは量的規制をかけやすくするためなのだろうか。

属性⑥の黒曜石製の石刃は出土点数も少なく多言は避けなければならないが、石刃を剥ぎ取った石核が存在しないことは原産地生産・剥片搬出の重要な根拠である。また、小南が指摘した石刃の形状は当遺跡例にも当てはまる。縄文晩期を経て弥生時代まで石刃生産が続いていたとすることも可能であろう。

熊本県菊池川流域では、中期前半の城ノ越式土器や中期後半の黒髪式土器とともに黒曜石製の石刃が発見される例が多いが、当遺跡例では後期に属する可能性もある。玉名地域でもこの時期の遺跡が多く、剥片石器類の分析が進めば、このような石刃の属性の解明が進むことになるだろう。

弥生時代の遺跡発掘で剥片石器類が出土した場合、真摯に向き合う調査員は少ないのではないだろうか。遺構内出土の石器類であっても、大陸系磨製石器類や完形の石鏃などは報告書に掲載されるが、石核・剥片類は観察の対象外にあるようだ。

鈴桶型石刃技法も当初は旧石器時代だけの技術とされた。そのため、縄文時代の集落遺跡の包含層や遺構から石刃が出土しても、それらを鈴桶型石刃技法と関連づけて分析することは長い間なかったと言える。しかし、縄文人が旧石器人のDNAを受け継いでいるのであれば、旧石器人が保持した技術が継承されるのはごく自然である。

弥生時代の剥片石器類についても同じことが言えるのではないかと。課題は剥片石器を使用する文化が、時代や地域によってどのように変容しているかを分析することであろう。それがとりもなおさず、稲作文化・大陸系磨製石器文化・青銅器文化・鉄器文化などがどのように受容されたかを知ることにつながるだろう。

近年、熊本市八ノ坪遺跡（林田・宮崎 2005・2006）では、黒曜石やサヌカイトを用いた多くの製品・未成品が出土した住居跡（SI077・085）やサヌカイト製剥片石器類の一括資料が詰まった小穴（SP340）が発見されている。弥生時代前期から中期中心の遺跡であり剥片石器類が遺構に伴っているのは明らかである。今後、弥生時代の剥片石器類の分析が進むことを期待したい。

参考文献

- 下條信行 1975a 「石器の製作と技術」『稲作の始まり』（古代史発掘 4）講談社
- 下條信行 1975b 「北九州における弥生時代の石器生産」『考古学研究』第 22 巻 第 1 号 考古学研究会
- 小畑弘己 2002a 「縄文時代の石刃一鈴桶型石刃技法について」『青丘學術論集』20 韓国文化研究振興財団
- 小畑弘己 2002b 「鈴桶遺跡と鈴桶技法について」『Stone Sources』1 石器原産地研究会
- 小畑弘己 2003 「九州腰岳原産地と鈴桶遺跡を巡る諸問題」『黒曜石文化研究』2 明治大学人文科学研究所
- 小南裕一 2006 「鈴桶技法の終焉 - 九州北半地域を中心として -」『陶填』19 山口県埋蔵文化財センター
- 林田和人 2005 「IV 調査の成果 2D11A 小区 C 検出遺構と出土遺物 SP340」
『八ノ坪遺跡 I - 本文編 -』熊本市教育委員会
- 宮崎 拓 2006 「VI 考察 4 石器組成」『八ノ坪遺跡 I - 分析・考察・図版編 -』熊本市教育委員会
- 神川めぐみ 2008 「九州の縄文時代後晩期における石刃流通 - 鈴桶型石刃技法について -」
『熊本大学社会文化研究』6 熊本大学
- 田中康雄・古閑敬士・江見恵留 2017 「第三章 調査成果 第 4 節 弥生時代の遺構遺物」
『塚原遺跡 I』玉名市教育委員会
- 中村安宏（編）2017 『木船西遺跡』玉名市教育委員会

木船西遺跡Ⅳ区土器観察表

探検 番号	遺物 番号	出土地点		種別	器種	位置			器面調整		色調		胎土	焼成	備考	
		グッド	通標番号			口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	外面	内面				
																外面
11	1	C5	SD01	弥生土器	甕	-	-	30+	ナデ	ナデ	褐色色 10YR5/1	にぶい黄褐色 10YR7/4	1cm以下の石莖、長石、 角閃石を含む	良好		
11	2	C5	SD01	弥生土器	甕	-	-	2.8+	ナデ	ナデ	にぶい褐色 10YR6/4	にぶい褐色 10YR6/4	3cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好		
11	3	C5	SD01	弥生土器	甕	-	-	2.1+	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/3	にぶい黄褐色 10YR6/4	1cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好		
11	4	C5	SD01	弥生土器	甕	-	-	4.1+	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/3	明黄褐色 10YR7/3	1cm以下の石莖、長石、 角閃石を含む	良好		
11	5	C5	SD01	弥生土器	甕	-	-	4.0+	ナデ	ナデ	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR7/6	2cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好		
11	6	C5	SD01	弥生土器	壺	-	-	2.3+	ナデ	ナデ	淡黄褐色 10YR6/4	淡黄褐色 10YR6/4	1cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好		
11	7	C5	SD01	弥生土器	高杯	-	-	2.0+	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	3cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好		
11	8	C5	SD01	弥生土器	鉢	-	-	1.9+	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	2cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好		
11	9	C5	SD01	弥生土器	鉢	-	-	7.0	4.9+	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	4cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好	
11	10	C5	SD01	弥生土器	鉢	-	-	2.4+	-	-	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR7/6	3cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好		
11	11	C5	SD01	弥生土器	甕	-	-	9.0	4.8+	-	-	にぶい黄褐色 10YR7/4	褐色7.5YR7/6	4cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好	
11	12	C5	SD01	弥生土器	甕	-	-	10.4	6.9+	-	ナデ	明黄褐色 10YR7/6	にぶい黄褐色 10YR7/4	6cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好	
11	13	C5	SD01	弥生土器	甕	-	-	16.8+	ハケメ	ハケメ	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	4cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好	胴部最大径16.0cm	
11	14	D6	SK08	弥生土器	甕	-	-	5.0+	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	明赤褐色 5YR5/6	明赤褐色 5YR5/6	2cm以下の石莖、長石、 角閃石を含む	良好	黒型式	
11	15	D6	SK08	弥生土器	甕	-	-	4.9+	ナデ	ナデ	赤褐色 5YR4/6	赤褐色5YR4/6	4cm以下の石莖、長石を 含む	良好	黒型式	
11	16	D6	SK08	弥生土器	甕	-	-	2.0+	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	3cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好	黒型式	
11	17	D6	SK08	弥生土器	甕	-	-	5.1+	-	ナデ	淡黄褐色 5YR6/4	淡黄褐色 5YR6/4	4cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好		
11	18	D6	SK08	弥生土器	甕	-	-	2.7+	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/2	にぶい黄褐色 10YR7/3	3cm以下の石莖、長石、 赤褐色粒を含む	良好	城/越式	
11	19	D6	SK08	弥生土器	甕	-	-	1.1+	ナデ	ナデ	淡黄褐色 10YR6/3	淡黄褐色 10YR6/3	2cm以下の石莖、長石、 赤褐色粒を含む	良好	城/越式	
11	20	D6	SK08	弥生土器	甕	-	-	8.2	5.7+	ナデ	ナデ	褐色 7.5YR7/6	にぶい黄褐色 10YR7/3	3cm以下の石莖、長石、 霏細石を含む	良好	城/越式
11	21	D6	SK08	弥生土器	甕	-	-	6.0	9.4+	ヨコナデ、ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/2	黄褐色 10YR6/6	3cm以下の石莖、長石、 角閃石を含む	良好	黒型式
11	22	D6	SK08	弥生土器	甕	-	-	9.8	16.9+	-	-	淡黄褐色 10YR6/3	にぶい褐色 2.5YR6/4	5cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好	
11	23	D6	SK08	弥生土器	壺	-	-	5.7+	ヘラミガキ文様	ナデ	明褐色 7.5YR5/6	にぶい褐色 7.5YR6/4	4cm以下の石莖、霏細石を 含む	良好		
11	24	D6	SK08	弥生土器	高杯	-	-	3.4+	ヨコナデ、 ナデ、突帯	ナデ	褐色 7.5YR7/6	にぶい褐色 7.5YR7/4	2cm以下の石莖、長石、 霏細石を含む	良好	黒型式	
11	25	D6	SK08	弥生土器	長頸壺	-	-	4.2+	-	-	淡黄褐色 10YR6/3	淡黄褐色 10YR6/3	3cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好		
11	27	D6	SK08	弥生土器	壺	-	-	5.0+	ナデ、突帯	ナデ	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR7/6	3cm以下の石莖、長石、 角閃石を含む	良好		
11	28	D6	SK08	弥生土器	壺	-	-	4.0+	-	ナデ	淡黄褐色 10YR6/4	褐色 10YR6/1	4cm以下の石莖、長石、 角閃石を含む	良好		
11	29	E7	SK11	弥生土器	甕	-	-	0.9+	ナデ	ナデ	淡黄褐色 10YR6/3	淡黄褐色 10YR6/3	2cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好	城/越式	
11	30	E7	SK11	弥生土器	甕	-	-	2.2+	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	2cm以下の石莖、長石を 含む	良好	城/越式	
11	31	E6-E7	SK11	弥生土器	甕	-	-	10.0	6.9+	ヨコナデ、ナデ	ナデ	淡黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR7/3	2cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石、赤褐色粒 を含む	良好	
11	32	E6-E7	SK11	弥生土器	甕	-	-	6.8	4.3+	-	-	褐色5YR6/6	淡黄褐色 10YR6/3	3cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好	城/越式
11	33	E7	SK11	弥生土器	甕	-	-	9.4	5.4+	ヨコナデ、ナデツ ケ	ヨコナデ、ナデ	褐色 5YR6/6	褐色7.5YR7/6	2cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好	
11	34	E6	SK11	弥生土器	甕	-	-	10.3+	ナデ、ハケメ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/3	明黄褐色 10YR6/6	3cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好	外側部口縁部下に 又文付着	
11	35	E7	SK11	弥生土器	壺	-	-	3.6+	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	淡黄褐色 10YR6/3	淡黄褐色 10YR6/3	3cm以下の石莖、長石、 角閃石、霏細石を含む	良好		
11	36	E7	SK11	弥生土器	壺	-	-	6.4+	ナデ、突帯	-	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい褐色 7.5YR7/4	5cm以下の石莖、長石を 含む	良好		
11	37	E6-E7	SK11	弥生土器	壺	-	-	5.4+	ナデ、二重突帯	ナデ	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR7/6	2cm以下の石莖、長石、 角閃石を含む	良好		
11	38	E7	SK11	弥生土器	鉢	-	-	4.0+	ナデ	ナデ	灰白色 7.5Y6/2	にぶい褐色 7.5YR7/3	2cm以下の石莖、長石、 角閃石を含む	良好		

標図 番号	建物 番号	出土地点		種別	群種	法量		基礎形状		色調		胎土	造成	備考	
		グリッド	道幅番号			口幅 (cm)	奥行 (cm)	外面	内面	外面	内面				
15	39	E6-E7	SK11	養生土壁	壁	-	3.9*	-	-	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 5YR6/4	4mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好		
16	40	E7	SK11	養生土壁	壁	-	2.9*	-	-	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	3mm以下の石英、長石、 角閃石、重晶石を含む	良好		
15	41	E6	SK11	養生土壁	壁	-	4.5*	ナデ、副目突帯	ナデ	灰褐色 7.5YR4/1	褐色7.5YR7/6	3mm以下の石英、長石、 重晶石を含む	良好		
15	42	E6	SK11	ミニチュア 土壁	壁	1.8	1.7	4.6	指頭圧痕、ナデ	指頭圧痕か	淡黄褐色 10YR8/3	淡黄褐色 10YR8/2	2mm以下の石英、白色砂 石を含む	良好	重さ46g、底面に厚 1mm
19	46	E8	SK26	養生土壁	壁	-	1.7*	ナデ	ナデ	褐色 7.5YR6/6	褐色7.5YR7/6	2mm以下の石英、長石、 重晶石を含む	良好	黒髪式	
19	47	E8	SK26	養生土壁	壁	-	1.5*	ナデ	ナデ	淡黄褐色 10YR8/4	淡黄褐色 10YR8/4	3mm以下の石英、長石、 角閃石、重晶石を含む	良好	城/越式	
19	48	E8	SK26	養生土壁	壁	-	2.0*	ナデ	ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/3	褐色2.5YR7/6	1mm以下の石英、長石を 含む	良好	城/越式	
19	49	E8	SK26	養生土壁	壁	-	3.2*	ナデ	ナデ	淡黄褐色 7.5YR7/6	7.5YR8/3	2mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	城/越式	
19	50	E8	SK26	養生土壁	副付 鉢?	-	5.2*	ナデ	ナデ	褐色 2.5YR7/6	灰褐色 7.5YR6/2	2mm以下の石英、長石を 含む	良好	城/越式	
19	51	E8	SK26	養生土壁	高坪	-	1.2*	ナデ	ナデ	淡黄褐色 7.5YR6/4	淡黄褐色 7.5YR8/4	3mm以下の石英、長石を 含む	良好		
19	52	E7	SK26	養生土壁	壁	-	3.1*	ナデ	ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/4	褐色5YR7/6	2mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好		
19	53	E8	SK26	養生土壁	壁	-	2.9*	ナデ	ナデ	褐色5YR7/6	淡黄褐色 7.5YR8/3	3mm以下の石英、長石を 含む	良好		
19	54	E8	SK26	養生土壁	壁	-	2.2*	ナデ	ナデ	淡黄褐色 7.5YR7/4	褐色7.5YR7/6	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好		
19	55	E8	SK26	養生土壁	壁	-	2.9*	ナデ	ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/4	淡黄褐色 7.5YR8/4	3mm以下の石英、長石を 含む	良好		
19	56	E8	SK26	養生土壁	壁	-	5.6*	ヨコナデ	-	褐色5YR6/6	にぶい褐色 7.5YR7/3	5mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好		
19	57	E8	SK26	養生土壁	壁	-	3.8*	ナデ	ナデ	淡黄褐色 7.5YR6/4	淡黄褐色 7.5YR8/3	3mm以下の石英、長石を 含む	良好		
19	58	E8	SK26	養生土壁	壁	-	3.1*	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR6/6	5mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好		
19	59	E8	SK26	養生土壁	壁	-	3.6*	ナデ、突帯	ナデ	にぶい黄褐 色10YR5/4	10YR5/2	4mm以下の石英、長石、 角閃石、重晶石を含む	良好		
19	60	E8	SK26	養生土壁	高坪	-	2.3*	ナデ	ナデ	褐色 2.5YR7/6	淡赤褐色 2.5YR7/6	3mm以下の石英、長石を 含む	良好		
19	61	E8	SK26	養生土壁	壁	-	2.3*	ナデ	ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/6	褐色5YR7/6	2mm以下の石英、長石を 含む	良好		
19	62	E7	SK26	養生土壁	壁	-	9.0	4.9*	ナデ	ナデ	淡黄褐色 10YR8/3	淡黄褐色 10YR8/3	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	サマサイト小片あり
19	63	E8	SK26	養生土壁	壁	-	3.7*	ナデ	ナデ、沈積	淡黄褐色 10YR8/2	にぶい黄褐色 10YR8/3	2mm以下の石英、長石、 角閃石、重晶石を含む	良好	城/越式	
19	64	E8	SK26	養生土壁	壁	-	4.8*	ナデ、突帯	ナデ	淡黄褐色 10YR8/2	にぶい黄褐色 10YR4/3	6mm以下の石英、長石、 角閃石、重晶石を含む	良好		
19	65	E7	SK26	養生土壁	壁	-	7.9	3.8*	ナデ	ナデ	褐色 7.5YR6/6	褐色7.5YR7/6	2mm以下の石英、長石を 含む	良好	
19	66	E8	SK26	養生土壁	壁	-	6.2	5.4*	ナデ、指頭圧痕	工具痕、ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/4	褐色5YR7/6	2mm以下の石英、長石を 含む	良好	
19	67	E8	SK26	養生土壁	副付鉢	-	7.7*	ナデ	-	褐色 7.5YR6/6	にぶい褐色 7.5YR7/4	5mm以下の石英、長石を 含む	良好		
19	68	E7	SK26	養生土壁	壁	-	9.5	8.5*	-	ナデ	淡黄褐色 10YR8/3	淡黄褐色 7.5YR8/4	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	黒曜石小片多く含 む
19	69	E7	SK26	養生土壁	壁	-	10.0	8.2*	ナデ	-	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR7/6	5mm以下の石英、長石を 含む	良好	圧痕あり
21	71	E8	SD27	養生土壁	壁	17.2	-	4.7*	ヨコナデ、ナデ	ナデ、ヨコナデ	淡黄褐色 7.5YR6/4	明赤褐色 5YR6/6	2mm以下の石英、長石、 角閃石、重晶石を含む	良好	
21	72	E8	SD27	養生土壁	壁	15.4	-	5.4*	ハケメ	-	淡黄褐色 10YR8/3	淡黄褐色 7.5YR8/6	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	不良	
21	73	E8	SD27	養生土壁	壁	14.2	-	6.8*	ナデ、ハケメ	ハケメ	褐色 7.5YR6/6	褐色7.5YR6/6	3mm以下の石英、長石を 含む	良好	
34	74	E8	SD27	養生土壁	壁	18.0	-	4.5*	ヨコナデ、 ハケメのちナデ	ヨコナデ、 淡黄褐色 10YR8/3	淡黄褐色 10YR8/3	2mm以下の石英、長石を 含む	良好		
21	75	E8	SD27	養生土壁	壁	-	5.5*	ナデ	ナデ	にぶい黄褐 色10YR7/4	7.5YR7/4	5mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	黒髪	
21	76	E8	SD27	養生土壁	壁	20.4	-	7.7*	ヨコナデ、ハケメ	ハケメのちナデ、 ハケメ	褐色5YR6/6	褐色5YR6/6	3mm以下の石英、長石を 含む	良好	
21	77	E8	SD27	養生土壁	壁	20.0	-	6.0*	-	-	淡黄褐色 7.5YR6/4	淡黄褐色 7.5YR8/6	3mm以下の石英、長石、 角閃石、重晶石を含む	普通	外面一部に黒曜、 口縁凹取り
21	78	E8	SD27	養生土壁	壁	21.8	-	11*	ナデ、ヨコハケ メ、ナメハケメ	ナメハケメ	褐色5YR6/6	にぶい褐色 5YR6/4	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	やや不良	黒部最大径2020 外面二黒曜
21	79	E8	SD27	養生土壁	壁	-	23.2*	ナデ、ヨコハケ メ、ナメハケメ、 ケツリ	ハケメ	褐色 2.5YR7/6	褐色 10YR5/1	6mm以下の石英、長石を 含む	良好	黒部最大径1760 黒髪あり	
21	80	E8	SD27	養生土壁	壁	25.0	-	22.1*	ヨコナデ、 タケチのちハケメ	ヨコナデ、 ハケメのちナデ	褐色 7.5YR4/6	にぶい赤褐色 10YR7/3	4mm以下の石英、長石を 含む	良好	外面一部に黒曜あり
22	81	E8	SD27	養生土壁	壁	19.0	-	11.0*	-	-	褐色5YR4/1	褐色5YR4/1	5mm以下の石英、長石を 含む	良好	
22	82	E8	SD27	養生土壁	壁	21.5	-	9.3*	-	指圧痕	淡黄褐色 7.5YR6/4	淡黄褐色 7.5YR6/4	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	やや不良	口縁凹取り
22	83	E8	SD27	養生土壁	壁	15.8	-	16.8*	ナデ、ハケメ	ハケメのちナデ	褐色5YR6/6	褐色5YR6/6	3mm以下の石英、長石を 含む	良好	黒髪あり

簿記番号	遺物番号	出土地点		種別	群集	法量		断面形状		色調		胎土	焼成	備考
		グリッド	遺構番号			口径 (cm)	総高 (cm)	外面	内面	外面	内面			
23	84	E8	SD27	弥生土器	甕	-	6.6 5.1+	ナデ	-	褐色5YR6/8 灰白色 7.5YR8/1	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	やや不良	一部に黒斑あり硝 子越し?	
23	85	E8	SD27	弥生土器	甕	-	7.0 7.3+	-	-	明黄褐色 10YR7/6 灰白色 10YR8/2	3mm以下の石英、長石を 含む 4mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	硝子越し 塵付跡に 穿孔、一部に黒斑	
23	86	E8	SD27	弥生土器	甕	-	8.4 5.8+	ハクメのちナデ	ナデ	淡黄褐色 10YR8/2 褐色 2.5YR7/6	4mm以下の石英、長石、 角閃石を含む 4mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好		
23	87	E8	SD27	弥生土器	甕	-	7.4 4.7+	ナデ	ナデ	明赤褐色 5YR5/6 10YR7/3	3mm以下の石英、長石を 含む	良好		
23	88	E8	SD27	弥生土器	甕	-	7.4 7.8+	ナデ	ナデ、ケズリ	にぶい黄褐色 5YR5/6 7.5YR8/4	3mm以下の石英、長石、 雲母を含む	やや不良		
23	89	E8	SD27	弥生土器	甕	-	11.2 5.4+	-	胎台内部:一部 にココハクメ残存	褐色5YR7/8 褐色5YR8/4	3mm以下の石英、長石、 雲母を含む	やや不良		
23	90	E8	SD27	弥生土器	甕	-	12.4 5.3+	ナデ	内底:少タキ? 胎内:ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/4	3mm以下の石英、長石、 角閃石、雲母を含む	やや不良		
23	91	E8	SD27	弥生土器	甕	-	10.7 4.8+	-	工具痕	褐色 7.5YR7/6	5mm以下の石英、長石を 含む	良好		
23	92	E8	SD27	弥生土器	甕	-	9.6 4.2+	-	ハクメ、ナデ、 しぼり	褐色 7.5YR8/6、 胎内: 淡黄褐色 7.5YR8/4	2mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	普通		
23	93	E8	SD27	弥生土器	甕	-	10.0 6.2+	-	-	淡黄褐色 7.5YR8/6	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	普通		
23	94	E8	SD27	弥生土器	甕	-	10.2 5.3+	ナデ	ナデ、 胎内:ナデ	にぶい褐色 5YR7/4、 胎内: 淡黄褐色 7.5YR8/6	5mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	普通	胎と底部の接合部 にスサカイト剥片 (4mm)	
23	95	E8	SD27	弥生土器	甕	-	11.4 5.8+	ナデ	ナデ	淡黄褐色 7.5YR8/4	2mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	やや不良	胎縁玉縁、内外に 黒斑あり	
23	96	E8	SD27	弥生土器	甕	-	10.4 6.0+	ハクメ、 ナデ	胎内:ナデ	淡黄褐色 10YR8/3 胎内: 淡黄褐色 10YR8/3	2mm以下の石英、長石、 角閃石、雲母を含む	普通		
23	97	E8	SD27	弥生土器	甕	-	12.1 7.8+	-	-	褐色5YR6/8 暗褐色 7.5YR3/2	3mm以下の石英、長石、 角閃石、雲母を含む	やや不良	内面に黒斑、胎縁 黒斑あり	
23	98	E8	SD27	弥生土器	甕	-	11.1 9.5+	ヨコナデ	胎内:ヨコナデ	褐色 7.5YR4/3、 胎内: にぶい褐色 7.5YR6/4	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	やや不良	内底部に圧痕あり	
23	99	E8	SD27	弥生土器	甕	-	8.0 5.5+	タテハクメ	底部に指痕圧痕	淡褐色 5YR8/2	2mm以下の石英、長石、 角閃石を含む湿和物多く、 胎土砂質	普通	胎縁面取り、胎生 後期前半	
23	100	E8	SD27	弥生土器	甕	-	12.0 6.0+	-	胎台内部: ヨコハクメ	淡黄褐色 7.5YR8/6	1mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	やや不良	胎台は横内縁で径 は長軸	
23	101	E8	SD27	弥生土器	甕	-	12.2 6.0+	-	ハクメ、 胎内:ナデ、 ハクメ	淡黄褐色 7.5YR8/3 胎内: 淡黄褐色 7.5YR8/4	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	普通	一部に黒斑あり	
24	102	E8	SD27	弥生土器	甕	-	10.2 7.1+	ナデ、圧痕	胎内:指圧痕、 ヨコナデ	褐色5YR7/8 にぶい褐色 7.5YR6/3	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	やや不良		
24	103	E8	SD27	弥生土器	甕	-	12.2 7.8+	一部に ヨコハクメ	内部:ハクメ、 胎内:ヨコナデ、 ハクメ	淡黄褐色 7.5YR8/4	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	普通		
24	104	E8	SD27	弥生土器	甕	-	9.8 9.0+	ナデ	胎内:ナデ、 ヨコハクメ	灰白色 7.5YR8/2	4mm以下の石英、長石、 角閃石、黒雲母を含む	やや不良		
24	105	E8	SD27	弥生土器	甕	-	9.8 6.8+	ナデ	ナデ、ハクメ	褐色 2.5YR8/8	4mm以下の石英、長石を 含む	良好		
24	106	E8	SD27	弥生土器	甕	-	10.5 7.5+	ヨコナデ、 ナデ	胎内:ヨコナデ	淡黄褐色 7.5YR8/4 淡黄褐色 7.5YR8/4	3mm以下の石英、長石、 角閃石、雲母を含む	普通	一部に黒斑あり胎 の縁部黒斑	
24	107	E8	SD27	弥生土器	甕	-	11.0 4.3+	-	ヨコナデ、ハクメ	灰白色 7.5YR8/2	2mm以下の石英、長石、 角閃石、黒雲母を含む	やや不良		

標高 地点 番号	出土地点		種別	形状	法量			断面形状		色相		粘土	構成	備考
	グリッド	遺構番号			口幅 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	外面	内面	外面	内面			
24 108	EB	SD27	粘土土層	壘	-	12.3	4.9+	-	断面: ヨコナデ	灰白色 10YR8/2	褐色7.5YR7/6 断面: 灰白色 7.5YR8/3	2mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	やや不良	断面採取
24 109	EB	SD27	粘土土層	壘	-	12.6	6.2+	-	断面: ヨコナデ	褐色 7.5YR7/6	灰白色 7.5YR8/2 断面: 褐色5YR7/8	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	やや不良	
24 110	EB	SD27	粘土土層	壘	-	10.6	6.1+	ナデ	ナデ、 断面: ヨコナデ	にぶい褐色 7.5YR7/3	淡黄褐色 7.5YR8/4 断面: 淡黄褐色 7.5YR8/4	2mm以下の石英、長石、 角閃石、雲母を含む	やや不良	断面採取
24 111	EB	SD27	粘土土層	壘	-	8.8	6.8+	-	-	補灰色 10YR4/1	補灰色 10YR4/1	5mm以下の石英、長石を 含む	良好	
24 112	EB	SD27	粘土土層	壘	-	9.8	8.0+	-	内底: 工具痕、 指頭圧痕、 断面: ナデツツケ、 ヨコナデ	褐色5YR6/6 断面: 淡黄褐色 7.5YR8/4	5mm以下の石英、長石、 角閃石、雲母を含む	やや不良		
24 113	EB	SD27	粘土土層	壘	-	7.8	7.0+	ナデ	ナデ、ハクメ	褐色5YR6/6	褐色5YR6/6	3mm以下の石英、長石、 角閃石、雲母を含む	良好	外周一部に黒曜、 断面採取
24 114	EB	SD27	粘土土層	壘	-	12.1	13.6	ハクメのちナデ、 ナデ	ハクメのちナデ、 ナデ	明赤褐色 5YR5/6 断面: 褐色10YR5/1	補灰色 10YR5/1	3mm以下の石英、長石を 含む	良好	
24 115	EB	SD27	粘土土層	壘	-	9.0	9.0+	-	-	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR7/6	4mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	
24 116	EB	SD27	粘土土層	壘	-	10.9	11.5+	ハクメのちナデ	ハクメのち ナデ、ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/3	にぶい褐色 7.5YR8/4	5mm以下の石英、長石を 含む	良好	黒曜あり
24 117	EB	SD27	粘土土層	壘	-	12.2	15.5+	ヨコナデ、 ナデ	-	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	5mm以下の石英、長石を 含む	良好	断面採取一部は 黒曜?
25 118	EB	SD27	粘土土層	壘	15.6	-	4.3+	-	指頭圧痕	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR7/6	5mm以下の石英、長石を 含む	良好	
25 119	EB	SD27	粘土土層	壘	11.6	-	7.2+	タテハクメ	ヨコハクメ	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR7/6	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	普通	
25 120	EB	SD27	粘土土層	壘	15.0	-	5.1+	ナデ	ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい褐色 7.5YR7/4	5mm以下の石英、長石を 含む	良好	口縁面取り
25 121	EB	SD27	粘土土層	壘	15.0	-	5.3+	ヨコナデ、 ハクメのちナデ	ヨコナデ、 ハクメのちナデ	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR7/6	4mm以下の石英、長石、 雲母を含む	良好	
25 122	EB	SD27	粘土土層	壘	11.2	-	6.4+	ナデ、 ハクメのちナデ	ナデ、 ヨコナデ	にぶい褐色 7.5YR8/4	褐色7.5YR7/6	5mm以下の石英、長石を 含む	良好	一部に黒曜あり
25 123	EB	SD27	粘土土層	壘	16.0	-	7.3+	-	-	褐色 7.5YR6/6	褐色7.5YR6/6	4mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	
25 124	EB	SD27	粘土土層	壘	-	4.6	-	ナデ、実帯、 刺突文、ハクメ 口縁部、ハク メのちナデ、刺突 文	ナデ、ハクメ、 指頭圧痕	にぶい黄褐色 7.5YR7/4	10YR7/3	5mm以下の石英、長石を 含む	良好	
25 125	EB	SD27	粘土土層	壘	21.9	-	15.8+	ハクメのちナデ、 刺突文	ハクメのちナデ	にぶい褐色 7.5YR7/4	褐色7.5YR7/4	5mm以下の石英、長石を 含む	良好	
25 126	EB	SD27	粘土土層	長縄壘	-	6.4+	-	ナデ	-	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR7/4	4mm以下の石英、長石を 含む	良好	断面最小径9.0cm
25 127	EB	SD27	粘土土層	長縄壘	-	10.0+	-	-	-	褐色 7.5YR7/6	黄灰色 2.5YR7/1	3mm以下の石英、長石を 含む	良好	
25 128	EB	SD27	粘土土層	長縄壘	-	14.3+	-	ナデ、ミガキ	ナデ	褐色5YR6/6	褐色5YR6/6	1mm以下の、石英、長 石、赤褐色粒を含む	良好	断面最大径13.4 cm、一部に黒曜
26 129	EB	SD27	粘土土層	壘	-	7.6	6.2+	-	ハクメ、指圧痕	にぶい褐色 7.5YR7/4	褐色5YR7/6	5mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	やや不良	底部黒曜、内周一 部に黒曜
26 130	EB	SD27	粘土土層	壘	-	7.4	9.9+	-	-	にぶい黄褐色 10YR8/4	10YR8/4	7mm以下の石英、長石を 含む	良好	一部に黒曜
26 131	EB	SD27	粘土土層	壘	-	7.2	5.8+	ナデ、ハクメのち ナデ	ハクメ	淡黄褐色 10YR8/3	10YR8/1	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	
26 132	EB	SD27	粘土土層	壘	-	9.2+	ケズリ	ナデ、指圧痕	ナデ	にぶい黄褐色 5YR8/4	にぶい褐色 7.5YR7/4	2mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	
26 133	EB	SD27	粘土土層	壘	-	6.8	2.8+	ナデ	ハクメ	黒曜	淡黄褐色 10YR8/4	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	不良	
26 134	EB	SD27	粘土土層	壘	-	5.3+	-	-	内底: 指頭圧痕	淡黄褐色 7.5YR8/4	淡黄褐色 7.5YR8/4	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	やや不良	底部やや丸座
26 135	EB	SD27	粘土土層	壘	-	9.0	10.5+	ハクメのちナデ	ハクメのちナデ	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR7/6	5mm以下の石英、長石を 含む	良好	一部に黒曜
26 136	EB	SD27	粘土土層	壘	-	11.9+	ハクメのちナデ	ハクメ	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR7/6	4mm以下の石英、長石を 含む	良好		
26 137	EB	SD27	粘土土層	壘	-	5.2	14.4+	ハクメ、ナデ	ハクメ、ナデ	褐色5YR6/6	にぶい褐色 7.5YR7/4	3mm以下の石英、長石を 含む	良好	
27 138	EB	SD27	粘土土層	鉢	14.0	-	5.7+	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR8/4	灰黄褐色 10YR8/2	4mm以下の石英、長石を 含む	良好	
27 139	EB	SD27	粘土土層	鉢	16.0	-	7.2+	ナデ	ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/4	褐色7.5YR7/6	3mm以下の石英、長石を 含む	良好	
27 140	EB	SD27	粘土土層	鉢	14.4	-	5.9+	ナデ、ケズリ	ヨコナデ	褐色5YR7/6 断面: 淡黄褐色 7.5YR8/4	褐色5YR6/6 断面: 淡黄褐色 7.5YR8/4	4mm以下の石英、長石、 角閃石、雲母を含む	良好	
27 141	EB	SD27	粘土土層	鉢	17.0	-	7.6+	ヨコナデ	ヨコナデ、 ハクメのちナデ	にぶい褐色 5YR7/4	褐色7.5YR7/6	4mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	
27 142	EB	SD27	粘土土層	壘	-	12.2	13.7+	ハクメのち ナデ、ナデ	ハクメのちナデ	淡黄褐色 10YR8/4	淡黄褐色 10YR8/4	3mm以下の石英、長石を 含む	良好	
27 143	EB	SD27	粘土土層	高坪	31.4	-	4.1+	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR7/6	4mm以下の石英、長石を 含む	良好	外周一部に黒曜あり

標記番号	遺物番号	出土地点		種別	葬種	法量		葬法調整		色調		跡土	焼成	備考
		グリッド	遺構番号			口径 (cm)	埋没 (cm)	外面	内面	外面	内面			
27	144	E8	S027	赤生土層	高杯	30.0	- 2.9*	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	灰黄色 2.5Y7/6	灰白色 7.5YR8/2	3mm以下の石英、長石、角閃石を含む	やや不良	
27	145	E8	S027	赤生土層	高杯	30.0	- 3.1*	-	ヨコナデ、タナナデ	褐色 7.5YR7/8	灰白色 7.5YR8/2	3mm以下の石英、長石、角閃石を含む	普通	
27	146	E8	S027	赤生土層	高杯	29.0	- 3.8*	ナデ	ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい褐色 7.5YR7/4	3mm以下の石英、長石を含む	良好	
27	147	E8	S027	赤生土層	高杯	29.8	- 2.9*	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	褐色5YR7/6	にぶい褐色 5YR8/4	1.5mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む	良好	
27	148	E8	S027	赤生土層	高杯	-	- 8.3*	-	脚内部、しぼり	赤褐色 10YR6/8	褐色5YR7/6	3mm以下の石英、長石、角閃石を含む	やや不良	脚部外部に黒曜あり
27	149	E8	S027	赤生土層	高杯	-	- 13.6 8.5*	ナデ	ハケメのもナデ、しぼり	褐色 2.5YR6/6	褐色2.5YR6/6	4mm以下の石英、長石を含む	良好	
27	150	E8	S027	赤生土層	高杯	-	- 14.2*	ナデ	しぼり	淡黄褐色 7.5YR8/6	黄褐色 7.5YR7/8	4mm以下の石英、長石を含む	良好	焼成前穿孔1カ所
27	151	E7,E8	S027	赤生土層	高杯	-	- 17.0 17.2*	ナデ	ナデ、工具痕	淡黄褐色 10YR8/4	淡黄褐色 10YR8/4	3mm以下の石英、長石、角閃石を含む	良好	穿孔2カ所
28	152	E8	S027	赤生土層	髷台	-	- 12.4 6.7*	ナデ、ハケメ	-	褐色 7.5YR7/6	褐色5YR7/6	2mm以下の石英、長石、霏石を含む	良好	
28	153	E8	S027	赤生土層	髷台	-	- 12.2 6.7*	-	指環圧痕、しぼり	にぶい褐色 5YR7/3	褐色7.5YR7/6	2mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む	普通	
28	154	E8	S027	赤生土層	髷台	14.0	13.2 16.6*	-	しぼり	明褐色 7.5YR6/6	7.5YR6/6	4mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む	良好	一部被蝕?
28	155	E8	S027	赤生土層	髷台	12.4	12.8 18.2*	-	-	淡黄褐色 7.5YR8/4	7.5YR8/6	3mm以下の石英、長石、角閃石を含む	やや不良	
28	156	E8	S027	赤生土層	髷台	11.8	- 15.6*	-	しぼり、指環圧痕、工具痕	淡黄褐色 7.5YR8/6	明赤褐色 5YR6/6	2mm以下の石英、長石、角閃石を含む	普通	
28	157	E8	S027	赤生土層	髷台	11.7	- 14.9	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR6/6	5mm以下の石英、長石を含む	良好	
28	158	E8	S027	赤生土層	髷台	13.9	14.4 17.3	ハケメのもナデ	ハケメ、しぼり、工具痕	淡黄褐色 2.5YR6/4	淡黄褐色 10YR7/3	6mm以下の石英、長石を含む	良好	
28	159	E8	S027	赤生土層	髷台	8.6	11.6 16.2	タナナデ、ナデ	ナデ、ハケメ、しぼり	明赤褐色 5YR5/8	明赤褐色 5YR5/8	4mm以下の石英、長石を含む	良好	
28	160	E8	S027	赤生土層	髷台	11.3	12.5 16.3	新製文、ハケメ、工具痕、ハケメのもナデ	ハケメ、しぼり、ハケメのもナデ	褐色 7.5YR7/6	褐色7.5YR6/6	5mm以下の石英、長石を含む	良好	
47	222	E7	SD10	赤生土層	高杯	-	- 3.9*	-	-	褐色5YR6/6	10YR7/2	3mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む	良好	
47	223	E7	SD10	赤生土層	鉢	-	- 2.5*	-	-	にぶい黄褐色 10YR6/3	10YR7/3	3mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む	良好	
47	224	E7	SD10	赤生土層	鉢	-	- 5.3*	-	-	淡黄褐色 10YR6/3	10YR6/3	4mm以下の石英、長石を含む	良好	城/越式
47	225	E7	SD10	赤生土層	壺	-	- 3.5*	ナデ、突帯	ナデ	淡黄褐色 10YR6/3	灰白色 10YR7/1	3mm以下の石英、長石、角閃石を含む	良好	
47	226	E8	SD10	赤生土層	壺	-	- 4.8*	-	-	褐色5YR6/6	10YR7/4	3mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む	良好	
47	227	E8	SD10	赤生土層	髷台	-	- 5.9*	ハケメ	-	灰黄褐色 10YR6/2	灰黄褐色 10YR6/2	3mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む	良好	黒壁式
47	228	E7	S032	瓦質土層	壺	-	- 3.0*	格子目タナキ	ヨコナデ	灰色N6/0	灰色N6/0	3mmの石英、長石を含む	良好	樽巻被蝕か
47	229	E7	S032	瓦質土層	罎	-	- 3.0*	指環圧痕	罎り目	灰色N6/0	灰色N6/0	3mm以下の白色粒、黒色粒を含む	良好	
47	230	E7	S032	瓦質土層	罎	-	- 4.1*	指環圧痕、ヨコナデ	罎り目	灰黄色 2.5Y5/1	灰黄色 2.5Y7/2	3mm以下の角閃石、霏石、長石を微量含む	良好	
47	231	E7	S032	瓦質土層	罎	-	- 5.4*	-	罎り目	灰色N7/0	灰色N7/0	4mm以下の石英、長石を微量含む	良好	
47	232	E7	S032	瓦質土層	罎	-	- 6.3*	ヨコナデ	罎り目	灰色N6/0	灰色N5/0	3mm以下の石英、長石、白色、黒色粒を微量含む	良好	
48	233	E8	SK12	赤生土層	壺	-	- 4.7*	ナデ	ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/4	褐色5YR6/6	3mm以下の石英、長石を多く含む	良好	城/越式
48	234	E6	SK12	赤生土層	壺	-	- 2.5*	ナデ	ナデ	灰白色 7.5YR8/2	7.5YR6/6	3mm以下の石英、長石、角閃石を含む	良好	城/越式
48	235	E8	SK12	赤生土層	壺	-	- 2.0*	-	-	淡黄褐色 10YR6/3	10YR6/3	3mm以下の石英、長石、角閃石を含む	良好	城/越式
48	236	E8	SK12	赤生土層	壺	-	- 2.3*	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/2	淡黄褐色 10YR6/4	3mm以下の石英、長石、角閃石、霏石、赤色粒を含む	良好	城/越式
48	237	E8	SK12	赤生土層	壺	-	- 2.0*	ナデ	ナデ	褐色 7.5YR6/6	褐色7.5YR6/6	3mm以下の石英、長石、角閃石、霏石、赤色粒を含む	良好	
48	238	E8	SK12	赤生土層	壺	-	- 2.0*	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/4	10YR6/4	2mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む	良好	
48	239	E6	SK12	赤生土層	壺	-	- 5.5*	タナキのもハケメ	ハケメ、ナデ	褐色 10YR4/1	褐色7.5YR7/6	3mm以下の石英、長石を含む	良好	
48	240	E8	SK12	赤生土層	壺	-	- 9.8 9.9*	-	-	淡黄褐色 10YR6/4	7.5YR6/4	4mm以下の石英、長石、角閃石を含む	良好	
48	241	E6	SK12	赤生土層	壺	-	- 3.0*	-	-	明赤褐色 2.5YR5/6	褐色2.5YR6/6	3mm以下の石英、長石、角閃石を含む	良好	黒壁式
48	242	E6	SK12	赤生土層	壺	-	- 6.4 10.3*	-	ナデ	褐色 2.5YR6/6	褐色7.5YR7/6	3mm以下の石英、長石、角閃石を含む	良好	黒壁式
48	243	E8	SK12	赤生土層	壺	-	- 6.0 5.8*	-	-	褐色 2.5YR6/6	淡黄褐色 7.5YR8/4	3mm以下の石英、長石を含む	良好	城/越式、黒曜石小片あり
48	244	E8	SK12	赤生土層	壺	-	- 6.6 2.7*	-	ナデ	黄褐色 10YR6/6	10YR6/6	3mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む	良好	城/越式

探検 番号	遺物 番号	出土地点		種別	器種	法量			器底調整		色調		胎土	備考		
		グリッド	遺構番号			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	外面	内面	外面	内面				
48	245	E6	SK12	弥生土器	壺	-	-	3.3+	ナデ	ナデ	淡黄褐色 10YR5/3	淡黄褐色 10YR5/3	2mm以下の石英、長石、 角閃石を含有	良好		
48	246	E6	SK12	弥生土器	脚付鉢	-	-	2.4+	ナデ	ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/3	淡黄褐色 7.5YR7/3	2mm以下の石英、長石、 雲母を含む	良好		
48	247	E6	SK12	弥生土器	壺	-	-	9.1+	ナデ、ハケメ	-	褐色 7.5YR7/6	淡黄褐色 10YR5/3	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	胴部最小径12.4cm	
48	248	E6	SK12	弥生土器	壺	-	-	4.5+	ナデ	ナデ	淡黄褐色 7.5YR7/3	淡黄褐色 7.5YR5/3	2mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好		
48	249	E6	SK12	弥生土器	壺か	-	-	2.0+	ナデ	ナデ	明褐色 5YR5/6	明褐色 5YR5/6	3mm以下の石英、長石、 雲母を含む	良好		
48	250	E6	SK12	弥生土器	壺	-	-	6.0+	突帯	ナデ、ハケメ	にぶい褐色 5YR7/4	にぶい褐色 5YR6/4	3mm以下の石英、長石、 角閃石、雲母を含む	良好		
48	251	E6	SK12	弥生土器	壺	-	-	10.0	78+	-	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	5mm以下の石英、長石、 角閃石、雲母を含む	良好		
48	252	E6	SK12	弥生土器	壺	-	-	8.0	44+	ナデ	-	にぶい褐色 7.5YR7/4	褐色 7.5YR6/6	5mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	サヌカイ小片含 む
48	253	E6	SK12	弥生土器	高坏	22.6	-	3.1+	ナデ	ナデ	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR7/6	3mm以下の石英、長石、 角閃石、雲母を含む	良好		
48	254	E6	SK12	弥生土器	器台	-	-	4.0+	-	-	褐色 7.5YR7/6	褐色 5YR7/6	3mm以下の石英、長石、 角閃石、雲母、赤色粒を 含む	良好		
48	255	E6	SK12	弥生土器	鉢	-	-	7.7	2.3+	指図圧痕	ナデ	褐色 5YR6/6	にぶい褐色 5YR6/4	3mm以下の石英、長石、 角閃石、雲母を含む	良好	
50	260	E8	炭化物層	瓦質土器	罐鉢	-	-	4.5+	ナデ	襷目	褐灰色 10YR5/1	褐灰色 10YR5/1	1mm以下の白色粒を含む	良好		
50	261	E8	炭化物層	土師器	土師皿	-	-	2.7	ヨコナデ、 底部角切り	ナデ	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	2mm以下の石英を含む	良好		
50	262	E8	炭化物層	瓦器	椀	-	-	1.4+	ケズリ、エゴガ キ、口縁のみ黒化	ヨコナデ、ケズリ	暗緑 灰白色N8/	暗緑 灰白色N5/	精良織粒	良好		
50	263	E8	炭化物層	白磁	皿	-	-	7.2	2.4+	指輪	暗緑 灰白色N8/0	暗緑 灰白色N6/0	胎土 混入物なし	良好	18C中境	
54	279	E8	-	弥生土器	壺	14.8	-	7.5+	ヨコナデ、ハケメ	-	淡黄褐色 10YR5/3	淡黄褐色 10YR5/3	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	圧痕あり	
54	280	E8	-	弥生土器	壺	18.4	-	7.5+	ナデ、 ハケメのちナデ	ハケメのちナデ、 ハケメ	にぶい褐色 7.5YR5/3	にぶい褐色 7.5YR6/4	3mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好		
54	281	E8	包含層	弥生土器	壺	17.4	-	4.1+	ナデ	ナデ	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR6/4	2mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好		
54	282	E8	包含層	弥生土器	壺	-	-	10.2	4.5+	ナデ 底縁ケズリ	ナデ	淡黄褐色 10YR5/3	淡黄褐色 10YR5/3	2mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	サヌカイ小片あり
54	283	E8	-	弥生土器	壺	-	-	6.7	1.56+	ナデ	にぶい褐色 7.5YR6/4	淡黄褐色 2YR7/3	2mm以下の石英、長石を 含む	良好		
54	284	E8	包含層	弥生土器	壺	-	-	4.2+	-	-	褐色 5YR6/6	褐灰色 5YR4/1	4mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好		
54	285	E8	包含層	弥生土器	脚付鉢	-	-	13.8	3.9+	ナデ	ナデ	褐色 5YR7/6	にぶい褐色 7.5YR7/4	2mm以下の石英、長石、 角閃石、赤色粒を含む	良好	
54	286	E9	包含層	弥生土器	短頸壺	9.8	-	3.9+	ナデ	ナデ	淡黄褐色 10YR5/3	にぶい黄褐色 10YR7/2	2mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	黒曜石小片あり	
54	292	E8	包含層	瓦質土器	火鉢	-	-	5.3+	ナデ、突帯	ナデ	にぶい褐色 7.5YR6/3	にぶい褐色 7.5YR5/3	3mm以下の石英、長石、 角閃石、雲母、赤色粒を 含む	良好		
54	287	D7	包含層	弥生土器	鉢	9.4	4.9	6.5	ケズリ、ナデ	ナデ、工具痕	褐色 7.5YR6/6	にぶい褐色 7.5YR6/4	4mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好		
54	288	E8	包含層	弥生土器	ジョッキ	-	-	7.8+	ナデ	ナデ	明褐色 7.5YR5/6	淡黄褐色 7.5YR6/3	2mm以下の石英、長石を 含む	良好		
54	289	E8	包含層	弥生土器	壺	-	-	5.0+	ナデ	-	褐色 7.5YR6/6	褐色 5YR7/6	4mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良好	黒曜石片あり	
54	290	E8	包含層	弥生土器	高坏	-	-	2.1+	ナデ、ハケメ	ナデ	灰白色 7.5YR8/2	淡黄褐色 7.5YR6/4	2mm以下の石英、長石、 雲母を含む	良好		
54	291	E8	包含層	ミニチュア 土器	鉢	2.5	-	3.05	指図圧痕、ナデ	指図圧痕、ナデ	灰白色 10YR5/2	淡黄褐色 2.5Y7/3	2mm以下の石英、長石、 赤色粒を含む	良好	重さ20g 胴部に穿 孔	
54	293	E8	包含層	瓦質土器	壺	-	-	5.2+	襷目タタキ	ナデ	褐灰色 10YR5/1	褐灰色 10YR5/1	1mm以下の石英、長石、 角閃石、雲母、白色・黒 色粒を含む	良好	精良織粒	
54	294	E8	包含層	床付	椀	-	-	1.5+	回転ケズリ	回転ナデ	真鍮粒	真鍮粒重織	精良織粒・磁粒	良好		
54	297	E9	包含層	白磁	皿	-	-	6.6	2.0+	回転ケズリ	回転ナデ	真鍮粒	真鍮粒重織	精良織粒・磁粒	良好	

木船西遺跡Ⅳ区土製品観察表

探検 番号	遺物 番号	出土地点		種別	器種	法量			器底調整		色調		胎土	備考	
		グリッド	遺構番号			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	外面	内面	外面	内面			
13	26	D6	SK08	土製品	ミニチュア器台	4.9	2.3	-	ナデ?	-	にぶい黄色 2.5Y6/3	黄灰色 2.5Y4/1	2.5mm以下の石英、白 色砂粒を含む	良好	重さ40g
37	194	E8	SK29	土製品	瓦質土製品	2.7	3.8	3.7	指図圧痕、 ナデ	-	灰白色 5Y4/1	-	精細～1.5mm以下の石 英と白色砂粒を含む	良好	重さ17g 2ヶ所の精細穿孔孔
37	195	E8	SK29	土製品	神代瓦質土製品	4.6+	1.3	-	指図圧痕	-	暗緑 褐灰色 10YR4/1	暗緑 灰白色 10YR5/2	0.5～2mmの石英、長 石、雲母を少量含む	良好	瓦質土器と同じ胎土
37	196	E8	SK29	土製品	筒形土製品	8.3+	-	7.8+	指図圧痕、 ナデ	-	灰白色 5Y7/1	褐灰色 7.5YR4/1	雲母～5mmの石英、 0.5～2mmの長石を含む	良好	断面はほろけている
54	296	E8	褐色土	土製品	家道具	4.9	6.0+	3.2+	指図圧痕	-	褐色 5YR7/6	-	1mmの石英を多く含む	良好	重さ104g
54	297	E8	遺成土	土製品	家道具(儀台)	直径 4.8	-	1.7	指図圧痕	-	明褐色 7.5YR5/6	-	石英、雲母を含む	良好	重さ44g

木船西遺跡Ⅳ区互観表

棟号	遺物番号	出土地点		法量		形 状 調 査			色 調	胎 土	焼 成	備 考
		グリッド	遺構番号	器 種	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	△面				
32	171	EB	SK29	丸瓦	245×154×4	タテナデ、玉縁コナデ	コビキA面、玉縁しぼり儀	垂取リ、工具痕	灰色25Y7/1 灰色M/	5mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。含む。胎土マーブル。		やや不良
33	172	EB	SK29	丸瓦	31 13	タテナデ、玉縁コナデ	コビキA面、玉縁しぼり儀	垂取リ、工具痕	浅灰色25Y7/3 灰色M/	7mm以下の石灰、長石、重母を含む。胎土マーブル。		やや不良
34	173	EB	SK29	平瓦	20.8×143×2.1	糸切儀、ナデ、工具痕	糸切儀、ナデ	—	反白色25Y7/1 灰色M/	3mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		やや不良
34	174	EB	SK29	平瓦	8.1×5.8×2.2	糸切儀、ナデ	糸切儀、ナデ、工具痕	—	褐色灰色5YR6/1 反白色10YR6/2	3mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		不良
34	175	EB	SK29	平瓦	13.5×11.1×1.8	糸切儀、ナデ	糸切儀、ナデ	—	黒褐色7.5YR2/1 明褐色7.5YR7/2	3mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		やや不良
34	176	EB	SK29	平瓦	12.5×12.0×1.7	ナデ、工具痕	糸切儀、ナデ	—	反白色10YR7/1 褐色灰色10YR6/1	3mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		やや不良
34	177	EB	SK29	平瓦	14.2×11.2×1.9	ナデ、工具痕	糸切儀、ナデ	—	反褐色7.5YR6/2 褐色7.5YR4/6	4mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		良好
35	178	EB	SK29	平瓦	8.2×9.1×2.3	糸切儀、ナデ	ナデ、工具痕	—	褐色7.5YR6/1	3mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		良好
35	179	EB	SK29	平瓦	7.5×11.8×1.8	糸切儀、ナデ、凹台庄儀	ナデ	—	灰色5Y8/1	3mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		良好
35	180	EB	SK29	平瓦	13.8×16.4×2.2	ナデ、工具痕	ナデ	—	明褐色7.5YR7/1 褐色灰色7.5YR5/1	3mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		やや不良
35	181	EB	SK29	平瓦	8.7×6.2×2.2	糸切儀、ナデ、凹台庄儀	糸切儀、ナデ	—	褐色灰色10YR4/1	8mm以下の石灰、長石、重母を含む。		普通
35	182	EB	SK29	平瓦	16.9×15.2×2.2	糸切り儀、ナデ	糸切儀	縁部面取	にぶい黄褐色10YR7/3 浅黄褐色10YR8/3	4.5mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		良好
36	183	EB	SK29	平瓦	8.3×7.7×1.8	糸切儀、ナデ、凹台庄儀	糸切儀、ナデ	—	明褐色7.5YR7/1	4mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		普通
36	184	EB	SK29	平瓦	8.8×6.7×1.8	糸切儀、ナデ、凹台庄儀	糸切儀、ナデ	—	褐色灰色7.5YR6/1	4mm以下の石灰、長石、角閃石を含む。		良好
36	185	EB	SK29	平瓦	9.3×3.7×1.6	糸切儀、ナデ	糸切儀、ナデ	—	にぶい黄褐色10YR7/3 黒褐色10YR3/1	8mm以下の石灰、長石、角閃石、安山岩片を含む。		やや不良
36	186	EB	SK29	平瓦	8.6×8.7×2.1	糸切儀、ナデ、凹台庄儀	糸切儀、ナデ、工具痕	—	反白色N7/ 灰色M/	4mm以下の石灰、長石、重母を含む。胎土マーブル。		やや不良
36	187	EB	SK29	平瓦	8.1×6.9×2.4	糸切儀、ナデ	糸切儀、ナデ	縁部面取	褐色灰色5YR6/1 褐色7.5YR6/2	10mm以下の石灰、長石、安山岩片を含む。		普通
36	188	EB	SK29	平瓦	12.3×12.5×2.4	糸切儀、ナデ、凹台庄儀	糸切儀、ナデ、工具痕	縁部面取	反褐色7.5YR6/2 褐色灰色10YR5/1	5mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		良好
36	189	EB	SK29	平瓦	9.1×12.1×1.9	ナデ	糸切儀、ナデ	—	褐色灰色10YR4/1	5mm以下の石灰、長石を含む。		良好
36	190	EB	SK29	平瓦	12.8×13.6×2.1	糸切儀、ナデ	糸切儀、ナデ	—	褐色灰色7.5YR5/1	5mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		良好
36	191	EB	SK29	平瓦	8.2×8.9×2.4	糸切儀、ナデ	糸切儀、ナデ	—	黒褐色10YR3/1 にぶい黄褐色10YR8/3	3mm以下の石灰、長石、角閃石を含む。		やや不良
36	192	EB	SK29	平瓦	11.5×9.3×2.0	糸切儀、ナデ	糸切儀、ナデ	—	黒褐色10YR3/1 黄褐色10YR6/6	3mm以下の石灰、長石、角閃石を含む。		良好
36	193	EB	SK29	平瓦	10.8×13.2×2.3	糸切儀、ナデ	ナデ	—	褐色灰色10YR6/1 反白色10YR7/1	4mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		普通
39	199	EB	トレンチー一括	丸瓦	23.4×16.2×3	ナデ	縁部面取、糸切儀、布目痕	—	反白色5Y8/1 褐色M5/	4mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		やや不良
40	200	EB	トレンチー一括	丸瓦	9.2×15.2×2.1	ナデ	縁部面取、糸切儀、布目痕	—	灰色5Y6/ 灰色5Y4/	4mm以下の石灰、長石、角閃石を含む。		普通
40	201	EB	トレンチー一括	丸瓦	12.7×9.3×2.3	ナデ	縁部面取、糸切儀、布目痕	—	にぶい黄褐色10YR7/3 浅黄褐色10YR8/3	4.5mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		良好
40	202	EB	トレンチー一括	丸瓦	7.0×10.1×2.1	ナデ	縁部面取、糸切儀、布目痕	—	黄灰色2.5Y7/1 反褐色2.5Y7/2	5mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		やや不良
40	203	EB	トレンチー一括	軒丸瓦	6.0×6.8×2.6	—	ナデ、赤土付着	—	灰色M/、黄灰色2.5Y4/1	4mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		やや不良
40	204	EB	トレンチー一括	軒平瓦	13.4×10.0×2.1	ナデ	ナデ	—	反白色10YR8/2	3mm以下の長石、重母を含む。		良好
40	205	EB	トレンチー一括	平瓦	17.4×14.9×1.9	ナデ、凹台庄儀	糸切儀、ナデ、工具痕	縁部面取	反白色7.5Y7/1 灰色M/	5mm以下の石灰、長石、角閃石を含む。		良好
41	206	EB	トレンチー一括	平瓦	17.5×13.7×2.2	糸切儀、ナデ	糸切儀、ナデ	縁部面取	灰色M/、褐色灰色10YR6/1 にぶい黄褐色7.5YR7/4	7mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		良好
41	207	EB	SK29 2階	丸瓦	7.1×5.4×2.3	蓋取、ナデ	布目痕	—	褐色7.5YR4/4 褐色灰色10YR4/1	3mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		普通
41	208	EB	トレンチー内	平瓦	8.0×7.8×2.3	糸切儀、凹台庄儀	糸切儀	—	にぶい黄褐色7.5YR6/3 褐色灰色7.5YR5/1	3mm以下の石灰、長石、重母を含む。		良好
41	209	EB	トレンチー一括	平瓦	10.8×8.2×2.2	糸切儀、ナデ、凹台庄儀	糸切儀、ナデ	縁部面取	黒褐色10YR3/1 反黒褐色10YR6/2	3mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		不良
41	210	EB	トレンチー一括	平瓦	19.3×10.5×1.9	糸切儀、ナデ	ナデ	—	反白色7.5Y7/1 反白色7.5YR6/1	4mm以下の石灰、長石、角閃石を含む。		普通
42	211	EB	トレンチー内	平瓦	10.8×5.8×2.5	糸切儀、ナデ	ナデ	—	黒褐色10YR3/1 褐色灰色10YR5/1	3mm以下の石灰、長石、角閃石を含む。		普通
42	212	EB	トレンチー内	平瓦	10.4×6.8×2.2	ナデ、凹台庄儀	糸切儀、ナデ	—	明褐色7.5YR7/1	4mm以下の石灰、長石、角閃石を含む。		やや不良
42	213	EB	トレンチー内	平瓦	11.2×6.4×2.5	ナデ、凹台庄儀	糸切儀、ナデ	縁部面取	黒褐色10YR3/1 褐色灰色7.5YR5/1	4mm以下の石灰、長石を含む。		良好
42	214	EB	トレンチー内	平瓦	9.9×11.0×2.1	へう儀	ナデ	縁部面取	明褐色7.5YR7/1 褐色灰色7.5YR5/1	4mm以下の石灰、長石、黒色粒を含む。		やや不良
42	215	EB	トレンチー内	平瓦	6.2×6.3×2.2	ナデ	糸切儀	縁部面取	反白色10YR6/1 反白色10YR4/2	4mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		不良
42	216	EB	トレンチー内	平瓦	10.8×4.9×1.9	糸切儀	糸切儀	—	反黄褐色10YR8/2 褐色灰色10YR5/1	4mm以下の石灰、長石、角閃石、重母を含む。		やや不良

発掘 番号	遺物 番号	出土地点		種	寸法			形 状 類 型			色 調	胎 土	情景	備考
		グリッド	通稱番号		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	△面	凹面	側縁				
42	217	E8	トレンチ一括	平瓦	6.9	7.5	2.0	凹台庄底	ナデ	—	灰白色10YR8/1	4mm以下の石英、長石、角閃石を含む。	不良	
42	218	E8	トレンチ内 一括灰化物層	平瓦	6.4	6.1	2.3	ナデ、凹台庄底	糸切儀、ナデ	—	灰色5Y6/1 灰色5Y7/1 に少し黄褐色10YR7/4 黄褐色10YR8/3	5mm以下の石英、長石、白色粉を含む。	特に良好	須臾瓦
42	219	E8	トレンチ一括	平瓦	7.4	6.8	2.2	ナデ	糸切儀、工具用	—	—	4mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む。	普通	
42	220	E8	トレンチ一括	平瓦	12.0	9.8	2.2	糸切儀	糸切儀	—	灰色5Y6/1	4mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む。	普通	
42	221	E8	トレンチ一括	平瓦	10.5	12.1	1.7	糸切儀、ナデ	糸切儀、ナデ	—	灰色5Y7/1 灰色5Y6/1	10mm以下の石英、長石、霏石、霏石を含む。	やや不良	
50	264	E8	灰化物層	平瓦	14.2	11.3	2.0	へう儀、 凹台庄底	糸切儀、へう儀	—	灰色5Y6/1 褐色10YR8/1	3mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む。	普通	
50	265	E8	灰化物層	平瓦	13.7	7.4	2.2	ナデ、工具用、 凹台庄底	糸切儀、ナデ	襷部蓋取	褐色10YR8/1 灰白色10YR8/2	3mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む。	やや不良	襷部蓋取
50	266	E8	灰化物層	丸瓦	13.7	7.4	2.2	ナデ	糸切儀	襷部蓋取	褐色10YR5/1	3mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む。	普通	
50	267	E8	灰化物層	平瓦	7.5	12.6	1.9	糸切儀、ナデ	ナデ	—	褐色10YR5/1	4mm以下の石英、長石、霏石を含む。	良好	
50	268	E8	灰化物層	丸瓦	9.8	4.2	1.8	—	糸切儀	襷部蓋取	褐色7.5YR4/8 灰褐色7.5YR4/6	4mm以下の石英、長石、角閃石、霏石、霏石を含む。	普通	土師瓦
50	269	E8	灰化物層	平瓦	3.5	2.9	2.1	ナデ	ナデ	襷部蓋取	灰白色10YR7/1 褐色10YR5/1	2mm以下の石英、長石を含む。	やや不良	襷部蓋取
50	270	E8	灰化物層	平瓦	13.0	15.0	2.1	ナデ	糸切儀、ナデ	—	灰色5Y6/1 灰白色5Y8/1	3mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む。	普通	
50	271	E8	灰化物層	平瓦	9.3	9.1	2.0	ナデ	ナデ	襷部蓋取	黄褐色10YR3/1	8mm以下の石英、長石、霏石、霏石を含む。	不良	襷部蓋取
50	272	E8	灰化物層	丸瓦	10.0	6.0	2.2	ナデ	糸切儀	襷部蓋取	灰白色5Y8/1 灰色5Y6/1	5mm以下の石英、長石、霏石を含む。	良好	襷部蓋取
51	273	E8	灰化物層	丸瓦	20.6	11.4	2.8	ナデ、 玉縁コナデ	コピキA面、 玉縁コナデ	蓋取り、 工具用	淡黄色2.5Y7/3 黄灰色5Y9/1	4mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む。	普通	
52	274	E8	灰化物層	平瓦	31.2	29.8	2.1	ナデ、凹台庄底	糸切儀、ナデ	—	灰色5Y6/1 に少し黄褐色10YR5/3	4mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む。	普通	
52	275	E8	灰化物層	平瓦	18.5	17.4	2.1	ナデ、凹台庄底	糸切儀、ナデ	—	灰色5Y6/1 黄褐色2.5Y5/3	5mm以下の石英、長石、角閃石、霏石を含む。	普通	
53	276	E8	トレンチ内	平瓦	6.6	6.7	1.9	ナデ	ナデ	—	灰褐色2.5YR6/2 褐色10YR8/1	4mm以下の石英、長石、角閃石を含む。	やや不良	
53	277	E8	トレンチ内	丸瓦	4.4	1.8	2.2	糸切儀	—	襷部蓋取	褐色10YR5/1	4mm以下の石英、長石を含む。	良好	
53	278	E8	トレンチ内	平瓦	10.4	6.6	1.9	へう儀、 凹台庄底	糸切儀、へう儀	—	褐色10YR5/1	3mm以下の石英、長石、角閃石を含む。	普通	

木船西遺跡Ⅳ区石器観察表

発掘 番号	報告書 番号	グリッド	出土地点	層位	種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 材	備 考
16	43	E6/7	SK11	最下層	石鏃	8.2	6.5	2.5	193.00	安山岩	
16	44	E6	トレンチ		附器	5.5	4.8	1.9	237.1	サヌカイト	旧石器か
16	45	E6	SK11		石鏃	2.6*	2.1*	0.5	2.18	サヌカイト	有葉楔形鏃 トレンチ内一括
19	70	E8	SK26		褐色土	1.8	1.8	0.3	0.61	サヌカイト	凹基三角鏃
29	161	E6	SD27		褐色土	2.1	2.8	1.1	70.4	黒曜石	5mm以下の石英、長石、霏石、霏石を含む。
29	162	E8	SD27		褐色土	2.1	2.8	1.1	117.73	サヌカイト	ペルト内出土
29	163	E8	SD27		割片	2.65	3.0	0.5	3.16	黒曜石	不純物多い
29	164	E6	SD27		褐色土ペルト内	3.1	2.2	1.2	109.3	黒曜石	西北九州産か。
29	165	E8	SD27		褐色土	3.0	2.6	0.8	5.00	サヌカイト	遺物集中部より下
29	166	E8	SD27		暗褐色土	3.1*	2.3*	0.54*	2.1	サヌカイト	凹基三角鏃
29	167	E8	SD27		掻器	4.5*	5.0	1.5	28.86	サヌカイト	旧石器か
29	168	E8	SD27		褐色土	4.9*	2.5*	1.2*	11.17	サヌカイト	有葉楔形鏃
29	169	E8	SD27		褐色土	6.6	6.0	2.58	87.43	サヌカイト	珉晶が多い
30	170	E6	SD27	第2層	燧石	10.3	8.7	5.1	641.00	安山岩	
38	197	E8	SK29		灰化物層	12.7	10.7*	5.5	1210.00	安山岩	両面に磨痕
38	198	E6	SK29		褐色石鏃	2.7	2.7	1.0	6.81	黒曜石	西北九州産か
48	256	E6	SK12		赤褐色土(1層)	4.1	3.3*	1.1	11.42	サヌカイト	下辺は折れ面
48	257	E6	SK12		暗褐色土(1層)	7.1	5.1	2.0	70.82	サヌカイト	大空割片利用
48	258	E6	SK12		赤褐色土(1層)	4.5	8.2	1.0	52.99	緑色変質	
48	259	E6	SK12		暗褐色土	6.6*	4.5*	0.9*	3.7	玄武岩質安山岩	福岡市寺山産か
55	296	E8	包含層		灰化物層	30.0*	1.8	2.2	17.98	黒曜石	基層のみ
55	299	E7	包含層		黒褐色土	1.82	1.97	0.36	1.13	黒曜石	西北九州産
55	300	E8	包含層		褐色土	7.1	6.7	1.1	58.54	サヌカイト	風化が早い、旧石器か。
55	301	E8	包含層		褐色土	10.3	7.5	1.9	241.00	安山岩	磨面は片面のみ

写真図版



木船西遺跡上空からみた有明海と雲仙



木船西遺跡上空からみた玉名市街地と玉名平野

図版 2



木船西遺跡上空からみた菊池川と金峰山



木船西遺跡上空からみた玉名市街地と小治山



木船西遺跡Ⅳ区全景

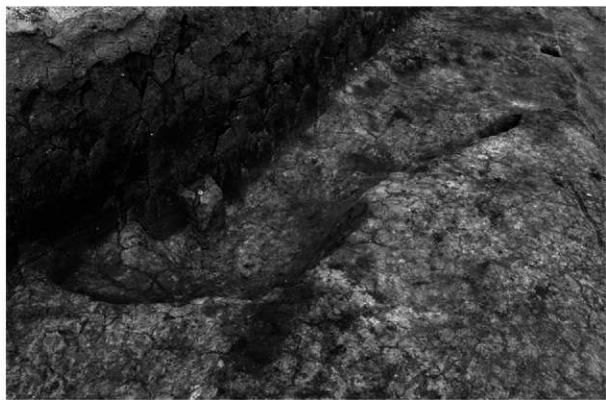


木船西遺跡全景（Ⅰ区～Ⅳ区）

図版 4



SD01 遺物出土状況（東から）



SD01 完掘状況（南東から）



SK08 遺物出土状況・土層断面（北東から）



SK08 完掘状況（北から）

図版 6



SK11 土層断面（北から）



SK11 遺物出土状況（南東から）



SK11 遺物出土状況 近景（東から）



SK13 土層断面（西から）

図版 8



SK26 土層断面 (南東から)



SK26 遺物出土状況 (南東から)



SK26 完掘状況 (南東から)



SD27・SK29 遺物出土状況 (南西から)

図版 10



SD27・SK29 遺物出土状況（北東より）



SD27 完掘状況（東から）



SK29 遺物出土状況（東から）



SK29 完掘状況（東から）

図版 12



SD32 土層断面（南から）



SD32 完掘状況（北東から）

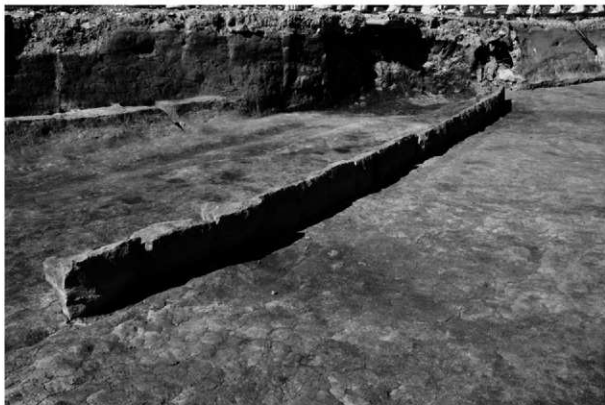


SK29・SD32・SK33 完掘状況遠景(南から)



SK33 完掘状況(東から)

図版 14



石垣検出状況（南東から）



石垣検出状況（南から）



調査区北側道路状遺検出状況（北西から）



調査区北側道路状遺構断ち割り断面（北西から）

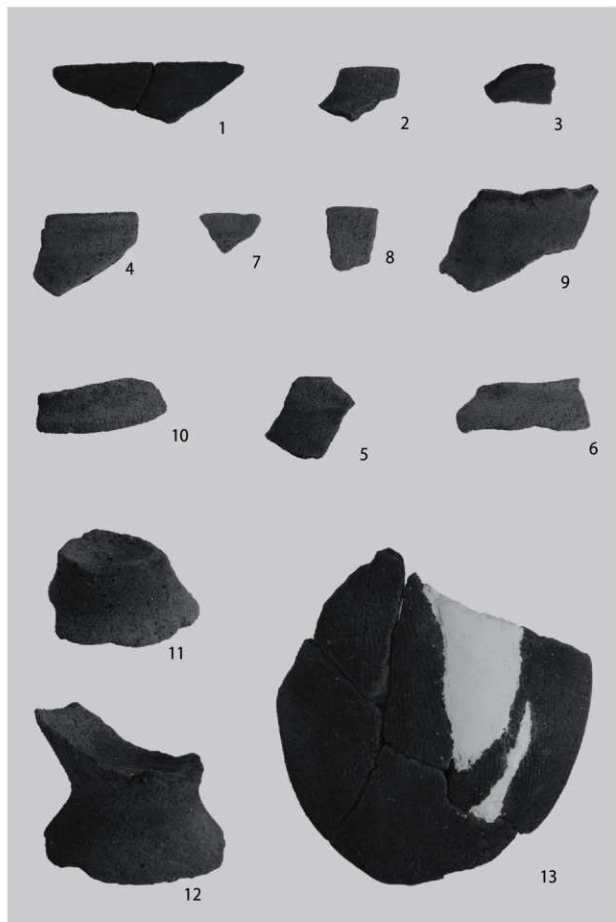
図版 16



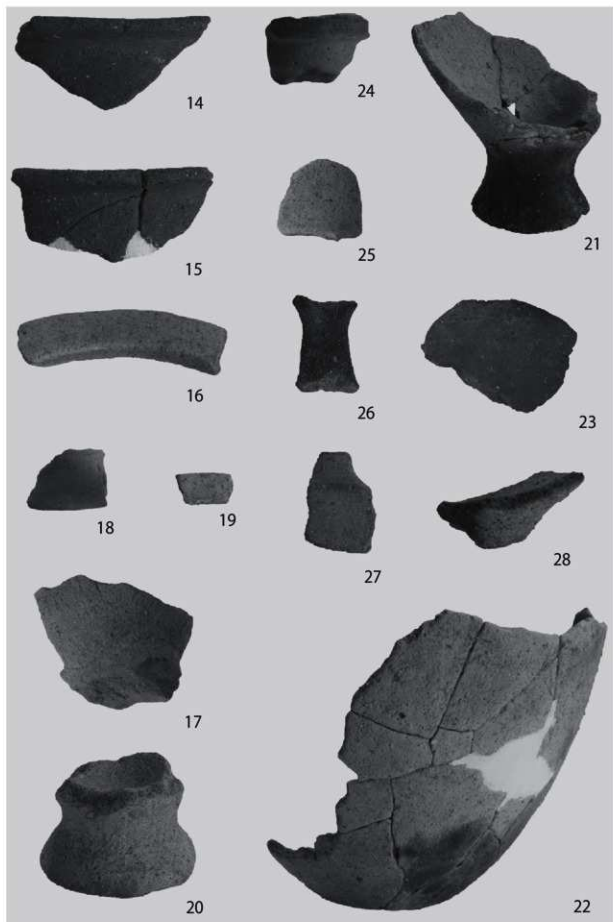
調査区南側粘土抜き取り土坑完掘状況（北から）

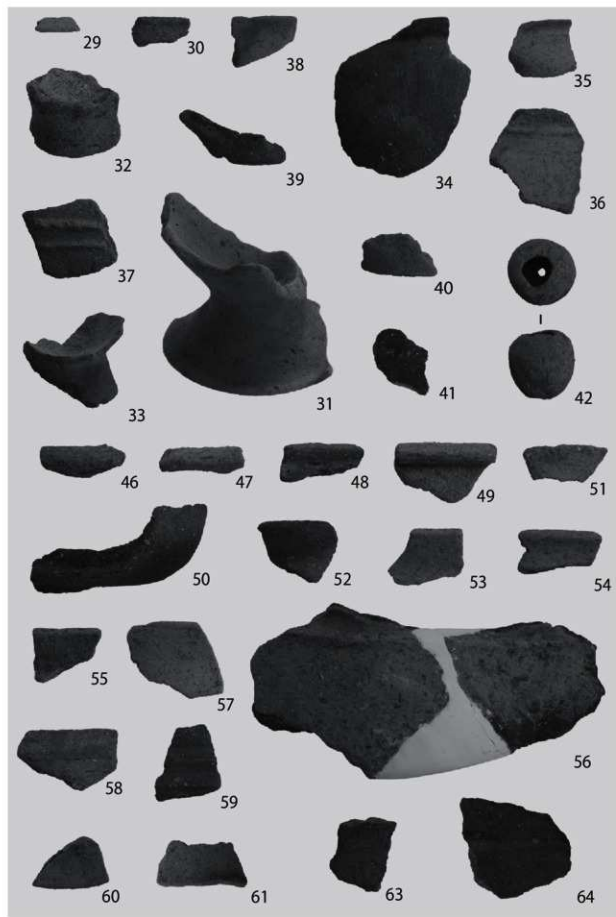


C5・D5・6 グリッド検出道路状遺構検出状況（南から）

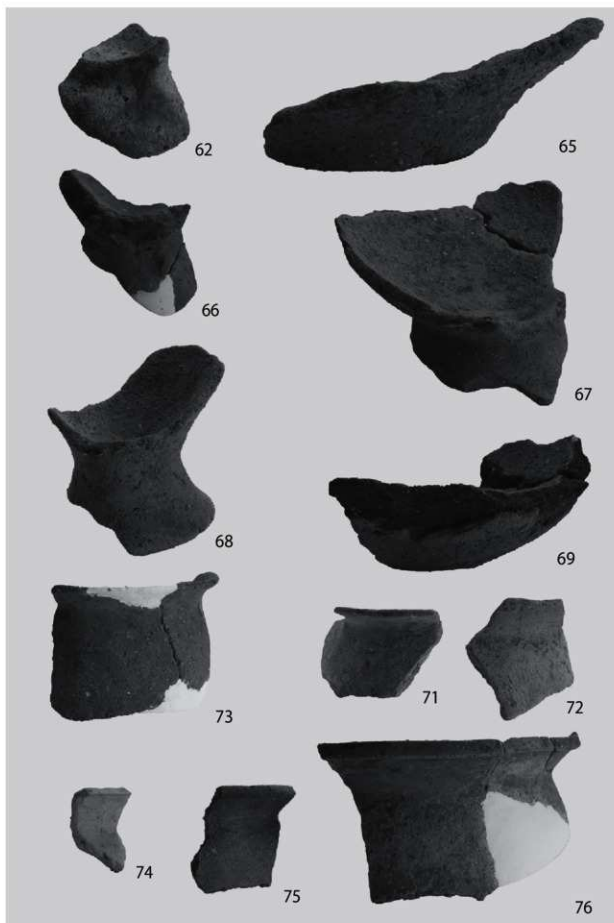


图版 18

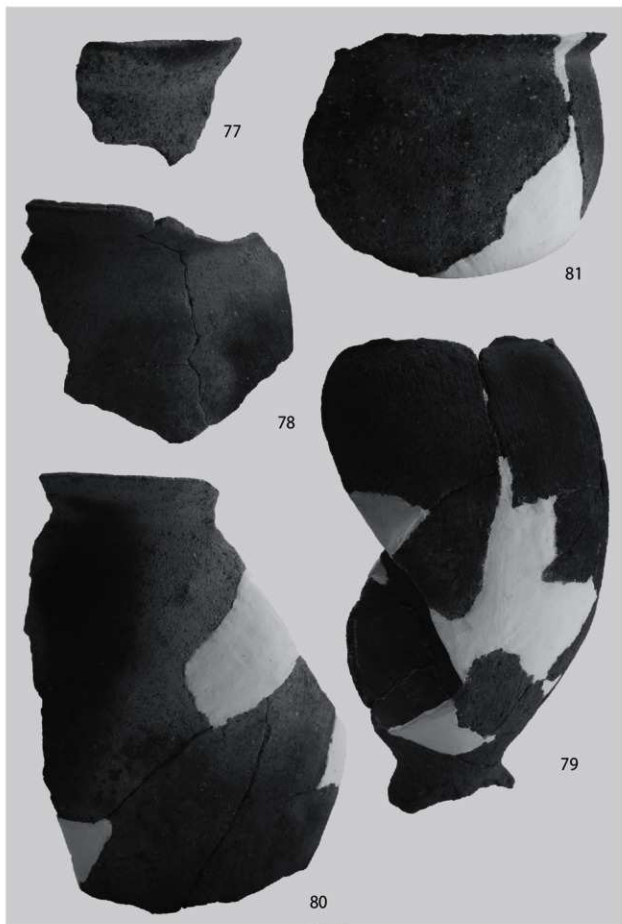


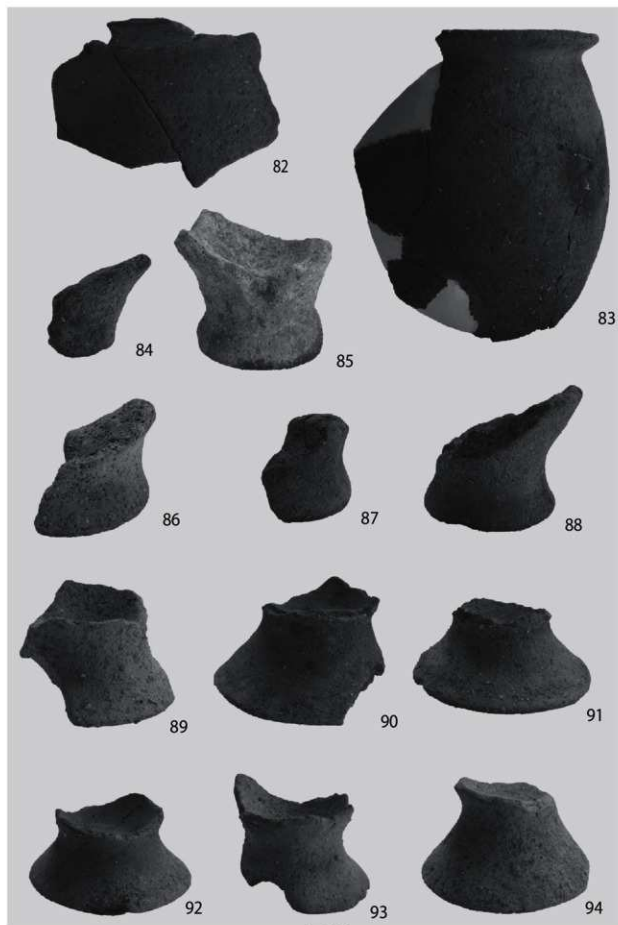


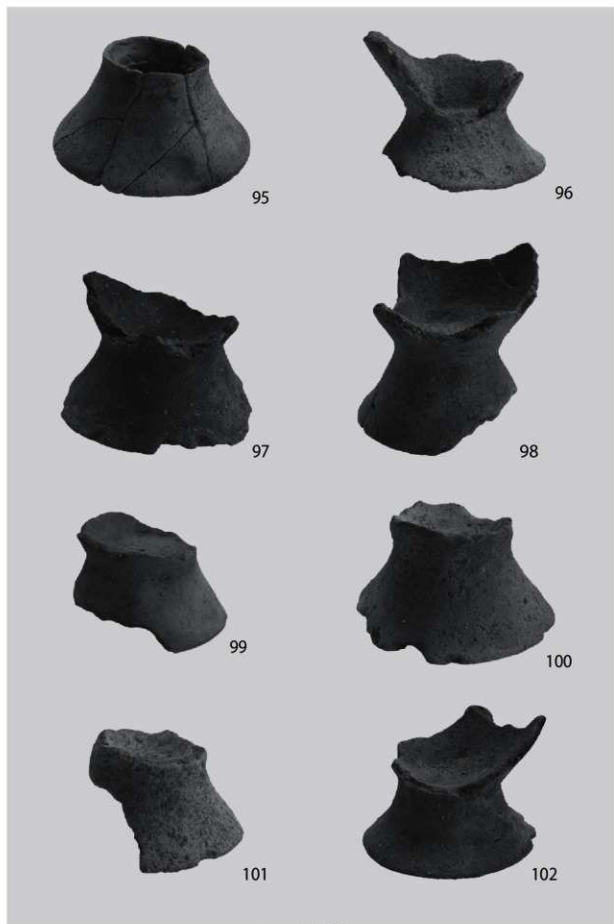
图版 20



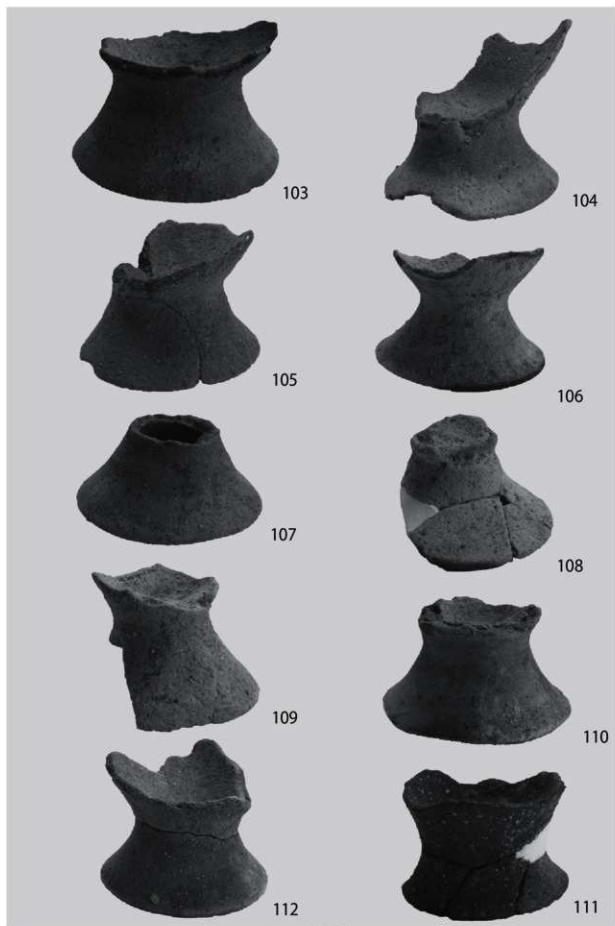
SK26 出土遺物 2・SD27 出土遺物 1

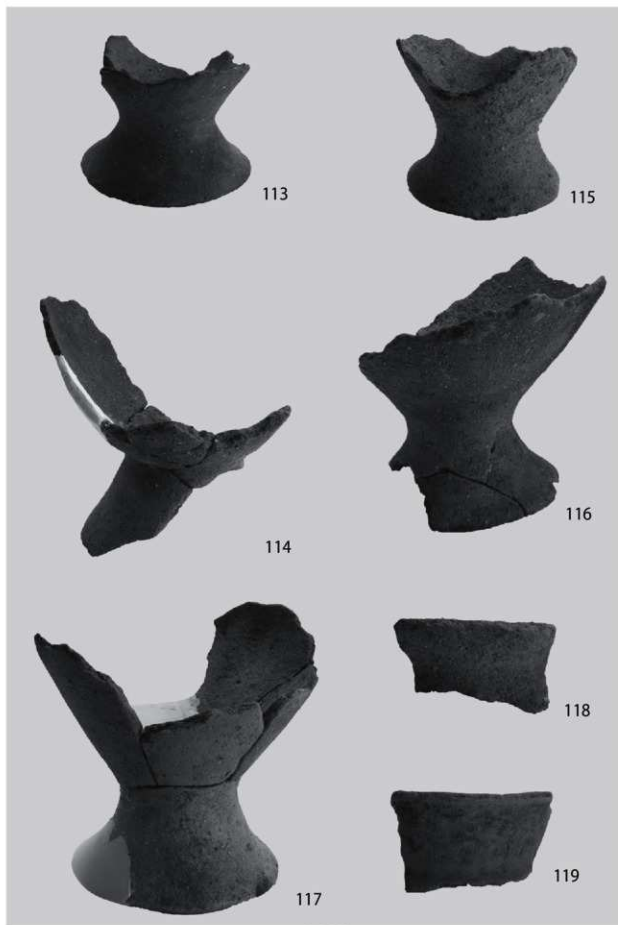






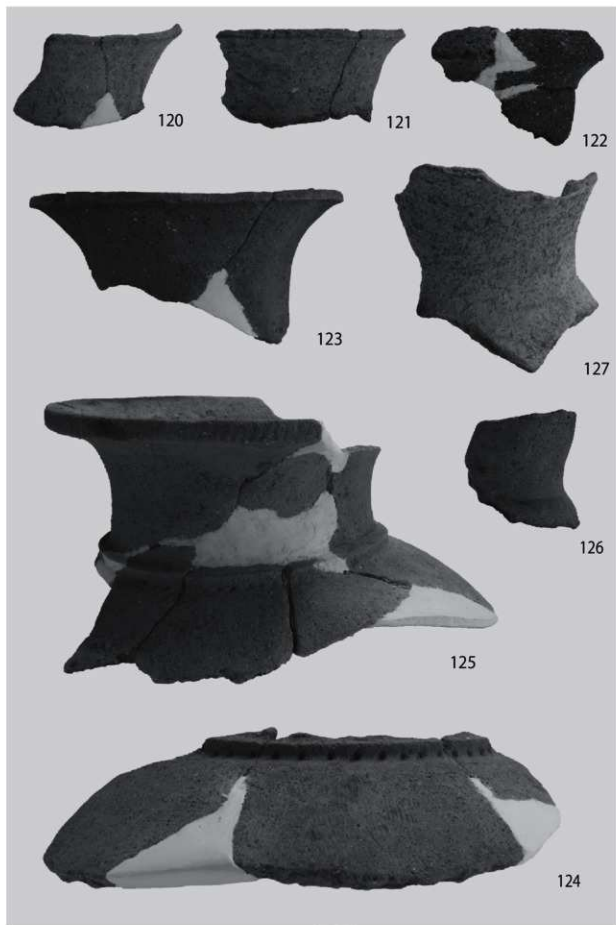
图版 24



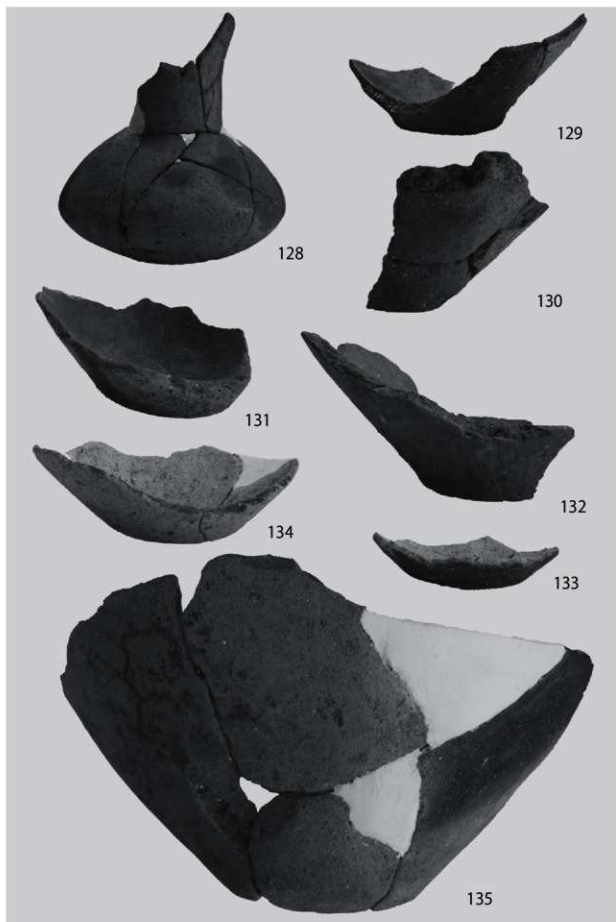


SD27 出土遺物 6

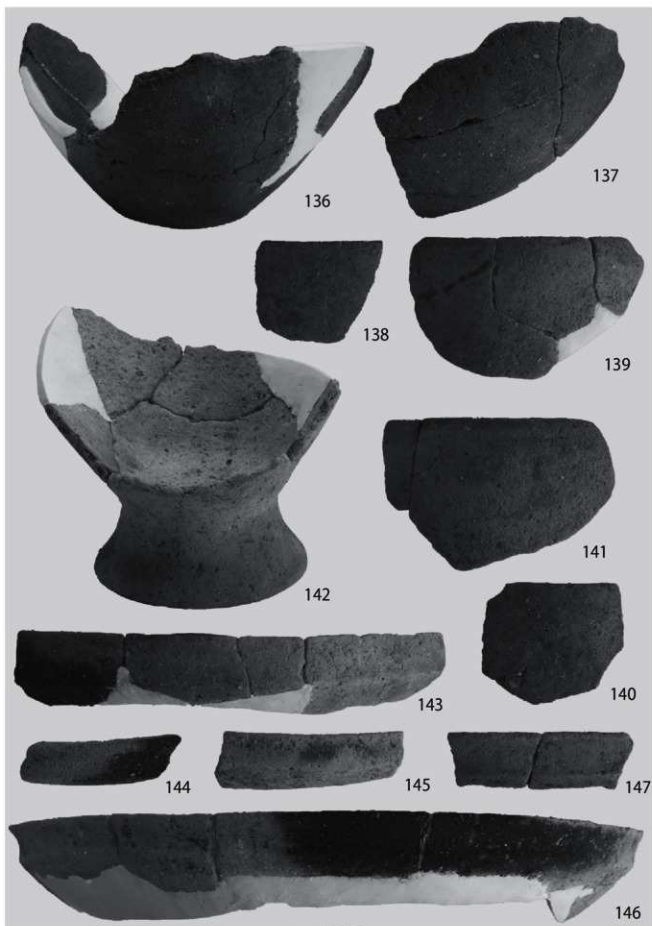
图版 26

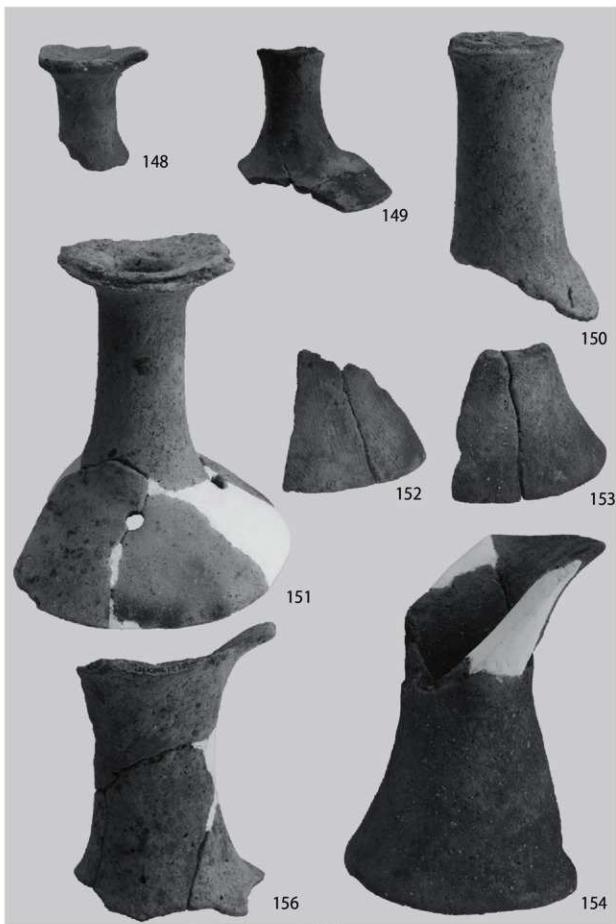


SD27 出土遺物 7



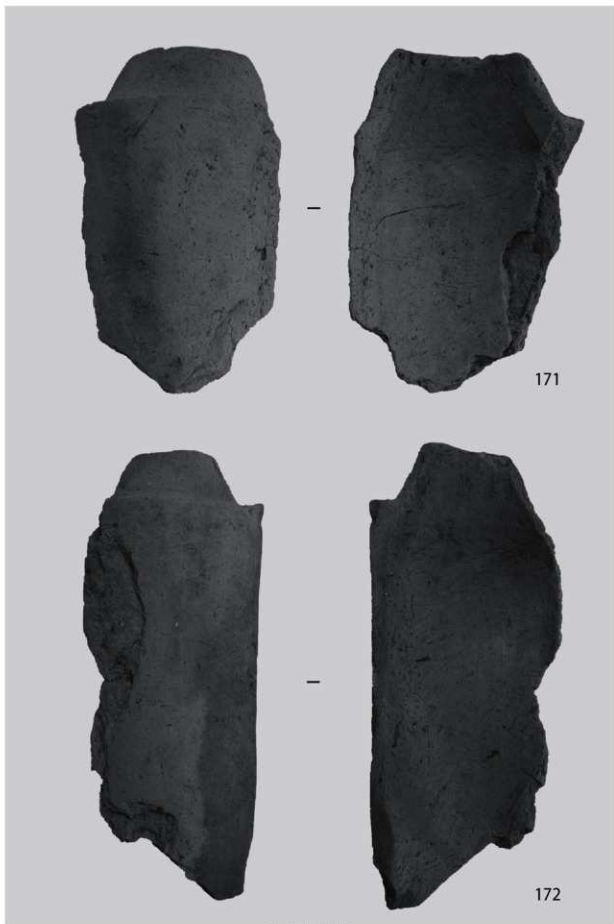
SD27 出土遺物 8



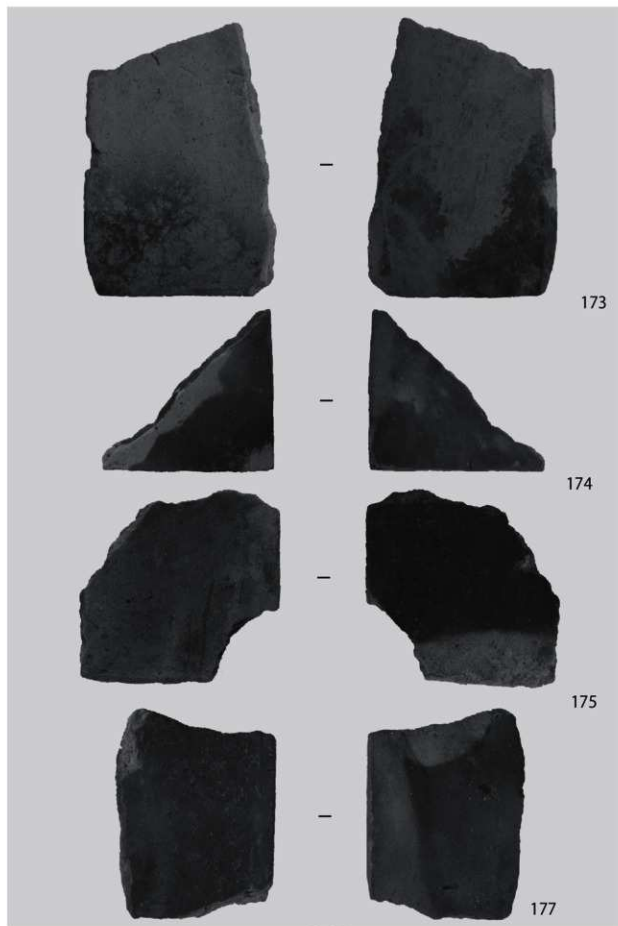


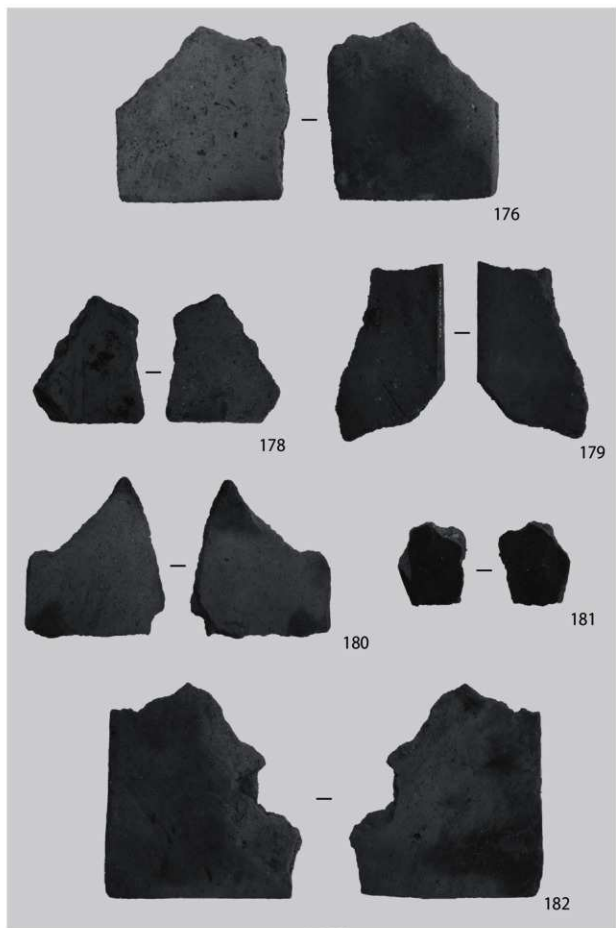
图版 30





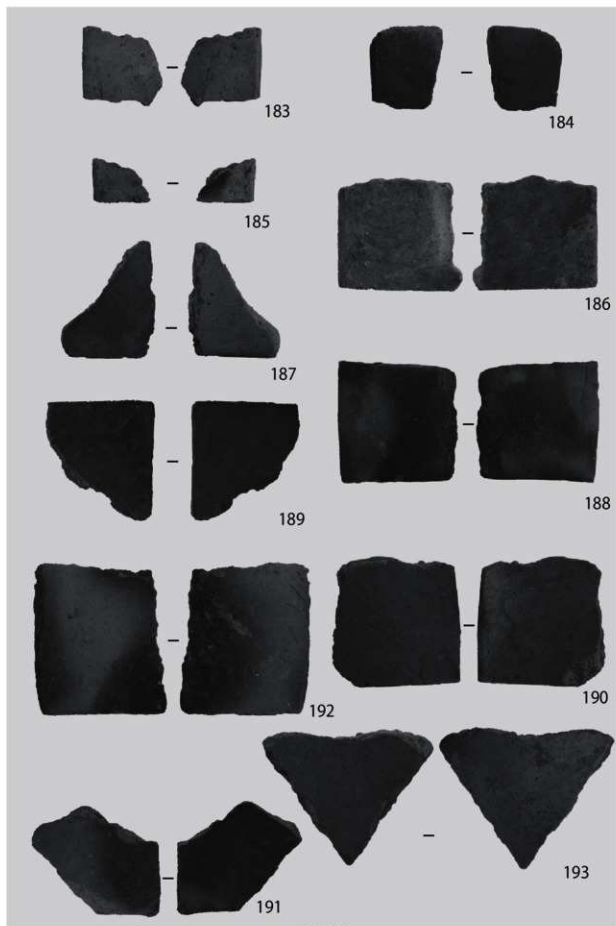
SK29 出土遺物 1

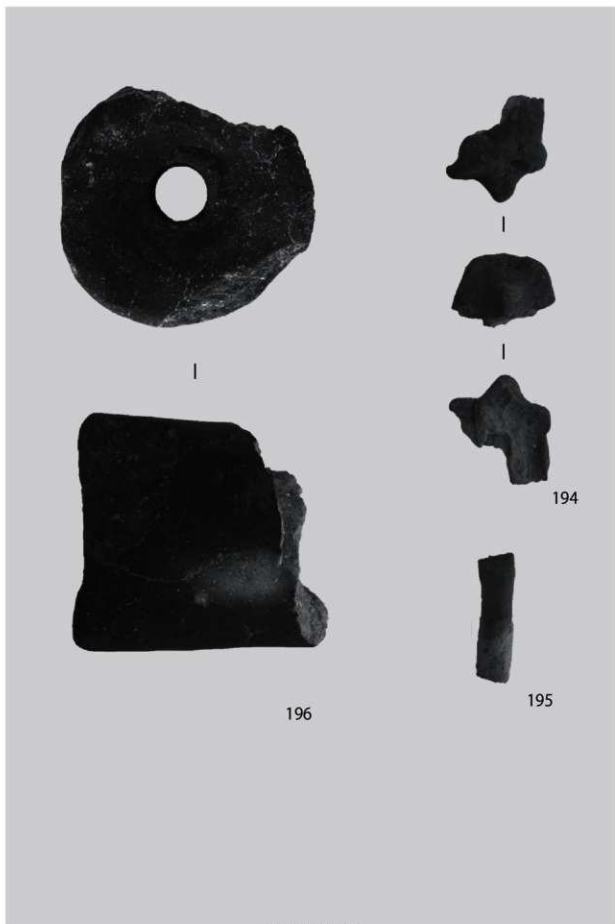


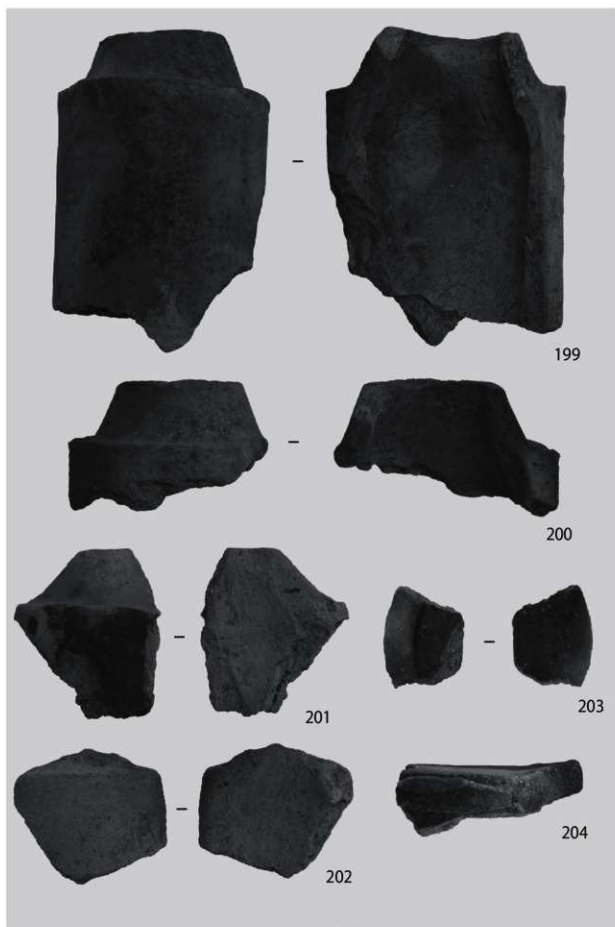


SK29 出土遺物 3

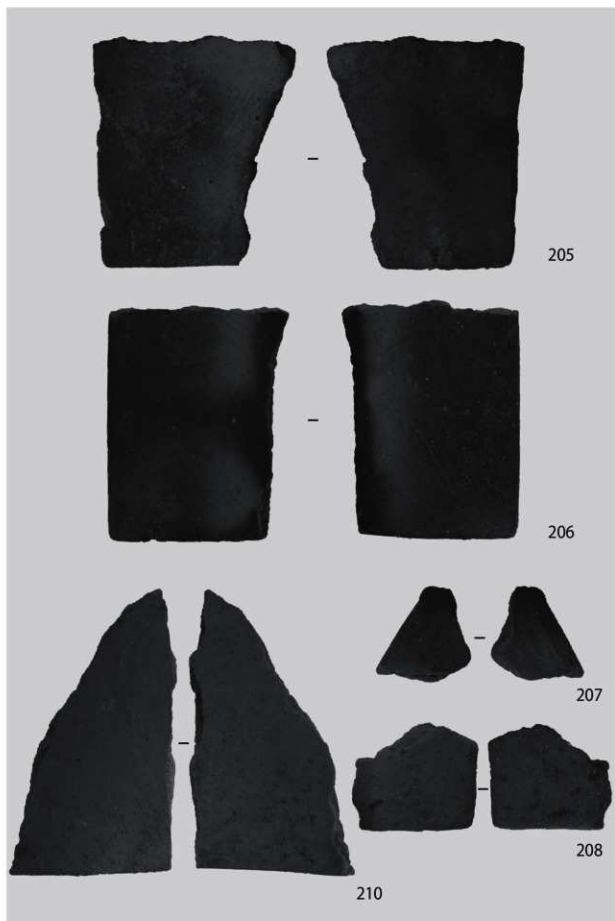
图版 34





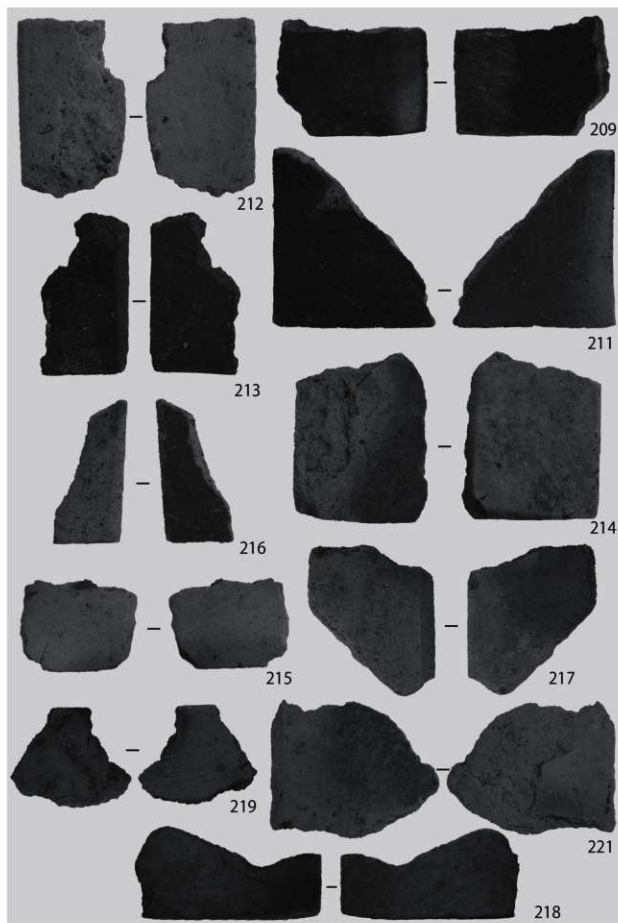


E8 トレンチ出土遺物 1

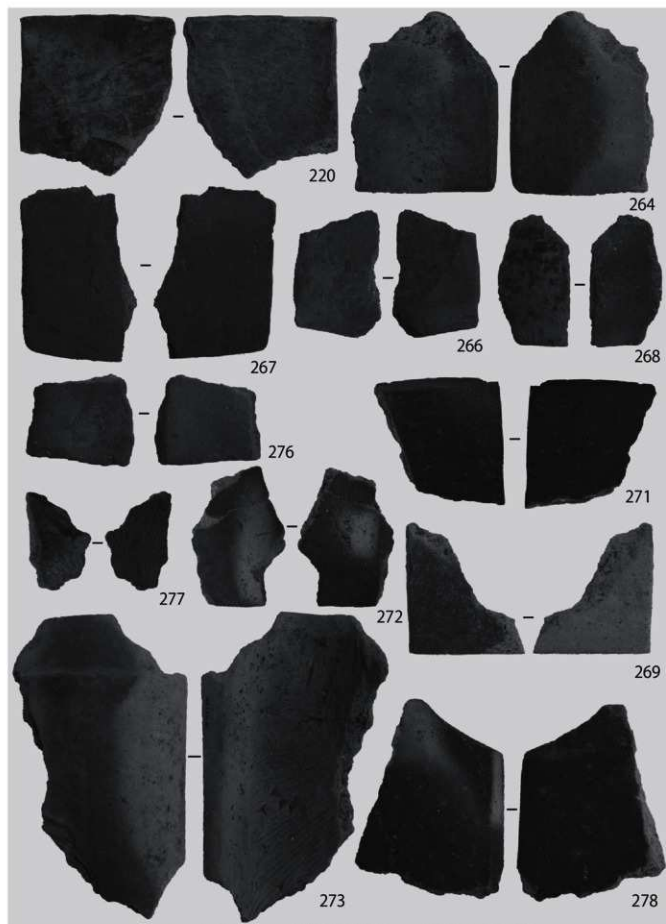


E8 トレンチ出土遺物 2

図版 38

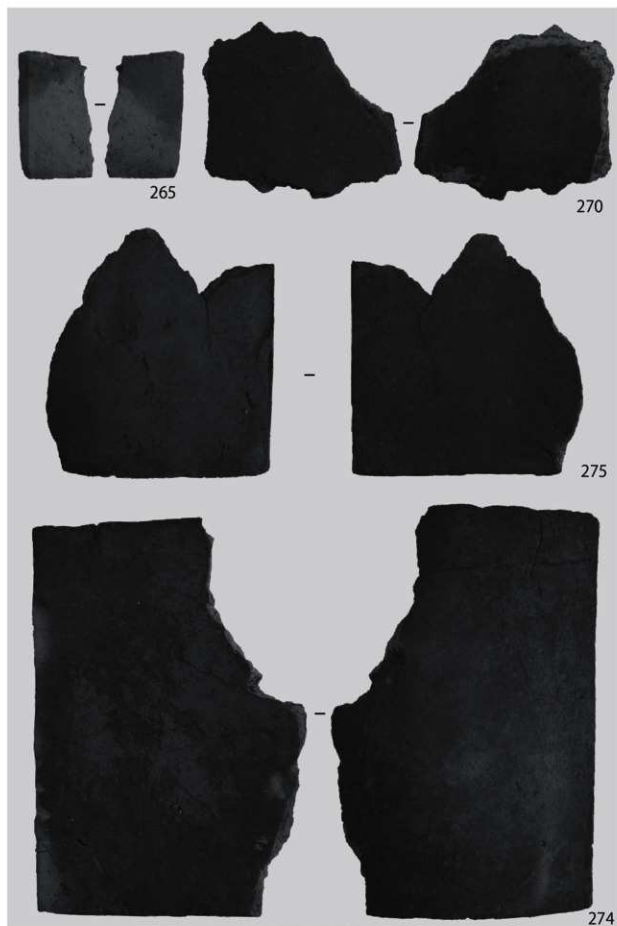


E8 トレンチ出土遺物 3

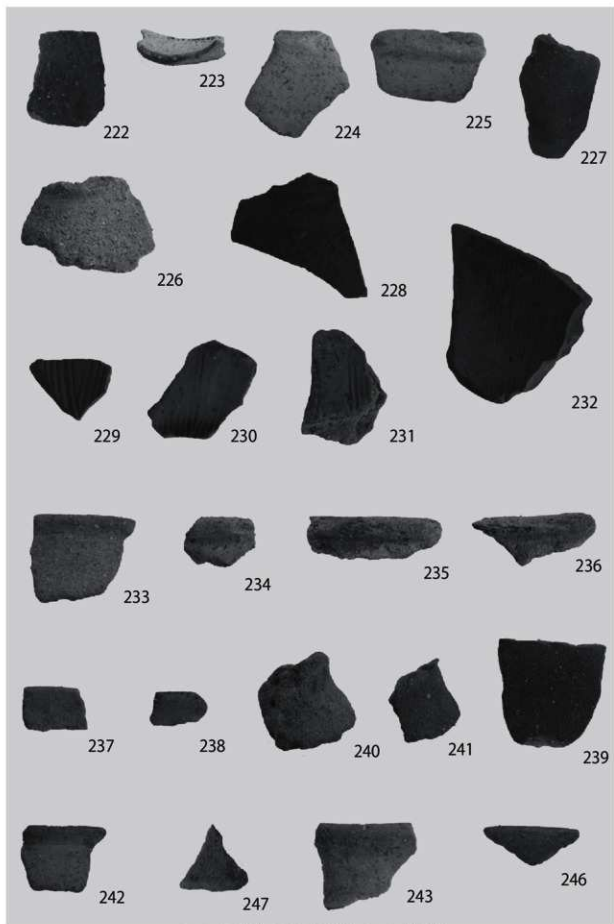


E8 トレンチ出土遺物 4・E8 炭化物層出土遺物 1・E8 炭化物層下出土遺物

图版 40

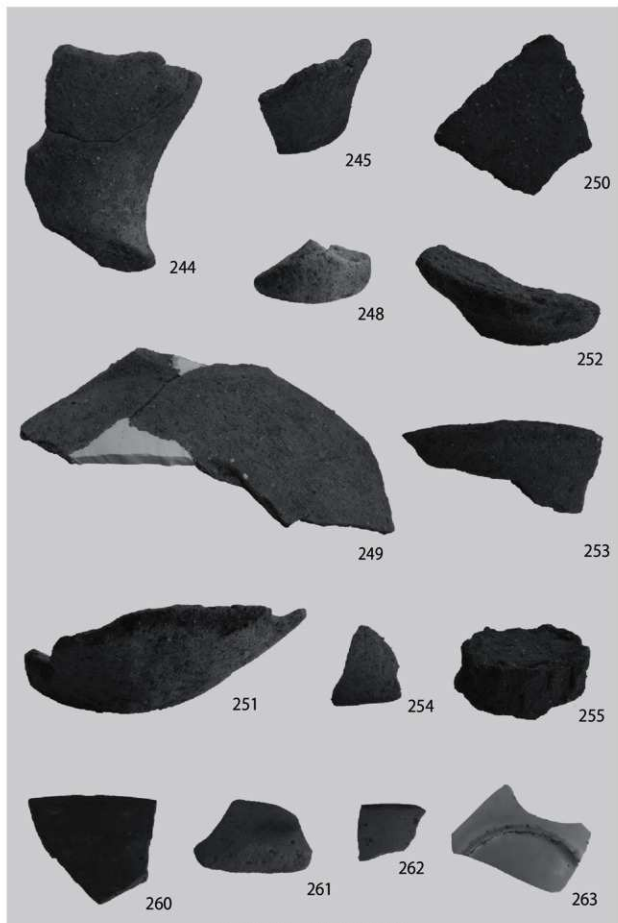


E8 炭化物層出土遺物 2

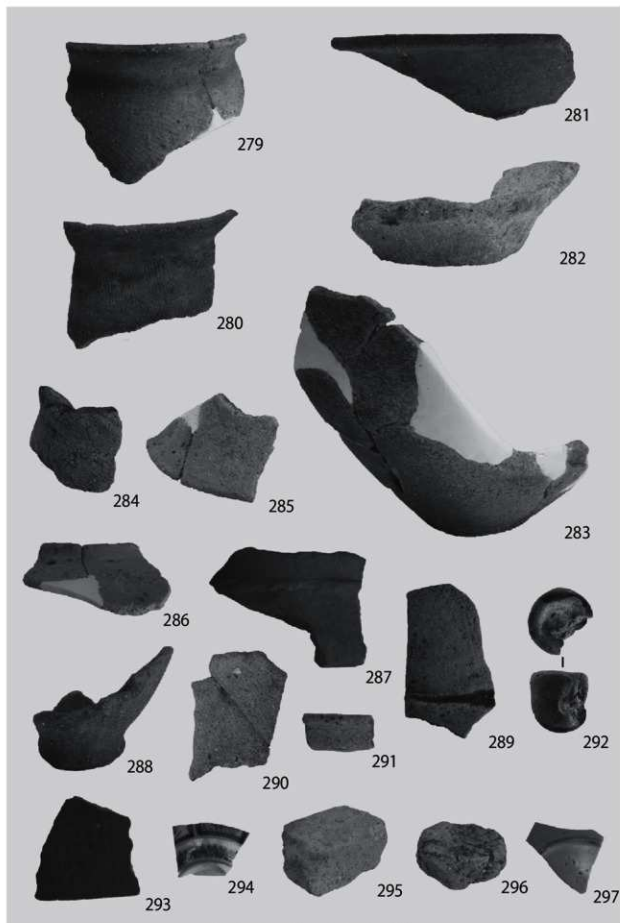


SD10 出土遺物・SD32 出土遺物・SK12 出土遺物

图版 42

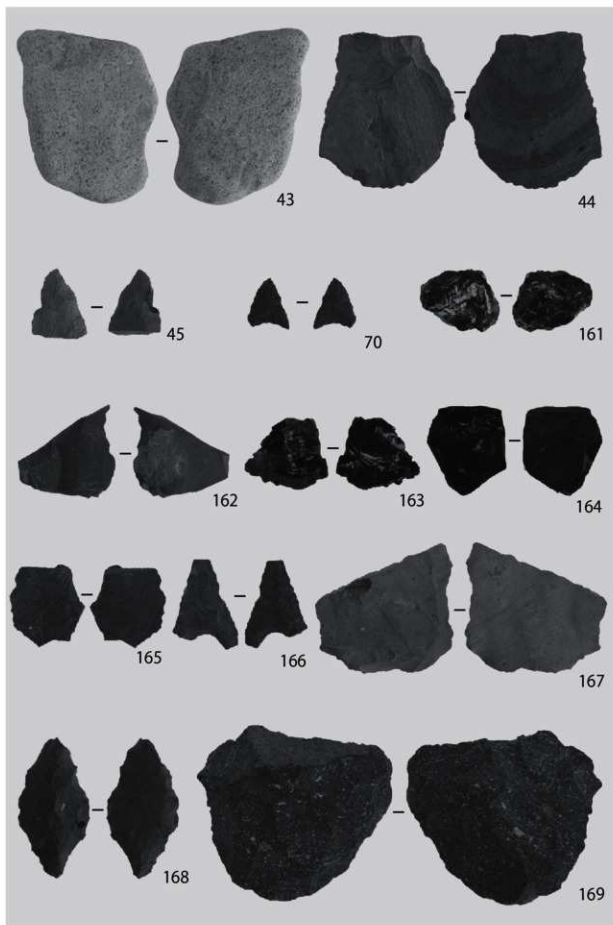


SK12 出土遺物・炭化物層出土遺物 1

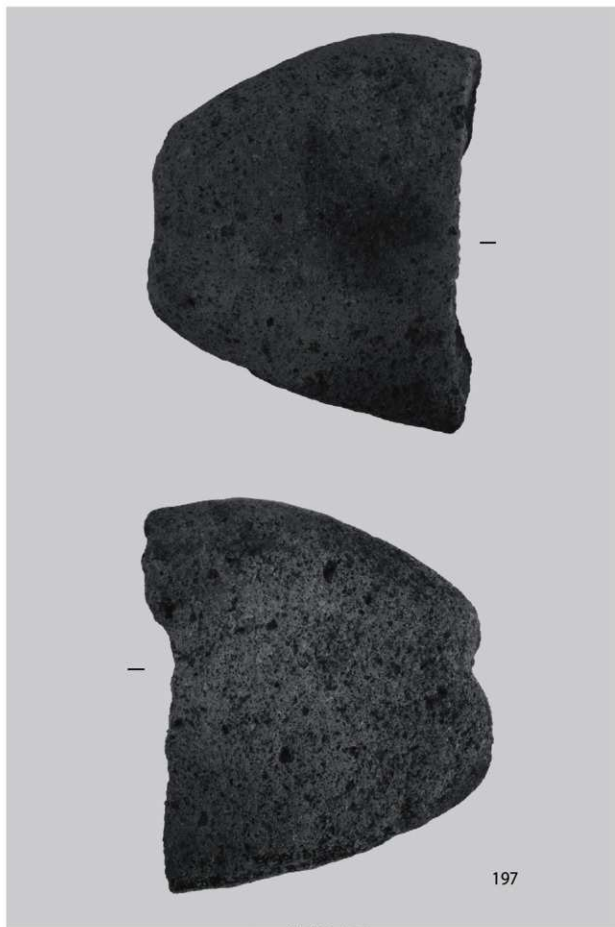


炭化物層出土遺物 2・包含層出土遺物

图版 44



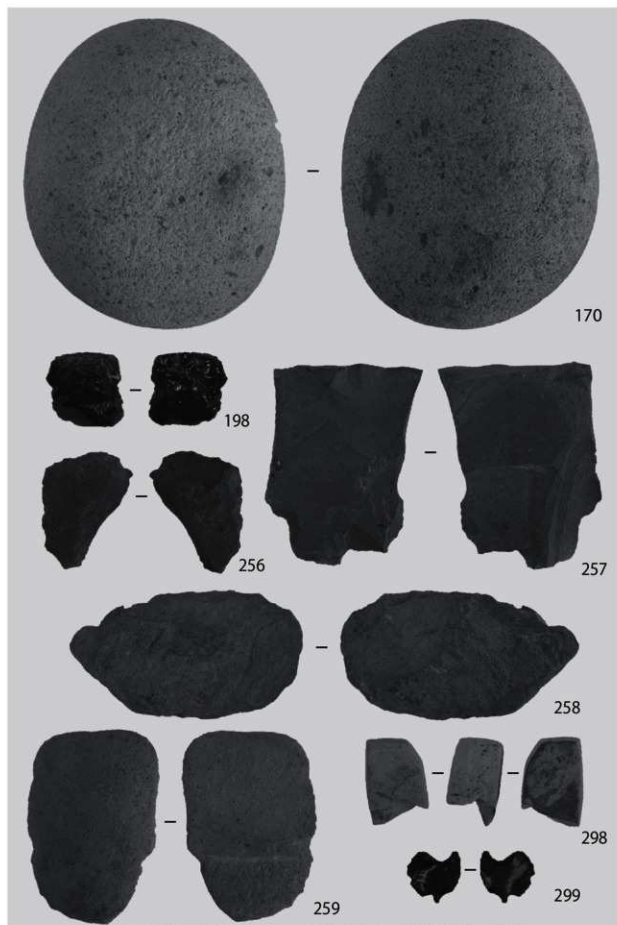
SK11 出土遺物 (石器)・SK26 出土遺物 (石器)・SD27 出土遺物 (石器) 1



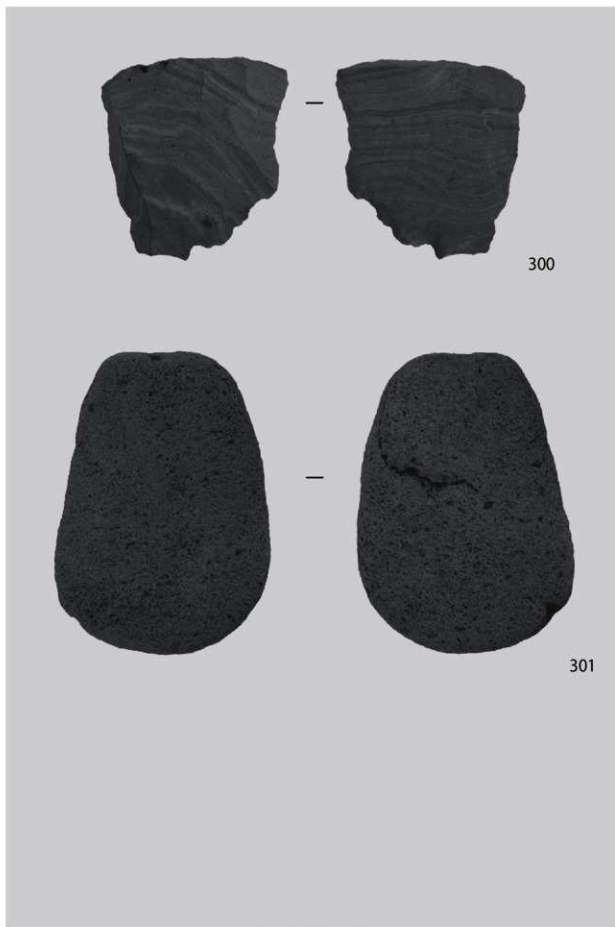
197

SK29 出土遺物（石器）

图版 46



SD27 出土遺物 (石器) 2 · SK12 出土遺物 (石器) · 包含層出土遺物 (石器) 1



包含層出土遺物（石器）2



IV区出土窯燒成團連遺物



SK35 出土馬骨

報告書抄録

ふりがな	きぶねにしいせきⅡ							
書名	木船西遺跡Ⅱ							
副書名	一級市道岱明玉名線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査							
シリーズ名	玉名市文化財調査報告							
シリーズ番号	第45集							
編著者名	宇田貞将 菊池直樹 古森政次							
編集機関	玉名市教育委員会							
所在地	〒865-8501 熊本県玉名市岩崎163							
発行年月日	2020年2月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		㎡	
木船西遺跡	玉名市 岱明町 下前原	43206	461	32° 55' 32"	130° 32' 00"	平成29年9月1日 ～ 平成30年1月31日	900㎡	市道改良
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
木船西遺跡	包蔵地	弥生(後期) 中世 近代		土坑・溝 土坑・溝 ・道路状遺構 土坑・溝・石垣 ・道路状遺構		弥生土器・石器 土師器・青磁・白磁・瓦質土器 ・瓦 陶器・染付		
要約	<p>木船西遺跡は真船集落の西側の浸食谷と人工水路である友田川に挟まれた段丘平坦地に位置する。木船西遺跡の東側の浸食谷は大原遺跡との境であり、また、友田川は下前原遺跡との境である。木船西遺跡の1～Ⅲ区はこの細長い段丘平坦地上にあたり、弥生時代中期初頭から弥生時代後期後半にかけての集落が存在していたことが発掘調査から明らかとなった。今回調査したⅣ区は木船西遺跡の西側を境とする浸食谷が横出され、木船西遺跡の集落が東西の浸食谷に囲まれた段丘平坦上に存在していたことが判明した。</p>							

玉名市文化財調査報告 第45集

木船西遺跡Ⅱ

一級市道岱明玉名線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査

令和2年2月6日印刷

令和2年2月28日発行

編集発行

玉名市教育委員会

〒865-8501 熊本県玉名市岩崎163

TEL 0968-75-1136 FAX 0968-75-1138

印刷

有限会社 玉名民報印刷

〒865-0015 熊本県玉名市亀甲261

TEL 0968-72-2535 FAX 0968-72-4648

